三十八年遠洋漁業成績表　（其二）本表は韓海サカレン露領沿海州方面出漁の分を掲ぐ

郡市	船數	乘込人員	漁獲物價格	漁船一艘ノ所得	乘込人員一人當所得
長崎市		人	円	円	円
佐世保市					
西彼杵郡					
東彼杵郡					
北高來郡	一六六	一、一八四	一二五、八〇〇	七五八	一〇六
南高來郡	一九三	一、一八九	四一、七八〇	二一六	三五
北松浦郡	二〇	四九〇	七八、〇五二	三、九〇三	一五九
南松浦郡					
壹岐郡	四	四八	四、〇〇〇	一、〇〇〇	八三
對馬	一三	五二	三、二七五	二五二	六三
合計	三九六	二、九六三	二五二、九〇七	六三九	平均 八五

郡市	船數	乘込人員	漁獲物價格	漁船一艘ノ所得	乘込人員一人當所得
長崎市		人	円	円	円
佐世保市	三三	二二九	一四一、四七六	四、二八七	六一八
西彼杵郡					
東彼杵郡	八〇	四六〇	二一、三五〇	二六七	四六
北高來郡	二二	一五七	二一、六〇〇	九八二	一三七
南高來郡	一三〇	七二〇	三三、三六九	二五七	四六
北松浦郡	一三	一一九	二〇、〇七一	一、五四四	一六七
南松浦郡					
壹岐郡					
對馬	五	二三	二、四四五	四八九	一〇六
合計	二八三	一、七〇三	二四〇、三一一	平均 八一四	平均 一四一

遠洋漁業船製造補助

本縣にては斯業振作の必要を認め三十六年縣令第十三號を以て遠洋漁船費補助規程を發して奬勵した る結果現今右補助に依りて新造船約二百艘を增さんとし遠洋漁業に從事するもの又如上の勢を示せり

第五節　製鹽事業

本縣內各郡至る處行はれ八十五丁九反歩の鹽田と七十五の竈とを有し二萬一千三百三十一石を製す其茲に特記すべきは長崎製鹽株式會社及三菱製鹽所なり。

長崎製鹽株式會社は明治三十四年資本金拾萬圓を以て創立し工場を港口西彼杵郡福田村海岸に設け二

箇の蒸氣汽罐を裝置しポンプを以て海水を引き之を數十の鐵槽に送り蒸氣結晶せしめ一晝夜約三千五百斤を製す製鹽は一事業期を十七晝夜とし昨三十七年中には十二回作業せり其産額七十八萬五千斤價格七千四百三十圓なり。

三菱製鹽所は高島端島に之を設く、高島端島は由來同三菱會社經營の炭坑ありて事務員、職工、工夫の居住するに拘はらず天水の外一滴の飲料水をだに得ること難き孤島なるが故に壯大なる蒸氣機關を裝置し海水を蒸溜して之に充て客年之と共に製鹽の計畫を爲したり。然れども之が爲めに別に汽力を增大する必要なく、誠に一舉兩得の事業にして甚有利なり、されば將來益整頓するに至らば一箇年約千三百萬斤の食鹽を産出すべき豫定なりといふ。

其他縣下最多額を製出する地方は彼杵灣(喜々津、松山、川棚、廣田)の鹽田約七十町製出高二萬石を最とし平戸海の二十町約二萬石之に次ぎ千々石灘の四町二反約六百石壹岐海の六反約三十石にして五島列島は舊藩の頃之が製産の法を講じたりしも何等獲る所なかりしとぞ。

鹽務局支局

鹽專賣法の實施せられてより本局を長崎市内に出張所を六箇所に於けるが四十年六月中の縣下製鹽額は左の如しといふ。

本局直轄	二七七、三六〇斤	佐佐出張所	三一九、一七〇斤
喜喜津出張所	一七五、五四〇斤	島原出張所	二四、五一〇
早岐出張所	四五七、七四〇		

第六章　鑛業

第一節　石炭

本縣は有名なる石炭の產地にして其の鑛脈の豐富なる採炭事業の盛大なる全國中福岡縣を措て他に及ぶものなし世人の口に膾炙する高嶋、端島の炭坑を始め松島、佐世保、世知原、佐々、福島、山の田の炭坑等大小の鑛區百四十六箇所坪數千七百九萬坪にして最近の統計に依れば採炭高七億三千二百九十萬斤價格實に百六十五萬圓の巨額に達す之を郡市別に表示すれば左の如し。

郡市	箇所	坪數	採掘高	價格
佐世保市	三	一六四、八六三	一、六九一、六一〇斤	二、二七一、〇五〇
西彼杵郡	六	四、六四六、一五四	二五七、〇七五、九八四	一、〇八二、五九五、六四〇
東彼杵郡	六	一九五、六四二	三、九二四、九〇三	四、九三五、三四〇
北松浦郡	一三九	一二、九三三、〇〇〇	五〇二、三二四、六二二	七四一、〇八六、三五〇

高嶋及端島炭坑

發見及沿革

本坑は北緯三十二度、東經百二十九度。長崎縣肥前國西彼杵郡高島村に在り。支山は高島の西南凡そ二海里、全郡高濱村沖合字端島に在り端島炭坑と稱す。

高島　發見の年代は舊記の據るべきものなきを以て詳ならずと雖、口傳に依れば今を去る凡二百年以前より石炭の存在を認識せられたるものの如し。寶永の頃、肥前平戸の領民五平太なるもの對岸深堀村より渡來して開坑採掘し、近傍諸鹽田に廻送せることあり。文化の末年に及では佐賀藩主の有に歸し、採掘する所多くは四國中國等沿海諸國に廻送し以て鹽田用に供せりと云ふ。明治元年藩主鍋島閑叟、其臣松林源藏をして英人「グッバー」と協同して字本村に於て初めて洋式の方法に依り深さ百五十尺の竪坑を開鑿し、上八尺炭層の採掘に著手せしむ。同四年、十八尺炭層採掘の目的を以て別に深さ百三十八尺の竪坑を字小濱に開鑿す。是に於て甲を北渓井坑、乙を南洋井坑と稱せり。同六年日本坑法令更布の時に及び政府收めて官有となし之を工務省の所轄に屬せしむ。同七年十二月後藤象次郎の有に歸す。同九年胡麻五尺炭層採掘の爲め更に横坑を字小濱に開鑿す。時に北渓井坑は潮水浸入の爲め採掘を繼續すること能はず猶巨額の炭量を貽し終に廢坑するの止を得ざるに至りしを以て南洋井坑を改めて第一坑、新横坑を第二坑と稱するに至れり。同十四年三月に至り三菱の有に歸す。爾來專ら諸器械を增設し、益〻事業の改良擴張を謀り同二十二年に至り又字中山及百間の二ヶ處に横坑を新開せり。此際は即ち當坑隆運最盛の時期にして一日の產額は常に千二百噸を超えたり。而して第二坑は二十三

年に、第一坑は二十五年に既れも採掘を終了せしを以て更めて中山坑を第一坑、百間坑を第二坑と稱せり。三十二年七八月の交に至り第二坑は採掘終了近きたると同時に坑水增量、到底永く命脈を維持するの望なきに至り終に同年十月を以て廢坑に歸し、爾來採炭は專ら第一坑にのみ依ることゝなれり。之より先き第一坑も坑口より延長凡そ三千呎にして一大斷層に遭遇し、爾來經營百端或は右より或は左より苦慮探求を試みしも殆ど好果を收むるを得ず。一時或は一種の炭層に遭遇せしも厚薄常ならず、加ふるに傾斜殆ど直下し、水量漸く增加し操業上の困難亦名狀すべからず、終に多大の勞力と經費を擲ちたる末三十一年十一月に至り、上八尺層に著炭せり。是に於て鋭意掘進し採掘區域凡七萬餘坪に達するに至れり、斷層の續出、湧水の增加及坑口と距離遠隔して運搬愈〻困難を加へ、營業上本坑により尙ほ之を進むること不得策なるを認め、遂に斷然退掘に着手し三十八年六月十九日を以て本坑の採炭を終結せり。而して一方には豐富なる數種下層の採掘を謀らんが爲め三十二年を以て本嶋の西部字保木上に於て螭瀨坑の名稱の下に深さ五百五十五呎及六百三十七呎の二竪坑開鑿に着手し、幾何もなくして兩坑共に著炭し各般附隨の工事を經營して遂に今日に及べり。

端島　發見の年代は高嶋と同じく詳ならず。明治の初年薩佐賀藩深堀氏創業に著手せしも種々の故障に遭遇し屢〻廢坑するに至りしが、同二十年に至り第一層上八尺炭層採掘の目的を以て第一炭坑を島の東北部に開鑿し、漸く正式の工事を始めたり。同二十三年九月一日三菱の有に歸してより諸般の改良を施し專ら從來の溜水排除に從事し、翌二十四年二月に至り掘進工事を開始せり。同二十六年島の東南部に第二竪坑を開鑿し、深さ五百三十呎にして第二層胡麻五尺炭層に着せり。二十七年十二月第四層五尺炭層及最下一丈岩層に着せり。三十年二月第一坑内出火の爲め滿水せしを以て第一層八尺炭層の採掘を中止し現今第二第三兩竪坑により採掘せり

最近一ケ年間石炭產出高

年別	塊炭	粉炭	合計
三十八年	五二、七八三、六七	一六九、二七六、一五	二二二、〇五九、八二
三十九年	四二、五一九、六一	一一一、一六三、二〇	一五三、六八二、八一

其他の炭坑

西彼杵郡の內浦炭坑（松島村）北松浦郡の松浦炭坑（世知原村）福島、――江迎、――志佐、――佐々、――相浦、――今福の各炭坑及佐世保、山ノ田等の炭坑何れも規模大にして新式の設備に依り盛に出炭せり。

若し長崎港外を航し松島に出で佐世保を經て更に深く北松浦郡の地方を一巡せば到る處煤烟高く天に沖し帆檣常に港頭に林立するを見ん以て縣下採炭事業盛大の一班を知るべし地下深く無盡藏の寶庫を收め地上到る處海運の便あり天惠地利を享有せる本縣礦業界の前途實に多望なりと謂ふべし。

近時發見せられたる崎戸炭坑は炭層深く炭脈廣く最も有望なりと稱せらる著炭の曉には本縣鑛業界更に一段の繁盛を見るに至らん。

第二節　金、鑛

波佐見金山

縣下上波佐見村金山谷は嘗大村藩主の採掘したることありと傳へられたるものなるが去三十年一月鹿兒島の人祁答院某の經營の下に一日優に鑛土二十萬貫以上を採鑛するといふ。且同鑛山の野邊工學士が鑛泥製錬法を發明してより其捨場に苦しみし鑛泥は一朝有益なる製錬材料となり多量の金分を採取することを得るに至れりといふ。其他銀、鐵、亞鉛の諸鑛等あれども特に之を記さず。

今三十八年中採掘せる各鑛物の統計を示せば即左の如し。

	鑛區數	採鑛高	製錬高	價格	鑛區坪數
金	一	二、〇八九、三四〇	一三、五三五、七三	六七、六七九、三七八	五九二、二五八
銀			四二、三四四、二七	六、二六七、五三五	
鐵		四六、四五六			四九四、六六七
鉛（金銀銅鉛亞鉛）	一	四一二、五八〇	四六八、〇〇〇	七〇、〇〇〇	
鉛（銀鉛亞鉛）	四	二八、六四九	七〇〇斤	六三、〇〇〇	七一一、六九八

第三節　鑛泉

九州の地火山に富む。東に阿蘇山あり。南に霧島山あり。西に溫泉岳あり。壯大なる自然の光景は崇高の性格を與へ、湧き出づる鑛泉は愚安を與へ病苦を癒治す。小濱溫泉は本縣屈指の溫泉場たり。殊に鑛泉湧く處波浪常に礎石を洗ふ。地既に閑雅浴し終へて櫛に凭れば千々石灣內漁歌棹聲相呼應し帆影去來の狀之を一眸に收むるを得べし。溫度は百三十一度乃至二百十二度、痛風、皮膚病、僂麻質斯、骨膜炎等に効あり。詳しきは南高來郡の欄を看るべし。

其他西彼杵郡の道ノ尾溫泉、壹岐郡鯨伏村の湯ノ浦溫泉あり。前者は冷泉、含鐵炭酸泉にして、氣管支加答兒、肺勞、痔疾、痲病等に後者は胃腸加答兒、肺結核等に特効ありといふ。

第七章　林　業

本縣の森林は地勢上及經濟上の關係に因り其の林相千差萬別にして複雜を極む往昔にありては樟、欅、松、杉其の他大材巨木を產出したる森林乏しからざりしも維新後林政稍〻弛廢したると近年商工業の勃興に伴ひ木材の供給增加せしとに因り殆と舊態を留めざらんとせしが漸く森林に關する制度成り官民共に斯業に關する智識を進め到る處造林の經營を爲すもの漸く多きを加ふるに至れり本縣下に於ける公有林社寺有林及私有林の現況を擧ぐれば左の如し。

用材林	一萬三百八十町歩	天然林	二分三厘	人造林	七分七厘
薪炭林	二萬七千九百十六町歩	同	九分五厘	同	五厘
用材薪炭混淆林	一萬四千七百六十九町歩	同	七分五厘	同	二分五厘
竹林	千九百二十町歩	同	九分六厘	同	四厘
未定木地	八百九十三町歩				
計	五萬五千八百七十八町歩				

人造林の樹種は松最も多く杉之に亞ぎ扁柏、花柏、椹、檜等亦尠からず、由來本縣の地味と氣候とは森林の繁茂に適し運輸亦便利なり此天然の地勢は即ち本縣の林業をして有望なる發達を遂げしむべきを信ずるなり。

本縣森林樹種の主なるもの左の如し。

一、針葉樹にて

杉、扁柏、花柏、黑松、赤松、樅、栂、槻、羅漢松

一、濶葉樹にて

樟、欅、麪櫧、血櫧、ナラバ櫧、イチヒ櫧、楓、檉、枹、檜、アベマキ、栗、椎、マテバシイ

森林原野の面積

本縣は肥前國の過半と壹岐、對馬の兩國を管轄し其廣袤二百十三方里に亘り而して森林面積は本縣全面積の約百分の五を占む。之を所有別に示せば其の箇所四萬五千二百八十二にして、面積八萬九十七町歩なり。

內譯			
國有林	二萬四千二百十九町歩	千五百二箇所	
公有林	六千四百五十九町歩	千八百七十八箇所	
社寺有林	百十二町歩	五百八箇所	
私有林	四萬九千三百七町歩	四萬千三百九十四箇所	

一、原野面積二萬九千二百九十一町歩　十七萬五千五百八十七箇所

内譯

國有原野	三千八百三十七町歩	三千六百五十三箇所
公有原野	七千七百六十八町歩	四千七百四十七箇所
社寺有原野	四十一町歩	八百八十二箇所
私有原野	一萬七千六百五十町歩	十六萬六千三百五箇所

森林の生産量

公有林、社寺有林、私有林に於ける主要なるものの一ヶ年産額は左の如し但し明治三十八年の調査に依る。

種類	用材 数量	用材 價額	薪炭材 數量	薪炭材 價額
扁柏	二、二二七㌧	一、三八六圓		
杉	五六、一七九	七九、八四三		
松	一〇三、五六七	一九一、八〇五	四二、五七八	六七、三八七
樅	一、五六三	四、三〇二		

種類	數量	價額
栂	〇一三	〇一四
椿	一八一	九九一
橡	一、七九四	一、九四七
栗	四三八	五六一
樺	一六九	一、九八四
其他の木材	四、四五一	四、五二七圓
計	一六八、五八二	二八七、三六〇圓
苦竹	二六、九六四㌧	七、九二六圓
淡竹	二九、九九一	一一、三四九
南竹	三二〇	三、三二三
江竹	二七、七六六	三、四一一
其他の竹	八五、〇四一	二三、〇〇九圓
計		

森林産物雜類

種類	數量	價額
丸材	一二〇、六四九㌧	二六〇、五二三圓
大角材	八八、〇六九㌧	五一、一〇四
挽材	、六〇〇㌧	、一一二
鐵道枕木		

摺	木材	〇五〇〇	二〇〇
包装用	木材	一、五〇〇〇	一、一五〇
車輛、馱用	木材	四五〇〇	三六〇
下駄	木材	二、六七七	三、四六二
製紙原料	木材	七、三二〇	〇五三
杉	皮	五六、三八八	九、九七〇
竹	皮	四、四九二	四、九四
苗	木	三、三六四、七九九	二四、七九五
種	子	〇〇五	〇二三
樹	實	二一三	六六四
五倍子	皮	七、六二九	一、三一九
染料	皮	一五、五四〇	二〇七
木炭	皮	二、〇三六、五七三	八四、三九八
椎	皮	三七、九九〇	一七、五六九
松	皮	六九二	一四二
諸菌類	草類	〇〇九	〇〇六
自然生疏菜	草類	一〇、四九八	八〇一
下草	草類	三一、九六八	五〇六
獸皮	皮類	一四二	五〇一
石	類	二四七、一九五	三四、二七二
土	類	三四、一〇〇	一、二二六
棹	類	七二、七二四	補四三、七五四
同	腦類	一〇三、五七三	仝三二、七二五
計	油		五六九、三二五

木材の使用消費高

明治三十八年中本縣に於て使用消費せし木材は左の如し。

用材　二十三萬四百五十三尺〆

薪炭材　五十九萬七千五百六十八棚

右の內縣下の民有山林より供給せしものは用材七萬五千四百十八尺〆薪炭材二十六萬二千八百十六棚に過ぎず。其不足は縣內縣有山林より幾分の供給を受くるとするも多くは他縣よりの輸入を俟て其需用を補ひつゝあり。

林業奬勵に關する施設

一、本縣の模範林經營

本縣は管內適當の林野を選び、松、扁柏、樟、檪の模範林兼基本財產養成林一千町歩を明治四十二

年度以降十ヶ年の繼續事業として設定すべく計畫し先づ其準備事業として明治四十年二月、東彼杵郡西大村並松郷に育樹苗圃を創設し現に杉、扁柏、樟の苗木を養成しつゝあり。

現在の苗圃反別は三反六畝二十歩なれども四十一年度には約三町歩に擴張し連年杉苗五千本、檜苗十二萬本を養成して以て漸次殖林を圖るべき筈なり。

一、林業技術者の設置

本縣に於ては明治三十六年始めて林業技術者を傭聘し爾來縣下一般に於ける斯業の指導幷に督勵に努めたりしが其結果として到る所益〻林業思想を喚起し樹種の改良、原野の殖林等即ち森林事業の經營逐年旺盛に赴き且つ其事業上見るべきもの有るに至れり。

一、各郡市町村其他公共團體の林業奬勵施設

南松浦郡

郡の事業としては杉、松、扁柏などの苗木を養成し無代價にて各村に配付し村又は部落基本財産造成の爲め公有林野に連年植栽せしむ。又郡内各村の公有山林原野を速かに造林せしむるの目的を以て一ヶ年一町歩以上植栽するものに對し明治三十六年度より郡費を以て補助金を下附せり。其金額は植栽面積に依り差違あれ共一町歩に付金十八圓を下らず豫算の總額は毎年三百六十圓なり。

崎山村農會に於ては同村各部落基本財産造成の目的を以て苗木を養成し之を無代價にて配付し各部落の林野に植栽せしむ。福江村に於ては同村小學校基本財産造成の目的を以て苗圃を設置し杉苗の養成を爲せり。

壹岐郡

郡の事業としては杉、扁柏、松、樟の苗木を養成し之を郡内一般の造林家に時價の半額又は無代價にて配付植栽せしむ。其の總數十餘萬本に達し今後一層擴張し大に斯業の發達を圖らむことを期せり。

東彼杵郡

郡の事業としては杉、扁柏、松、樟、檜等の苗木を養成し之を廉價にて郡内一般の造林家に配付し植栽せしむ。

竹松村は同村小學校基本財産造成の目的を以て松苗木を養成し十箇年間の繼續事業として村有原野に明治三十四年より連年植栽し居れり。

上、下縣郡（對馬）

郡の事業として明治三十五年以降杉、扁柏、樟等の苗木を養成し郡内一般の造林家に無代配付をなし盛に植栽せしむ。尤も最初は毎年五十萬本の苗木を養成配付せしも明治三十九年度より之を擴張し百萬本づゝ配付することゝなせり。

北高來郡

郡農會の事業として明治三十六年度より樟苗木を養成し之を郡内町村農會の造林者に無代配付し植栽せしむ。

小江村は明治三十一年より公有林野に造林の計畫を立て爾來三十箇年間の繼續事業として杉、扁柏松、樟、櫟等の苗木を養成し又は苗木を他より購入して連年植栽を爲し基本財産の造成に努む。

北松浦郡

郡の事業として明治三十九年度より杉、扁柏、松、樟などの苗木を養成して之を各村に無代配付し又同種子を各村に無代配付して苗木を養成せしめ以て一般の造林家へ植栽せしむ。其數樟種子一石八升、杉苗十四萬四千本、扁柏苗五萬四千本、松苗十萬八百本。

郡農會は各村農會へ杉、扁柏、樟、櫟等の種子を無代配付し以て苗木を養成せしむ。

南高來郡

郡農會に於て明治三十六年度より樟苗を養成し之を郡内各町村農會の希望者に無代配付をなし植栽せしむ。

一、著名なる民林所有者の住所氏名及森林面積幷に其地況林相の大要

著名の林業家及其經營狀況

所有林面積	地況	林相	住所	氏名
一六〇ヘ	平坦の地少く主として忽傾斜地とす	主として十年生位の雜木林にして樟を混ず	西彼杵郡茂木村	伊達木寅太郎
一二〇	同上	二三十年生の松及雜木林にして杉、扁柏、少數あり	同郡蚊燒村	桑原熊太郎
二七六	北方に面せる傾斜地なり	松六分杉、扁柏二分雜木二分にして繁茂す	南高來郡神代村	鍋島桂次郎
一五〇	西北に面したる傾斜地にして地味肥沃なり	明治三十五年以來、杉、扁柏、を植栽せしもの也	下縣郡大船戸村	安增寶太郎
一五〇	多く峻嶮にして谿谷あり	近年の植林に係るを以て樹木大ならず	北松浦郡平戸村	伯爵松浦詮
一一〇	同上	同上	同郡山口村	草刈武八郎

戰時紀念林

本縣下に於て日露戰役に關し紀念の爲め植林經營を爲したるもの左の如し。

一、明治三十七年度中實行せしもの。

松、　廿四町三反歩　　廿五萬四千五百本

杉、　五百五十二町八反九畝十歩　　二百三十四萬七百九十七本

扁柏、　七十九町八反九畝十歩　　二十六萬五千六百八十本

樟、	五十三町五畝五歩	十三萬千七百五十五本
計	七百十町一反四畝十歩	二百九十九萬二千七百三十本

一、明治三十八年度中實行せしもの。

杉、	百十九町九反七畝二十三歩	百十七萬八千七百十七本
扁柏、	三町二反一畝十七歩	二萬七千六百三十七本
松、	七十四町二反一畝二十八歩	六十萬九千二百三十八本
樟、	五十三町九反二畝二歩	十六萬八千二百五十二本
計	二百五十一町三反三畝十歩	百九十八萬三千八百三十七本

一、明治三十八年度より計畫中のもの。

杉、	二百三十六町二反二畝十歩	百五十四萬五千四百八十本
扁柏、	十四町二反五畝歩	九萬八千四百本
松、	三百十七町二反八畝六歩	九十四萬八千六百十三本
樟、	十二町三反歩	六萬九千本
計	五百八十町五畝十六歩	二百六十六萬千四百九十三本

椎茸

椎茸は主として對馬に產し、品質精良にして產額亦多し然れども日露戰役の際壯丁は擧つて干戈に從ひ自家の產業を顧る遑なかりしがため其產額甚だ寡かりしが平和克復後產業の發展に連れ椎茸の培養また以前に培養するに至れり。而して當局者は鋭意斯業の改良發達に力を致し數年來椎茸製造巡廻敎師を聘用し以て各所に講習會を開き且つ實地指導を爲す等頗る努むる所ありしが今や著しく其改良の實を擧ぐるに至れり而して其生產總額五萬圓に上るといふ。

公有林野の經營及施設

一、長崎市々有林の經營

同市は巢木財產養成の爲め國有山林六十四町歩を買ひ受け明治三十八年中杉、扁柏、雜木等の輪伐齡以上に達したる老成樹を群生擇伐法に依り伐採せり其伐積杉、扁柏、四千六十二尺〆樟、雜木、三千七百九十二棚、而して伐採跡地には明治三十八年度に於て杉、扁柏、四萬五千本を面積五町歩に植栽し又三十九年度に於て杉、扁柏、九萬四百五十本を面積九町餘に植栽せり。猶將來、林相を杉、扁柏、樟、樅等の重要樹種に改良更新すべく企畫し以て着々其歩を進めつゝあり。

一、北高來郡小江村の森林經營

同村は村有山林三百六十五町歩餘、原野四百四十九町歩餘を有すれども原野は不毛の地多く其收益は農家の肥料幷に牛馬の飼育料たるに過ぎず山林は舊藩制の頃到る處濫伐として樹木繁茂し良材を

得ること容易なりしが維新後木材の需用增加すると共に山林濫伐の弊を生じ復、昔日の觀を存せず。大概雜木立に變じて松、樅、栂、樺等の諸材僅に存在せる狀況なりしを以て明治廿五年村有山林原野伐採規則を制定し薪炭林に對しては輪伐法となし專ら取締を嚴にせしかば年一年に舊弊を洗脫し山林保護の途、此に至つて初めて顯る亦原野には肥沃の地を撰び殖林事業の計畫を立て將來三十箇年間の豫定繼續事業として一箇年四町歩を目途とし着々實行を期せり。其造林の狀況左の如し。

年別	林野別	樹種	植付本數	反別	經費
三十一年	山林	杉	一八、五〇〇	一一、〇〇〇	五五、五〇〇
三十二年	原野	杉	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	四五、〇〇〇
三十三年	原野	杉	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
三十四年	同原野	杉	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
三十五年	同原野	杉	七、〇〇〇	七、〇〇〇	一四、〇〇〇
同	同原野	松	一五、〇〇〇	七、〇〇〇	一七、〇〇〇
三十六年	同原野	杉	七、〇〇〇	一五、〇〇〇	二七、〇〇〇
同	同原野	松	二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇
三十七年	山林	杉	二五、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
同	原野	松	八〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇
同	山林	杉	二五、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三一、〇〇〇
三十八年	同原野	松	二〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	二二、八〇〇
同	同原野	杉	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇
同	同原野	樅	一九、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二二、七〇〇
三十九年	同山林	杉	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇
同	原野	杉	二〇、八〇〇	二三、〇〇〇	五六、二〇〇
計			七、〇〇〇	七、〇〇〇	一九、三〇〇
			三五三、三〇〇	三六七、〇〇〇	五九七、〇〇〇

一、北高來郡湯江村の森林經營

同村は大字湯江村及同字良所有の山林原野を無代價にて譲與を受け明治二十六年度以降毎年杉一萬本以上植栽せり。造林に要する植付及手入等の人夫は總て村民の夫役とし且つ殖林地近傍に番人小屋を建設し常に番人二名を置きて保護監守を怠らず。而して明治四十年度より二年生杉苗二萬本以上を購入し之を村設育樹苗圃に移植し三年生苗となして山林原野に植栽すべく計畫し已に其實行に着手せり。四十年度の苗圃反別は三畝十歩なるも猶漸次擴張の豫定なり。

明治二十六年度以降造林の狀況左の如し。

年別	樹種	植付本數	反別	經費
二十六年	杉	一〇、〇〇〇本	一五、〇〇〇	三一、五〇〇
二十七年	同	一三、〇〇〇	二五、〇〇〇	二八、七六四
二十八年	同	一五、〇〇〇	二五、〇〇〇	三二、一〇〇
二十九年	同	二五、〇〇〇	四一、〇〇〇	八一、四二〇
三十年	同	一六、〇〇〇	二六、〇〇〇	四四、五〇〇
三十一年	同	二四、〇〇〇	四〇、〇〇〇	一一六、七九〇
三十二年	同	一五、〇〇〇	二五、〇〇〇	七一、三〇〇
三十三年	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	五五、九五〇
三十四年	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	八〇、七一〇
三十五年	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	五八、二一五
三十六年	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	五三、五五〇
三十七年	同	八、〇〇〇	一二、〇〇〇	八二、五五四
三十八年	同	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	五四、六五〇
三十九年	同	一八、六〇〇	二九、九〇〇	八五、一、九二三
計				

一、北高來郡有喜村の森林經營

同村は基本財産養成の目的を以て村有原野三十八町壹反廿八歩に對し殖林計畫を立て去る明治三十七年春季より松樹植栽に着手せり其成績は三十年に六町二反五畝歩、三十八年に八町六反五畝歩、三十九年に四町六反五畝十五歩、合計十九町五反五畝十五歩は既に造林を了せしも殘反別に對しては四十年より四十二年に至る三箇年間に於て植栽を了すべき豫定なり。

一、北松浦郡吉井村の森林經營

同村は基本財産造成及戰役紀念の目的を以て村有山林五十町歩に對し三十七年度より四十一年度に至る五箇年間の繼續事業として毎年造林費一百圓を投じ杉、扁柏五萬本づゝ植栽の計畫を立てたり而して五箇年間に於て植付總數廿五萬本の内五萬本枯損すべきものと見做し殘存木二十萬本に對する四十箇年後に於ける一本の價格を壹圓と豫定し總收入二十萬圓を得べき概算なり。

第八章　教育

我國最初の開港場として將洋學傳來の門戸として夙に泰西文學唯一の研究地たりし長崎は維新前後に於て學術の進歩發達著しく一時天下の俊才四方より麕集して殆ど學術界の淵叢となりたり、然るに幾もなく政治の中心は東京に移り學術の研究亦伴ひて彼地に移りたるも尚官立の醫學專門學校高等商業學校等ありて九州に於ける學術界の覇を稱し師範學校一校中學校六校商業學校二校農學校一校高等女學校一校ありこの外外國人の設立に係る中學程度のもの二校高等女學校程度のもの二校あり。

小學校は本校四百二十三分教場八十七あり縣下の地勢離島僻陬の地多きに關せず就學の普及殆ど極度に達し學齢百中就學歩合九十七に上れり校地校舍の設備も大に整頓し義務教育年限の延長に際しても左したる困難なきに至れり。

實業補習學校は多年奬勵の結果九十七校の多きを算し盲啞學校幼稚園等の施設亦略備はれり。左に項を分ちて縣立以下各學校の現況を記述す（統計に關するものは多く本年三月の調査に係る）

○長崎縣師範學校　は長崎市馬場に在り明治七年の創立にして爾來ここに三十餘年縣下教育の爲に貢献したるもの洵に渺からず本科は男子部女子部に分れ生徒三百餘名にして外に教員講習科百三十八名あり現職員校長以下廿四名にして附屬小學校附屬幼稚園あり四十年度經費五萬圓

○長崎縣立長崎中學校　は長崎市岩原鄕に在り明治十七年の設立なるもその前身は長崎外國語學校長崎英語學校長崎中學校等沿革古く本縣における最古の中學校にて又最大のものなり現職員校長以下二十七人生徒六百人にして四十年度經費貳萬千五百圓

○長崎縣立中學玖島學館　は東彼杵郡大村に在り舊藩主大村伯爵の創設に係る元私立中學校なりしを明治三十一年縣立となしたるものにて現職員館長以下十六人生徒三百五十人にして四十年度經費一萬六千二百圓

○長崎縣立島原中學校　は明治三十三年の創立にして南高來郡島原村に在り現職員校長以下十七名生徒三百二十名にして四十年度經費一萬四千百圓

○長崎縣立五島中學校　は明治三十三年の創立にして南松浦郡福江村に在り現職員校長以下十九人生徒二百六十人にして四十年度經費一萬四千四百圓

○長崎縣立中學猶興館　は北松浦郡平戸村に在り舊藩主松浦伯爵の創設に係る元私立中學校なりしを明治三十四年縣立となしたるものにて現職員校長以下二十人生徒三百五十人にして四十年度經費一萬五千四百圓

○總町村立對馬中學校　は對馬國嚴原に在り日本海戰勝紀念として同島總町村聯合費を以て設立せるもの現職員校長以下九人生徒百二十人にして四十年度經費九千圓

○長崎縣立高等女學校　は明治三十五年の創立にして西彼杵郡上長崎村に在り現職員校長以下二十人生徒四百人にして四十年度經費一萬六千圓

○長崎縣立農學校　は北高來郡諫早村に在り甲種程度の實業學校にして本年の創立に係り講堂寄宿舍等尚建築中に屬せり現職員校長以下七人生徒八十名あり四十年度經費一萬千圓

○市立長崎商業學校　は明治十九年の創立にして長崎市馬場に在り元縣立なりしを同廿二年市立となせり創立以來卒業生を出すこと五百餘人に上り商業界に貢献せしこと尠からず現職員校長以下二十一人生徒三百名あり

○私立海星商業學校　は明治三十六年の創立に係り甲種程度の實業學校にして長崎市東山手に在り佛國人エミリエン、ペーレンの設立する所にして現職員校長以下二十一人生徒本科豫科を通じ三百人あり

中學校に類する學校は左の二校にして共に外國人の設立に係り東山學院は夙に徴兵令上中學校同等以上の認定を受け鎮西學院は目下其の申請中なり

私立東山學院	長崎市東山手	明治十七年創立	職員十人	生徒九十九人
私立鎮西學院	仝	明治十四年創立	職員二十七人	生徒三百五十人

高等女學校に類する學校は左の六校にして內梅ヶ崎、活水の二校は外國人の設立に係り他は何れも內國人の設立せるものなり

私立活水女學校	長崎市東山手	明治十二年創立	職員二十七人	生徒三百六十人
私立梅ヶ崎女學校	同	明治廿一年創立	職員十一人	生徒七十一人
私立長崎縣鶴鳴女學校	長崎市伊良林	明治廿九年創立	職員十人	生徒九十人
私立島原女子手藝學校	南高來郡島原村	明治廿四年創立	職員四人	生徒九十五人
私立佐世保女學校	佐世保市	明治廿五年創立	職員十人	生徒百八人
私立平戸女學校	北松浦郡平戸村	明治廿六年創立	職員十人	生徒六十五人

小學校に類する各種學校は四校にして其他の各種學校は二十二校あり何れも漸次盛況を呈せり。

○實業補習學校　は九十六校にして其の中主として農業を課するもの八十九校水產を課するもの二校商業を課するもの三校工業を課するもの二校あり何れも近來教授季節の選定教授日時の配當、教授の方法等特に施設上の改良を加へ大に發展の狀あり

○幼稚園　は公立三私立四にして何れも保育上相當施設を備へ漸次成績を擧げつゝあり

特殊教育に關しては私立長崎盲啞學校私立磨屋町夜學校私立三菱工業豫備學校等成績見るべきものあり左に其の概況を示す

○私立長崎盲啞學校　は長崎慈善會の設立に係り明治三十一年創立以來盲啞を通じ五十三人の卒業生

を出し盲啞教育上良好の成績を擧げつゝあり本年三月文部省より金百圓を賞與せり現職員校長以下八人生徒は男女を通じて百三十人あり

○市立磨屋町夜學校　は明治二十年の創立に係り當時僅かに有志の寄附金等にて維持せる狀なりしに同二十四年露國皇太子殿下長崎御來遊の砌金千圓を寄付せられこれより大に一般の注意を惹き翌廿五年市立となり漸次盛況に赴けり學科は修身、國語、算術、地理、英語にして本科、補習科に分ち生徒は晝間業務の餘暇なきもの即ち商店の丁稚、官廳の給仕、職工、行商等にして創立以來六百二十九人の卒業者を出し良好の成績あり現職員校長以下七人生徒二百人あり

○私立三菱工業豫備學校　は三菱造船所の事業として同所内に設置し造船造機の業に從事する技士技工を養成するを以て目的とす

明治三十二年九月の創立にして卒業者八十六人を出し、現職員校長以下三十三人生徒二百七十四人あり教室其の他の設備の整頓し教育の方法も學科と實業との連鎖面白く實業教育上學ぶべき點多し

○教育會　は縣教育會の外各部に支部教育會ありて系統的に組織せられ本部會に於ては毎年一回總集會を開き又毎月一回雜誌を發行す那部教育會も亦毎年一回若くは二回集會し教育上の討議談話をなし又雜誌を發行するものあり會員は本部二千三百名各支部各二三百名あり

第九章　兵事

舊幕時代に於ける本縣は平戸、對馬、大村、島原、五島及佐賀等の數藩及天領に分屬し、兵制も亦同じからざりしが明治四年廢藩置縣の際從前の藩兵は全く之を解隊し更に常備の大小隊を編制せられしも翌五年に至り徴兵令の發布あり。兵制全く改革せらるゝや本縣は熊本鎮臺の管轄に屬す。同十九年熊本鎮臺を第六師團と改稱したるも其所屬は依然たりき。

同三十年歩兵第四十六聯隊の縣下大村に置かるゝや本縣歩兵は該聯隊に屬するに至り同時に明治二十一年以來設置せる長崎大隊區司令部を大村聯隊區司令部と改稱して、之を大村に移し、對馬を除くの外縣下各郡市は大村聯隊區の管轄する所となれり。明治十九年縣下對馬に警備隊を置く、同島の壯丁は渾て該隊に編入せられ一箇年間在營す。

明治三十二年對馬に要塞砲兵隊、佐世保に要塞砲兵聯隊を置き、同聯隊の所轄として佐世保及長崎の二ヶ所に各一大隊を分置す其の要員は當該師管内各地の徴兵中より徴集せらる。而して同三十六年十二月に至りて該聯隊の編制を改め、佐世保、長崎共に各獨立の要塞大隊となり以て今日に及べり。

從來本縣は第六師管なりしも三十六年より第十二師管に屬する事となれり。

徴募の兵數は二大戰役以來著しく增加せしが、今左に最近三箇年間に於ける徴集人員を掲げむ。

年次	本籍男	壯丁總數	徴收人員 現役	徴收人員 補充
明治三十七年	四四三、四二五	八、八二九	一、七七七	三、六二四
同 三十八年	四四九、三五〇	七、二九一	一、四九三	四、〇五五
同 三十九年	四五五、二六四	七、一一九	一、三三〇	二、二九九

明治二十二年縣下佐世保に鎮守府を置き九州各縣及沖繩を管轄す、其の管内一般より徴兵として水兵を採用するの外、毎年志願兵を徴募す。今最近三ヶ年間に於ける本縣海軍志願兵の數を擧ぐれば左の如し。

年次	志願者	合格者	採用者
明治三十七年	二四〇	六七	一七
同 三十八年	四〇九	九〇	四七
同 三十九年	三七〇	五七	四二

明治二十九年縣下對馬國下縣郡竹敷を海軍要港と定め、同所に要港部を置く。日露戰役中は佐世保軍港と相待て樞要の地點たりしなり。

明治二十七八年戰役以降、戰病死者、左の如し。

戰役年	戰死	病死	計
明治二十七八年	二三	一七三	一九六
同 三十三年	〇	〇	〇
同 三十七八年	三八四	四〇七	七九一
計	四〇七	五八〇	九八七

第十章　神社及宗教

我が長崎市に遊びたる者は市街を繞れる山麓高燥の地は悉く神社佛閣、否らざれば墳墓、而かも殿堂の結構甚宏麗典雅、轉欽仰敬虔の念止むこと能はざるを見む。是實に德川氏が、一時跋扈せし切支丹教を屏息せしめむが爲めに到らざるなき勸誘保護に依りて建立したるものにして從つて神佛に對する長崎市民の敬虔は驚くべきものあるに至れり。

縣内、國幣社三社あり。祭日には奉幣使立ち甚森嚴に、餘興、催し物等頗賑なり。

社格	社名	祭神	所在地
國幣小社	諏訪神社	建御名方命 八坂刀賣命	長崎市西山郷
國幣中社	住吉神社	底筒男命 中筒男命 表筒男命	壹岐郡那賀村
國幣中社	海神神社	豐玉姬	上縣郡木坂村

神饌幣帛料を供進することを得べき神社と指定せられたるもの左の如し。

大村神社　縣社　東彼杵郡大村
高城神社　同　北高來郡諫早村
龜岡神社　同　北松浦郡平戸村
小茂田濱神社　同　下縣郡小茂田村
諫早神社　郷社　北高來郡諫早村
八幡神社　同　南松浦郡福江村
松森神社　村社　長崎市西山
八坂神社　同　長崎市高野平郷
八坂神社　同　北高來郡諫早村
五社神社　同　南松浦郡福江村
宮江神社　同　同　郡富江村
嚴立神社　同　同　郡岐宿村
折紙神社　同　同　郡久賀島村
（第一回分）
皇大神宮　縣社　西彼杵郡浦上山里村
住吉神社　郷社　東彼杵郡廣田村
白鳥神社　同　南松浦郡玉ノ浦村

八幡宮神社	同	下縣郡中村町
伊勢宮神社	村社	長崎市伊勢町
八幡神社	同	同　市八幡町
諏訪神社	同	同　市大浦浦
天滿神社	同	同　同
淵　神社	同	同　竹之久保郷
伊良林稲荷神社	同	西彼杵郡上長崎村
熊野神社	同	西彼杵郡野母村
天滿神社	同	北高來郡北諫早村
八幡神社	同	南高來郡堂崎村
住吉神社	同	南松浦郡福江村
天滿神社	同	同　同
七嶽神社	同	同　玉之浦村
國津神社	同	壹岐郡渡良村
興　神社	同	同　邦賀村
八幡神社	同	同　同
熊野神社	同	同　鯨伏村
比賣神社	同	壹岐郡沼津村

（第二回）

本縣內神社の總數は左の如し。

縣社以下神社員數表（明治三十九年十二月現在）

郡市	縣社	郷社	村社	無格者	計
長崎市			二二	一九	四一
佐世保市			一	七	八
西彼杵郡		一	五九	一一	一七七
東彼杵郡		四	二二	九一	一一八
北高來郡		二	四〇	一七	六〇
南高來郡		五	六〇	一五九	二二四
北松浦郡	三	五	五八	四五六	五二二
南松浦郡		三	三二	一九九	二三四
壹岐郡		一	三一	一五七	一八九
上縣郡			二七	一	二九

寺院數

郡市	天台	眞言	淨土	臨濟	曹洞	黃檗	眞	日蓮	計
長崎市									
佐世保市		四	八	二	七	八	一	三	四一
西彼杵郡			一〇		一〇		二二		四
東彼杵郡	一	三	五		三	一	九	五	二六
北高來郡	一	一	四		一五	三	二四	一	四九
南高來郡		四	五		九		一	八	五七
北松浦郡	二	一三	一〇	一五	二五		三一	五	八三
南松浦郡	一	六	八		一六		六	一	三八
壹岐郡		二	一	一〇	一六			一	三〇
上縣郡		一	二	五	二		一	七	三四
下縣郡	一				二〇				二三
合計	九	三五	五四	三四	一二三	一二	一九	三二	四一七

基督教信徒數

郡市	教會堂數	三十八年末信徒數	三十九年末信徒數
長崎市			
西彼杵郡	一二	一、五九五	一、五四八
佐世保市	一二	一三、三九七	一三、三四七
東彼杵郡	三	二九七	二八七
北高來郡	二	三五九	三四六
南高來郡	一〇	六、三九五	五、六三三
北松浦郡	二九	一一、〇一一	一二、六五八
南松浦郡	六八	三二、九五四	三三、八一九
合計			

第十一章　衛　生

我國民は古來潔癖に富めり。史を繙けば諾冊二神の海水に禊齋したりしといへるを始め、凡神祇に奉祀するには先づ禊齋を以て第一の要件としたり。又以て如何に我國民が身體の潔淨を好めるかを知るに足るべし。今も尙、到る處錢湯の設ありて此の要求に應じつゝあり、且氣候風土溫和にして到る處樹木茂り、淸泉湧けり、以て居を構へて宅とすべく以て渴を醫すべし。從つて疾病に犯さるゝものの尠く衛生思想の發達も遲緩なりしなるべし。是を彼の滿目赭山土を鑿ては濁水湧き、煮沸せざれば飲むべからず、蒸煮せざれば食すべからざるの邦土人の自然に習慣性となりて蒸煮せざるものは食はざるものとは比較すべくもあらず。然れども其の三韓とも通じ、唐とも交を結ぶに及びては疫癘漸く浸入し來れるが如し。降つて正德四年には我長崎港に大に疫癘流行したりといひ、同六年には

「正德六年の夏、熱を煩ふ病人多く、一ヶ月の中に江武の町々にて死するもの八萬餘人に及び、棺を こしらふる家にても間に合はず酒の空樽を求めて亡骸を寺院に葬むるに墓に埋むる所なければ、宗體に拘はらず火葬ならでは不納といふ。依之茶毘所に送り火葬せむとすれば棺桶の數限りもなく積みかさねて十日二十日の中には火をかけることならず。其到來の順々に茶毘すれば日數をはるかに經といふ。こゝにおいて貧しきものゝ亡骸は如何にともすべきやうなく、所の長たる人々も世話行

屆かで公廳へ訴へ申せしかば夫々の御慈悲を賜はり寺院に仰せつけられ葬りがたき亡骸をば回向の後、莚に包みて船に乘せ悉く品川中に流し水葬になされしといふ。」

茲に單に疫癘といへるものは如何なるものなるか知らず。虎列刺か將たペストの類なるべし。長崎の疫癘に就きては何等記す所なきも此記事を讀まば其如何に猖獗なりしかを知るに足らむ。

古「四百四病の其外に云々」と唄ひしを、今はペスト、コレラ等の諸病舶來したれば其數幾百千なるかを知らず。異朝の神農氏は百草を嘗めて初めて醫藥を發見し、我朝には大已貴命、少名彦醫藥禁厭の術に長じたりしといふ。而かも世未だ開けず人智未だ進まざる時代に於ては天變地異より疾病に至るまで多くは之を神佛の殃災に歸し、禁厭祈禱に依りてのみ治癒すべきものと爲して毫も生理上より治療を施さゝりしか如し斯かる情態にて一般に衛生上の思想乏しく加ふるに醫術も未だ幼稚の域を脫せず所謂草根木皮の療養をなすに過ぎざりし時に方り早くも我長崎に於て西洋醫術の曙光を發し爾來種痘法を始め內外治療の上に著大の發明進步を爲し我國醫學界に一新紀元を劃せり。

西洋醫術の傳來

我國にて初めて西洋醫術を傳へしは長崎の人西吉兵衛といへる人なり。その事蹟詳かならざれども二代西吉兵衛は嚴有院樣御代、承應二巳年父跡職被仰付云々。西玄甫と改名仕、貞享元子年九月十九日、於江戸表病死仕候云々。

と通詞由緒書に見えたれば、初代吉兵衛は今を去ること約二百四五十年前頃の人なるべし、歸化蕃醫澤野忠庵に學べりとぞ。忠庵は何處の人なるか詳かならず、當時我國に來れるもの葡萄牙人の外あらざれば恐くは、葡萄牙國の人なるべし。是當時西流と呼びて持て囃されしものなり。爾後栗崎道有は熊本より來り、青木昆陽は二代目吉兵衛に學び、青木昆陽—前野良澤—杉田玄伯に傳へて遂に解體新書の著を見るに至れり。

安政六年澳太利國人シーボルト來りて斯業の研究殆んど全盛の域に達し各藩より來り學ぶもの甚だ多く維新前後に於ては全く我國醫學の中心たり。

種痘の創施

佐賀藩主鍋島閑叟公の需に依り嘉永元年七月蘭醫モーニッケ本國より痘苗を齎して長崎に來り楢林宗建に其の術を傳ふ宗建佐賀に歸り普く之を施し其後長崎地方多數の小兒に種痘を施し其の內善良の種を撰みて同年十月江戸の戸塚靜海大阪の緒方洪庵の兩氏に送り嘉永二年牛痘小考を著して門下及諸國知己の醫に頒つ斯くて間もなく全國に普及するに至り昔時男女の「見目定め」とてさしも恐れ居たりし痘瘡も全く免疫するを得るに至れり。

長崎病院

縣立長崎病院は我國に於て其歷史最も古く且趣味甚多きを以てその沿革を摘記せむ。

文政六年墺太利國人ドクトル、シーボールト我長崎に來り、出島に居住し此地の醫師吉雄及楢林の邸に於て半日間醫術を施し、傍ら醫學の教授を爲せり。之れ本邦西洋醫術教授の嚆矢にして我長崎病院の起源とす。其後文久元年、幕府の醫官、松本良順和蘭國醫官ポンペに諮詢し、長崎村小島鄕稻荷岳(現今娼妓病院所在地)に病院を設立して之を養生所と稱せり。ポンペは內外科の教頭に松本良順は頭取に就き、醫學の本科を講ず。慶應元年、長崎奉行服部左衞門佐養生所を精得館と改む。明治元年、九州鎭撫總督、澤右衞門權佐精得館を修理し長崎醫學校と改稱し、長興專齋を學頭とし、規則を制定し、大學小學の二科を設け、外國人を以て教師とせり。明治四年、長興專齋官命を奉じ歐洲に赴くに際し、坂井直常代て校務を處理せり。明治七年、長谷川泰、坂井直常に代て校務を處理せり。此年恰も臺灣征伐の擧ありたれば、蕃地事務支局病院となし專ら傷病者の治療に充つ。明治八年、征蕃の役局を結ぶの後之を長崎縣に引渡さる。爾來本縣の所有に歸せり。茲に於て和蘭人ウキンを聘し、吉田健康を病院長となし大に病院の擴張を計れり。

明治十二年四月、梅ヶ崎大德寺跡へ新築工事を起し、十三年八月竣工、移轉開院せり。「明治八年本縣所轄となりしより同十年まで其經費は國庫の補助と地方稅及病院の收入とを以てし同十二年より全然地方稅の支辨となれり」。爾後數十年幾多の變遷を經て規模狹少にして壁瓦莖柱朽腐して到底改築せざれば用に供し難きに至り、地を西彼杵郡浦上山里村字里鄕にトし、新に造築せり。年を閱すること六

年、金を費すこと實に三十三萬千二百六十二圓餘、工成りて移轉す。

地は長崎市の北、金比羅岳の西南麓、海面を拔くこと三十餘尺の丘陵に在り。長崎醫學專門學校は本病院の背後に谷を距てゝ隣接す。浦上停車場は近く眼下に、長崎驛停車場は約二十五町、大波止は約三十町にあり。

此地市街を距ること約一里許にして通院患者に對しては多少不便の嫌あれども地區閑靜、金比羅山は後庭に連りて高く聳え、稻佐、岩屋の峯巒前に起伏し、瓊浦灣頭船舶の來往手に取るが如く、設備の完全と相俟ちて患者に慰安を與ふる夫れ幾何ぞや。

建物は大小四十八棟より成り、室を分つこと二百八十三、總敷地一萬二千八十餘坪なり。其他記すべき事項一言にして止らざれど煩を憂ひて省く。只一ヶ年間取扱たる患者は三十七年に於て入院患者千二百二十九人、延人員四萬四千八百五十人、外來患者七千七百一人、延人員三萬八千五百十七人に達せり。

女神檢疫所

女神檢疫所は長崎港の入口にあり消毒裝置浴室停留舍及病院細菌檢査所等檢疫一切の設備整頓し一晝夜餘に一千人を消毒し得へし其浴室は近年之を改築し構造全國各檢疫所に冠たりと云ふ。

長崎海港の檢疫は明治十二年の創始に係り數次の改更を經て今は長崎縣港務部に屬し海外より來る船舶の常置檢疫所たり。

長崎縣細菌檢査所

長崎縣細菌檢査所は長崎市元馬込に在り明治三十五年十一月の創設に係り各種傳染病の細菌檢査を爲す所にして各般の設備整頓せり。

衞生思想の發達

本縣は古より外國貿易盛なりし爲め從つて各種の傳染病の襲來屢なりき。されば一般に衞生思想の發達せるは本邦中稀に見る所にして殊に長崎市の如きは水道の設備下水の疏通其の他塵芥掃除より避病院等衞生上の設備完整し其の他佐世保市に於ても海軍鎭守府所在地なるを以て衞生上の設備に重きを置き新開の都市尙且巨資を投じて水道を布設し下水を疏通し近くはペスト豫防の爲め大英斷を以て一部區域の人家を燒却せしが如き又郡部豆大の村落に於て水道を布設せるものあるが如き以て都鄙一般如何に衞生思想の發達せるかを證するに足るべし。

衞生に關する統計

醫師	本邦人	八百五十四人
	外國人	五名
産婆		

本邦人	一千六十一人	外國人	二名
藥劑師			
本邦人	六十一人		
看護婦			
本邦人	二百二十九人	外國人	三名
藥種商			
本邦人	三百四十九人		
製藥者			
本邦人	二十人		

若し之を本縣人口九十萬一千七百七十八人、外國人千九十三名とすれば、醫師一名に對して平均幾何の住民となすべきか。

醫師と住民との比は各郡市其趣を異にし。長崎市の如きは醫師の數頗る多く患者自ら良醫を選擇して治療を乞ふべしと雖、寒村僻地に在りては尙醫師に乏しく不便少からざるを以て村費を以て醫師の手當を補給する所あり。

種痘、初種、二萬四千五百人、再種以上九萬四千七百八十五人にして不善感者は初種に於て約五分の一强、再種以上に於て約四倍に上れり。

檢疫船舶は長崎港八百七十艘、ロノ津港三百三十四艘にして有害船舶は僅に三隻に過ぎざりき。

病死者の病症及年齡概要左の如し。以て本縣衞生狀態を推知することを得べし。

病死者年齡別

十年未滿	五三六	十年以上三十年未滿	八三六
二十年以上三十年未滿	一、七一三	三十年以上四十年未滿	一、四九六
四十年以上五十年未滿	一、三九八	五十年以上六十年未滿	一、八一一
六十年以上七十年未滿	二、〇七九	七十年以上八十年未滿	二、二四六
八十年以上九十年未滿	一、三〇三	九十年以上百年未滿	一六四
百以上	二	齡不詳	一二
計	一八、四二五		

病死者の病症

傳染性病	一、三〇七	發育及榮養的病	三、一六一
皮膚及筋肉病	二一八	骨及關節病	二五七
血行器病	九四三	神經系及五管病	三、一八〇

呼吸器病	四、四三三	消化病	三、五一一
泌尿及生殖器病	八一二	内製性變死	五三二
中毒性	七	原因不詳	六四
計	一八、四二五		

第十二章　新聞及雜誌

明治五年一月、木木昌造、西道仙の長崎新聞を發刊したりしより明治二十九年頃までは鎮西日報、長崎新報及二三の雜誌のみなりしに偶〻日清戰爭は我國發展の一新紀元となり、該戰役後漸く事業勃興の氣運に向ひたると新聞雜誌の購讀者頓に增加せしとにより本縣に於ても亦幾多の新聞雜誌新に發刊せらるゝことゝなりぬ今其の種類を擧ぐれば左の如し。

長崎市

鎭西日報、長崎新報、九州日の出新聞、東洋日の出新聞、長崎新聞、長崎商報、長崎プレス(英文)、九州衞生新報、家庭新聞、長崎縣教育雜誌、長崎慈善月報、長崎孤兒院月報、長崎商業時報、瓊浦同窓會雜誌、日露商業新報(露字)、廣告新報(露字)、長崎縣農會報、長崎育兒新報

佐世保市

佐世保新報、佐世保軍港新聞、軍港日々新聞

南高來郡

島原時報

對馬

對馬時報、對馬新聞　北松浦郡

北松教育雜誌　壹岐郡

壹岐一六日報

第十三章　著名なる人物

丸山作樂

肥前島原藩士にして天保十一年十月を以て生る明治維新の前長新港頭往來織るが如きの間白昼提燈を點じて横行す人之を嘲れば則ち曰く今や天下暗黑にして道を知らずと是によりて奇名を博し志士の間に知らる明治三年徵士となり神祇官權判事公議所副議長より集議下局次官となり外務大丞に轉じて樺太に出張せり神國的思想は明治の改革を喜ばず五年遂に公卿愛宕を戴て神政回復を企て愛宕は死に處せられ作樂は終身禁錮に處せらる十三年一月特赦に逢ひ出獄し次で十六七年の交自由黨改進黨に反對し福地源一郎、岡本武雄、水野寅次郎の諸士と帝政黨を組織し明治日報を發刊せり十九年宮內省圖書頭となり次で海江田信義と共に歐洲に航し澳國の碩儒スタインの說を聽き歸朝して帝室制度取調係となり二十三年元老院議官に任せられ帝國議會開くるに及で貴族院議員に勅選せらる三十二年八月病篤し位を正四位に進め勳四等に叙せらる十九日歿す年六十。

松林飯山

縣下大村の藩士なり名は漸字は伯鴻一の字は千逹、飯山は其號、廣之助と稱す。小字は駒次郎又漸

之進と曰ふ。天保十二年二月筑前早良郡羽根戸村に生れ弘化四年前めて九歳、父に隨ひて肥前大村に來り嘉永三年始て大村侯に謁す。命じて唐詩を講せしむ。侍一口を給ひて學に入らしむ時に年十二、嘉永五年、侯に從ひて江戸に來り業を安積艮齋に受く、安政四年年十九、昌平黌に入りて詩文掛となる六年大村に還り馬廻に擢でられ祿六十石を食み五教館の教頭を命せられ固く辭して學頭となる萬延元年八月暇を乞ひて浪華に遊ぶ特旨を以て金若干兩を賜ふ。文久二年大村に還り班脇備士鐵砲支配に進み五教館の助教となる。文久三年八月機隊に入り十月教頭となる是より先き教頭以下學頭に至るまで更日を以て武館に行きて經を講ず。飯山以爲く往て教ふるは禮にあらずと固く執りて肯んせず。乃ち教頭を免じて往て講せしむ。元治元年近習番頭格に進み轉じて旗下隊に入る、九月上書して四事を陳す一に曰く賞罰、二に曰く奢侈、三に曰く賄賂、四に曰く禮節、十月特旨を以て政務に參せしむ。慶應三年賊手に罹りて歿す。年二十九班參政を贈り特に祭粢料を賜ふ。著す所飯山文存、朱竹垞選評、正氣百首等あり。飯山夙に皇室の振はざるを歎き京阪に遊ぶの間松本奎堂等と其志を談じて深く相結納す。是を以て藩政に任ずるや大に俗論を排し士氣を鼓舞し黨革する所多し。是其怨を受けて死を招く所以なり。然りと雖戊辰の變大村の小藩を以て顯要の地に居るもの少からざるを致すは實に飯山の誘掖に因るなりといふ。明治十年舊藩主碑を京都東山に建てて之を祭る。明治二十四年十二月十七日從四位を贈らる。

福地源一郎

櫻痴と號す。碩儒福地苟庵の男なり、天保十二年三月二十二日を以て生る。幼にして才名あり。漢學及び蘭學を修め、萬延元年竹内下野守一行に隨行して歐洲各地に派遣せられ、慶應元年幕府海陸軍取調べのため柴田日向守歐洲に派遣せらるゝや亦隨行し、英佛兩國を巡視して歸る。同三年江湖新聞を發行す。實に、我國新聞事業の濫觴なり。明治二年一等書記官に任せられ芳川顯正氏に隨行して、復米國に赴き同七年東京日々新聞社長兼主筆となる。才華爛熳名聲の噴々たる未だ其儕を見ざる所なり。太政官出仕同會議書記官東京府會議員同議長等たり。其後故ありて專ら、操觚業に隱れ、「幕府衰亡史」「戲曲春日局」等傑作頗る多し。後歌舞伎座附の作者となり、漸く世に忘られんとせしが、近年に至り再び馬を中原に進めんとし、東京より選出せられて代議士となり、大に爲す所あらんとす。惜いかな、天年を假さず、明治三十九年一月七日を以て逝く。年六十六。

文明利器活用の三大家

幕末に際し、我長崎の天地に、三大發明家あり。高島秋帆、本木昌造、上野彦馬の三氏是なり。秋帆は火技中興の祖、昌造は活版業の開祖、鐵橋架設の嚆矢、彦馬は我が國寫眞術の濫觴、是三氏は嘗に

長崎の偉人のみにあらずして、實に我國の偉人たるなり。今や繙讀の暇なきまでに朝に夕に幾百千種の圖書の刊行せらるるも、交通の便宜上從來の木橋、土橋の漸次鐵橋と更まるも、居ながらにして天下の偉人傑士に接し、四方勝景の地に遊ぶことを得るも、將又、數千里を隔てたる遠地の機械を見るを得るも皆是三氏の賜にあらずや。今若此の三大發明を今日の我國の文物中より除去せんか、是確に文明の一半を奪ふものにして、二十世紀は寂寞たるものと化し去らむのみ。若夫三氏徼りせば此三事業の進歩發達は到底今日斯の如き進歩發達を見ること能はざりしなるべし。而かも斯の如き偉人に對して世人は殆其功勞を忘れ、何等敬慕の念を起すものなきに至つては豈慨嘆に堪ふべけむや。聖恩無窮、高島秋帆に賜ふに正四位を以てす。事は明治二十六年に在り。蓋枯骨靈あらば必ずや地下に感泣措く能はざるべし。是に於て始めて漸く其事歴の嘖々たるに至りぬ。而かも他の二氏に至つては唯操觚者間之を傳ふるのみ。

三氏は世の所謂勤王家の如く花々しき事蹟を留めたるにあらず、悲憤慷慨以て一生を過したるにあらず。當時偶〻德川の流れを汲むに厭き、外船來りて互市を迫り、紛々擾々、憂國の士經世の徒、東奔西走、鎖國、攘夷、開國、斬姦等の語のみ天下に盈ち滿てる時、世人の見て以て瑣末の小技と爲せる發明に心身を委ね、遂に發明の犧牲となり終んぬ。嗚呼亦偉ならずや。

本木昌造

外艦頻に來りて互市を迫り、幕府の朝令暮改の對外政策は漸く鼎の輕重を問ふに至り、天下益多事ならんとす。寛永の打拂令は再變して「二念なく打拂ふべし」との攘夷令となりて文政七年七月五日天下に公布せられぬ。本木昌造は此年を以て呱々の聲を新大工町に擧げぬ。父は北島三太夫、昌造は其第四子、名は永久、幼名は作之助、號を梧窓笑三又は點林堂といふ。代々町の乙名。幼にして伯父本木昌左衛門に養はれ、本木元吉と改む、後昌造と稱せり。本木氏は蘭語の通辯たるを以て長じて父の業を嗣ぎて蘭語を修めぬ。

當時の通辯は被の世人の解すべからざる唐草樣のものを辨へ、「唐人の寢言」の如き言語を解し得るのみならず、能く珍器佳什を購ひ、役德も多く、資產亦裕なるもの多かりき。是を以て世人は之を一榮職と爲せり。然れども彼謂へらく、通辯は一種の幇間にあらずや、一種の「ガイド」にあらずや。大丈夫焉ぞ此の如き業に甘んじて徒に一生を過すべきと、是に於て專ら思を工藝に傾注せり。偶、蘭書中活版に就きて記せる所を讀み忽ち膝を打ちて曰はく、是なるかな〳〵と、或は蘭書に就きて其法を究め、或は在出島の西洋人に質し、苦心經營の末、終に流し込み活字の法を發明して自著和蘭通辯を印刷したり。是實に我が國鉛製活字版の始にして嘉永四年彼が三十三歳の頃なりき。

嘉永六年六月三日、亞米利加の軍艦、浦賀に來りて互市を迫りしかば、上下今更の如くに震駭せるに、剩へ「オロシヤ」船其年七月十七日長崎に入港して國書を捧呈したり。幕府は俄に高島秋帆、江川太郎左衛門に命じ品川沖に砲臺を築かしめて萬一に備へ、露艦に對しては使を遣はして會見せしめ彼の要求をば一々之を峻拒せしめたりしを以て嘉永七年正月八日終に露艦長崎を去るに至りぬ。此時彼は露國使節の通辯として下田浦に至り、尋で戸田浦に跟隨して「スクーチル」船の製造法を研究して大に獲る所あり、安政二年山内容堂の囑に應じ小汽船の模型を作りて名聲漸く高からんとするに際し、冤を被りて獄に下されぬ。彼、鐵窓の下に默坐し、曾て造りし活字版の改善を工夫したりといふ。蓋し彼が發明せし活字版は其材料の不完全なりし爲印刷甚だ鮮明ならざりしを以てなり。獄裏に呻吟すること五年、其赦さるるに及びて或は文字を水牛、鋼鐵、銅等に彫りて苦心備さに嘗めたれども遂に改善すること能はざりき。

萬延元年十月、佃ノ浦製鐵所御用掛となり、尋で製鐵所用汽船の船長となり海上勤務に從事して功あり、維新後再び製鐵所に入り、明治二年濱町鐵橋を架せり。是實に本邦鐵橋架設の嚆矢にして當時一万五千兩を費したりといふ。此間或は私塾を開きて生徒を教養したりしが尠からぬ困難を極めたり。斯くて彼が、東の間も忘れ難きは活版業なりき。清國上海には巧妙なる鉛製活字を製出したりとの事を聞き、人を遣して視察せしめたれど深く其術を秘して教へず。偶薩藩士重野安繹氏（今の文學博士）上海より活字と器械とを買ひて藏せる由を聞きしかば直に人を介して之を讓り受けたり。之より活字改良の標本を得て頗に工夫を凝しつれど、猶意に滿たぬこと多かりければ出島に住へる米國宣教師「フルベッキ」の紹介にて上海より將に其本國に歸らんとする活版技師を招聘して活版傳習所を設けぬ。是今の新町雨森内科醫院の在る所なり。

斯くて彼は横濱に、東京に、社員を送りて活版工場を起し新聞印刷に從事せしめぬ。今の築地活版工場は即氏の經營せられたる印刷場にして、今猶我國有數の工場たり。

明治五年、長崎新聞を發刊したれど、世未だ新聞の價値を認むるものなく、廣告の如きは新聞社より無代價にて其依頼に應せんことを説けど一商店として依頼するものなかりきとぞ。斯くて彼が最終の事業も全く失敗に歸し、徒に活版業の開祖、鐵橋架設の嚆矢の名のみを留めて明治八年桐の一葉に先立ちてみまかりぬ。享年五十二。永昌寺内一墓の碑苔蒸して、香烟縷の如く、梵唄幽かにして、風颯々。

高島秋帆

高島秋帆は我國砲術中興の祖なり。名は茂敦、字は舜臣、通稱四郎太夫、後喜平と改む。秋帆は其號なり。祖先は近江國高島郡領土高島河内守頼泰より出づ。頼泰の庶子八郎兵衛長崎に來り市民となり世々年寄たり。

秋帆夙に我國の武備弛廢するを慨し、一意歐洲武器の長所を取らむと欲し、天保三年時の奉行大草能登守の許可を得て新式臼砲を蘭人より購入し又石打（ゲール）銃十挺を購ひ、同六年奉行牧野長門守の許可を得て新式忽徹砲を需め、同僚久松新兵衛より亡父碩次郎の蘭人に注文したる野戰砲二門を讓り受け、蘭人デレニューヘに就て其の操法を習ひ又和蘭兵書を購求して新戰術を自得し、由來家傳の荻野流砲術を一掬して專ら文明武器の操法を修む。

秋帆又文書に通じ醫術に精し。泰西諸國種痘の法あるを聞くや、痘苗を購入して之を試み、其効驗あるを知るに及び之を天下に紹介し其他天保八年幕、命を奉して唐船商法を改革し、同十一年和蘭「バッテラ」に乘じて自ら帆前の運用法を修め、特に意を海外の形勢に注ぎ、顧みて我が風氣の開けざるを歎じ、遂に天保十一年奉行田口加賀守を介して兵器改良の急務を說き、翌年自ら門下生百餘名大砲四門を携へて江戸に到り、武州西臺德丸原に於て初めて洋式操練を行ふ。有司實檢して始めて其利器なるを知り火術に限らず凡て軍備に充つべきものは猶捜索して申訴すべしとて白銀二百枚を給し與力の列に加ふ。

幕士下曾根金三郎、江川太郎左衛門、秋帆に從ひて火術を研究し、悉く其秘訣を受く。當時鳥居耀藏、專、權威を振ひ横暴至らざるなく、西學者の漸く頭角を出さんことを忌むこと甚し。偶〻木庄平次、福田九郎兵衛の內意を承け幕府に至り秋帆叛心ありと讒す。是より先秋帆火術研究の爲めに多く武器を貯へ且長崎の商人利を貪り同盟して米價を暴騰せしむ。小民甚困む。秋帆之を救はむとして米穀を肥後より輸入す。茂平讒するに此二事を以てす。幕府即ち秋帆を捕へて獄に繫ぐ。天保十四年三月江戸に檻送し鳥居甲斐之を叛逆罪に問ひ將に斬に處せむとす。偶〻有司、鳥居の横暴を惡むものありて桑政某に陳訴したるを以て追放に處せられ、弘化三年安中侯の手に錮せらる。爾後察察の身を以て囹圄に呻吟するもの十年、此間外交年を逐ふて困難となり、秋帆の先見着々として中れるも天下一人の秋帆の爲めに其寃を雪ぐものなく、唯々韭山代官江川太郎左衛門に依りて其砲術兵法の天下に紹介せられたるのみ。既にして嘉永六年六月三日、米國軍艦浦賀に來航し武威を示して開港を迫るに及び幕府俄かに人才の必要を感じ、遂に江川太郎左衛門の說を聞き秋帆を赦し、江川氏をして之を客遇せしむ。秋帆慧悟なりと雖も十年囚獄に在て一書も繙かず、之に反して太郎左衛門は十年の星霜常に砲術兵法を研究し努めて歐洲新兵器を攻究せしかば其の見識今は全く師弟地を換ゆるに至りたるも、太郎左衛門之に師事すること舊の如く、嚮するに部下の訓練を以てす。秋帆辭して受けず、自ら草鞋を穿ち小銃を執り卒伍の門に混じて太郎左衛門の指揮を受け未だ一ヶ月ならざるに悉く太郎左衛門の秘奧を會得す。幕府依て秋帆を海防御用取扱となし、江川太郎左衛門と共に江戸灣防備の策を講ぜしむ。二人命を受けて房相の海岸を巡檢し當時火砲の威力は到底觀音岬、富津の海口を扼するの射距離なきを察し、轉じて品川海を相し最大射距離八町を各砲臺の間隔と定めて海堡を築く。今の品川砲臺是なり。

尋で安政二年七月、鐵砲方、手附教授方頭取に任ぜられて與力格に進み、同四年中講武所砲術師範役に轉じ文久元年小十人格に進み食祿百俵を賜はり同三年海陸御備御用取扱を兼ね、武具奉行格に進み祿百俵を加へられ、慶應二年正月十四日、年六十九にして歿す。其當復た往年町年寄の如くなるを得ざるも幕府時代匹夫にして武具奉行格に進む、實に異數と謂ふべし。

明治二十六年十二月、其功を追賞して正四位を贈らる。宅趾は小島鄕に在り、今寶亭となる。

上野彦馬

天保八年八月、新大工町中島河畔の自宅に生れぬ。父を俊之丞といふ。俊之丞氏は西洋諸機械を取扱ひ、中にも烟硝、更紗の發明に熱中せる折しも洋舶入港して、當時「ダケリヤタイプ」と稱する寫眞機械を輸入したり。此機械は到底今日のものとは比すべくもあらず、唯藥品を塗附したる銀盤に寫すものなりき。是實に天保十二年なり。是に於て大に喜び、即携へて薩摩に行き、島津久光の父淳正院公に謁して之を献じ直に撮影して歸り、紀念にもとてその寫眞をは今に保存せりといふ。是我國寫眞術の開祖なり。世の斯業の起原を說くもの東京の玉川三次、横濱の下岡蓮杖、長崎の上野彦馬、此三人の發明の年代略相同じといへるは未だ深く究めざるものの言なり。嘉永四年の秋霧に犯されて俊之丞は歿せり。彦馬は此時僅に十六歲なりしが、父俊之丞の一生を抛ちて研究したりし硝藥と更紗とを大成せんと欲し、舍密學を研究せんことを志しぬ。

恰もよし、安政三年、和蘭國より軍艦二隻を幕府に献上す。而かも幕府は之を操縱すべき術を知らざればハルテス、カッテンレーキ、フアントロトエンの三人を雇ひ、海軍稽古所といへるものを當地に設け、勝海舟、榎本武揚、矢田堀景藏等を入門せしめたり。矢田堀は單に操縱の術を知るとも修繕の道を知らざれば遂に永く此軍艦を保つこと能はざるべきを思ひ、幕府に建議して和蘭陀人に設計せしめて諸機械を蘭國に注文し、之を鮑ノ浦に据付けたり。是鮑ノ浦製鐵所の創始にして、今の三菱造船所なり。

斯る間に各藩競ひて西洋兵學を修めしめむと欲して生徒を送れり。舍密試驗所は佐賀、津の公藩主によりて建てられぬ。和蘭醫ポンペー其教師たり。彦馬之に入學して舍密を研究せる內、蘭書寫眞の條項あり、嘗て其父の弄び居たりしを想起し、之を師「ポンペー」に質し堀江氏と共に種々研究の結果、家に藏せる古渡の雙眼鏡を打毀ちて手製の暗箱に其の鏡玉を嵌めたり。然れども種板なきを以て其師に問へば「アルコール」を製せよといふ。是に於て燒酎を煎じ詰めて少量の「アルコール」を製し得たれども如何にせん「フーゼル」油の混入せるを以て之を除かざるべからず。然れども遂に之を除く方法を發見すること能はず。殆失望したりしに「ポンペー」其飲料のゼチーフルを分ち與へぬ。「アルコール」は既に整ひぬ。

硫酸の製法

六尺内程の箱を拵へ、其中に鉛板の同大の箱を入れ、之に蒸氣を入れて硫酸を製すべきことを其師に聞きぬ。然れども鉛板の大なるものなきを以て木板の箱中に鉛を入れて燒きたるが殆六晝夜間一睡をも取ること能はずして之を製出したり。

アンモニヤの製造

アンモニヤは牛骨より、青酸加里は牛血より製すべきを習ひぬ。今日こそ牛肉は滋養物と誰も持て囃すなれ。今より三四十年前に於ては牛馬は穢多のみ扱ふべきもの、しかも其骨と血とを取扱はざるべからず。隣近の眼は怪訝、且つや其堪ふべからざる臭氣に對して四隣の罵詈讒謗、殆忍ぶべからず、さりとて此儘に止むべきにあらざれば奉行の叱責、隣近の迫害の裡途に之を製出するを得たり。

斯く種々の藥品を得て之を硝子に塗附し、始めて種板は成れり。

さて撮影せむとするには被撮影體を屋根の上に立たせて充分光線に觸れしめたり。加之遙に隔てゝ据るたる器械に面すること約五分間なりしとは慥かざるを得ず、若しそれ寒暑の烈しき日、五分時間直立せしめば其苦痛如何ばかりぞや。殊におかしきは當時醫學研究の爲めに來れる松本順（後の軍醫總監）を寺町の南京寺にて寫すに光線充分ならざるが故にオシロイを顏に塗らしめ撮りたるに結果良好なりしかば爾後屢此の方法を用ゐたりといふ。其後佛國寫眞師「ロッシエ」來りければ寫眞の講話を聞き、蘭人ボートウインに托して佛國より初めて機械を取寄せたり。萬延元年三月、津藩主より召されて江戸に到りぬ。當時藩主は之を誘りて常に各藩主等を招待して撮影せしめ、各藩主等も亦其妙に驚きたりといふ。江戸に留ること一年有餘、堀江氏と共に津に行き舍密必携を著はし生徒を集めて舍密學を教授し、後京都を過りて鄕里長崎に歸りぬ。

當時、京都には廣瀨元恭といへる醫者あり。舍密學に造詣深しと聞き、其門を叩き說を聽くに其說悉く陳腐にして殆價値なし。而かも彼傲然として天下の學者中只乃公のみといへるが如きを以て、懷中より自著舍密必携を取出したるに一讀して忽ち其容貌を柔げ、其言辭を謹みて厚くもてなしたりといふ。

世人の誤解

彼が寫眞用藥品を研究せる折には、世人皆謂へり。夫の赤きは血にあらずや。彼等寫眞術は魔法使にして、かの吸玉の如く鏡に面せしめて人の血液を搾るものなり。故に若撮影せば必ず夭折すべし、近づくべからずと、忽ち萬犬虛を傳へて此誤想は永く除くことを得ざりき。之即ち「アンモニヤ」製造原料の牛血を誤りてかく訛傳したるなり。世俗に魁けて一大發明を爲さんとする苦心は豈啻に一「バリッシー」のみならむや。

明治十五年彼は西洋人より乾板に就きて詳しく聞く所あり。直に東京の淺沼寫眞機械店に注文したれ

と未だ聞きたることなしといふ。依て白耳義の「モンコーエン」製造所に注文して取寄せたり。是我國乾板を使用する始なり。

斯くて上野氏は寫眞術の名聲大に擴り、門前市を成すに至り、殆寢食することすら能はざる繁昌を來せり。明治三十七年五月廿七日、其自宅にみまかりぬ。

爾後都合ありて新大工町の邸宅をは他に讓り千馬町二丁目に引移りて寫眞業を營めり。

楠本正隆

肥前大村藩士たり夙に藩營の監察としし育英の任に當る尊攘の說起るに當り渡邊清、渡邊昇等と志士を皷舞し藩論を一定し蔭長二藩と結び又島原藩に使して之を說て勤王に決せしむ。廢藩置縣の際藩政を整理し毫も藩債を中央政府に遺さず是他藩に其比を見ざる所なり同三年八月外務權大丞に任じ五年五月大丞となり同廿四日新潟縣令に轉ず當時正隆舊藩主と共に海外に遊ばんとす偶新潟縣下に百姓の紛擾あり世に大河津堀割事件と稱す內務卿大久保利通正隆を薦めて之を鎭撫せしむ正隆辭す特に勅あり て謁を賜ひ優渥の勅語を賜ふ仍て意を決して任に赴く。紛擾乃ち平ぐ常に官尊民卑の弊を匡し縣政を修む或は區長を招集して意見を聽き或は市區改正に或は海上の交通機關に或は銀行創設に苟くも國利民福を增進すべきもの奬勵勸誘至らざるなし。是に於て縣治大に彰はれ柴原和、安場保和と當時天下三縣令の隨一と稱せらる。八年八月內務大丞に轉じ十二月東京府權知事を兼ね十二年元老院議官に轉じ從四位に叙し十五年六月勅三等に叙す廿二年五月東京市會議員に當選し同十二月元老院副議長に任し廿三年七月選れて衆議院議員となり官を辭し廿四年東京市會議長に當選す廿六年第五議會には副議長となり幾ばくもなく議長となり第九議會に至る廿七年正三位に陞り後又東京市會議長となる廿九年勅一等に陞り同六月華族に列し男爵を授けらる依て衆議院を辭し立憲革新黨、進步黨及び憲政本黨にありて皆な重きをなせり卅五年二月七日薨す年六十五薨するに先ちて從二位に陞叙して勅使を賜ひ祭粢料を給せらる。

渡邊清

大村藩士なり。元龜年間藩主廢立の內亂に際し總に七騎ありて藩主を助けて大功あり。之を大村七騎と稱す。渡邊家亦其の一なり。

清は其の遠孫にして天保五年を以て大村に生る。慶應年間藩內佐幕、勤王の二黨の軋轢甚しく、遂に同三年一月三日「諸初め」の歸途勤王黨の首領を要擊す。松林彼山非及に斃る。清及弟昇幸にして免る。是に於て清等勤王の士藩主に勸めて佐幕黨二十七人を逮捕し之を梟す。是藩子弟（次男以下のもの）を以て一隊を組織し新成組と稱し自ら隊長となり之を率ゐて京に入り薩邸に投ず。伏見桑名の

役偉功あり、尋て征討軍參謀となり轉戰して會津の落城に及ぶ是を以て朝廷藩主を賞して祿三萬石、清に四百石を賜ふ。明治五年民部少丞に任じ尋て大藏に轉ず。八年福岡縣令となりて治績大に擧る。十四年元老院議官となり十九年華族に列し男爵を授けらる。廿一年福島縣知事に任せられ幾もなく金鷄間祇候仰付けられ貴族院議員に任せらる。明治三十八年一月四日薨す。年七十一。大村丘上躑躅ヶ岡あり。勤王黨二十八士の靈を祀る。九士猶存す。

籠手田安定

舊平戸藩主にして明治元年大津縣判事試補を命せられ尋で判事に昇進す。同八年五月滋賀縣權令に任じ尋て縣令となり、十七年七月元老院議官に轉じ十八年九月島根縣令に任じ官制改正となり同縣知事に任す。同二十四年四月新潟縣知事に轉ず。同年五月從三位に叙す。同二十六年六月勳二等に叙す。同二十九年再滋賀縣知事に任ず。良二千石の稱あり。三十一年四月非職となる、同年五月正三位に叙し、尋で貴族院議員及錦鷄間祇候仰付けらる。頗擘劃を能くす。功に依り華族に列し男爵を授けらる。三十二年四月一日薨す、年六十。

長與專齋

大村藩醫後達の子年十七、大阪に出で緒方洪菴に從ひ蘭學及醫學を修め尋て長崎の蘭醫に就きて敎を受く、後歸りて侍醫となる。明治元年正月長崎精得館の頭取となり尋で長崎醫學校學頭に補し大學少博士に轉じ、四年七月文部少丞兼中敎授に任ず。十月田中文部大丞に從ひ歐米を巡遊して得る所あり。衛生の二字は「ヘルス」の譯語にして其創語たり。爾後醫學衛生に關する重職を帶ぶること多年、帝國議會の開設せらるるに及び貴族院議員に勅任す明治二十五年一月宮中顧問官となり中央衛生會頭を兼ぬ明治三十五年病を得。八月十六日正三位勳一等に陞叙し　天皇皇后兩陛下の御慰問を賜ふ。九月八日終に薨す。年六十五。

岩崎小二郎

肥前大村の藩臣幼にして嶄然頭角を露はし同藩の先達目して俊才と爲す藩の儒臣松林飯山に就て學を修む飯山兒徒の毒及に斃るる後勤王論を主張して渡邊清、渡邊昇、楠本正隆等と共に維新の際に盡力して功あり尋て民部省に出仕し後黑田清隆が歐米巡回の隨行を命せられ續て英國留學を命せられ大に西歐の文物制度を査討し歸朝後諸官を歷仕し事務練達の名あり銀行局長の椅子を占むるや清廉を以て稱せらる其後秋田縣に知事となりしが北國の氣候其身體に適せざるを以て之を辭す幾ばくもなくして滋賀縣知事となり尋で大分縣に移る明治二十五年議會解散となり臨時總選擧を執行するの後福岡縣に

於ける官民の軋轢甚だしく紛擾常に絶えざるを以て氏は特に擇ばれて福岡縣に轉任す爾後官民調和治績大に見るべし從四位勳四等に叙す明治二十八年六月二十二日卒す。

橘　周太

慶應元年九月を以て南高來郡千々石村に生る。明治二十年七月歩兵少尉に任じ、二十四年十一月東宮武官に補せらる。爾後或は大本營附となり、戸山學校教官となり明治三十五年四月歩兵少佐に任じ名古屋陸軍地方幼年學校長に擧げらる。日露の役起るや第二軍監理部長を以て明治三十七年五月清國大沙河口に上陸し、八月九日歩兵第三十四聯隊大隊長となり同月三十日より九月一日に亘る遼陽附近の戰鬪に於て首山堡東南方高地占領の際戰死す。八月三十一日陸軍歩兵中佐に進み、勳四等功四級に叙し金鵄勳章旭日小綬章年金五百圓を下賜せらる中佐資性謹嚴己を持し人に交るに温厚、赤誠を以てし清廉潔白宛として古武士の風あり。

沖　禎介

舊平戸藩平戸西ノ久保の人、幼にして岐嶷、居常温厚篤實、寡言守ずと雖、時に臨みて闘ふや龍拏虎搏、而かも餘裕綽々、能く敵の虛を見る。見る者寒膽せざるなし。長崎中學より熊本第五高等中學に轉じ早稲田專門學校に學べり。明治廿七八年の頃一たび歸郷して縣下針尾島の碩儒楠本碩水の門に入り經傳百家の書を研究す。

明治三十四年遂に渡清して北京の東文學社に教鞭を執り。後別に文明學校を創設せり。

東洋の風雲甚だ急なるに當り校事を他に托し重大なる特別任務を帶び二月廿一日蹶然劍を提げて北京を去りぬ。其後杳として其消息を知ること能はざりしが終に四月十二日横川省三と共に敵の捕ふる所となり、同廿一日敵陣に斃れぬ。

志士の最後ダイナマイト藥筒、鐵道破壞用器具、蒙古、滿洲、北韓の地圖を携へて、蹇は荆棘の中に安からぬ夢を結び、夜は知らぬ野道に踏み迷ひ巡羅の眼を避けつゝ苦心慘憺漸くチュルチキ停車場附近に到れるに天運拙く敵手に捕はれ形の如き裁判も悲壯の中に終へ、從容自若、小銃十二の射擊に斃れぬ。

禎介は只腕力家、慷慨家たるのみならず、花に吟じ月に嘯き吟想油然として湧く詩人たりしなり。

楠本端山

肥前平戸藩の儒者なり。初め鶴巖と稱し後、名を後覺と改む、字は伯曉、端山は其號なり。弟碩水と共に江都に出で佐藤一齋、大橋訥庵に從學し深く儒學の堂奧を究め卓として後進の釆領たり。訥庵之

を過するに畏友を以てす。學成り鄉に歸るに及び、召されて平戸藩の儒員となり侍講を兼ぬ。閤藩の子弟就て其薫陶を受く。尾州侯端山の風を聞き遠く藩士を遣して從遊せしむ。端山資性方正學醇にして識高く溫容和顏喜怒を見はさず而して其學を講ずる言簡にして意を盡し人を敎ふる諄々として厭かず共に坐すれば春風中に在るが如し、人或は程明道に擬す。明治維新の初め藩の參政となり秩祿を加賜せらるゝ次で權大參事に進む。數〻時事を論じて用ゐられず遂に退ひて鄉里針尾島に隱れ江西書院を設けて其道を徒に授く、遠近來り學ぶ者多く。端山、學術は程朱を確守し山崎氏を以て之れが階梯と爲す、晩年德益〻高く學益〻明かなり。明治十六年歿す。享年五十六。

著す所、鞋襪日曆、松島行記、芻蕘卷議、杞憂臆言、學習錄、匪躬膝議、詩文集等あり。

松田源五郎

長崎市酒屋町の人、天保十一年四月八日を以て生る。幼にして岐嶷、我が對外貿易の振はざるは一に金融機關の備らざるにあるを慨し叔父松田勝五郎、永見傳三郎等に說きて共同の資本を組成し之を永見松田商社と名づく。是實に十八銀行の前身たり。活版業者本木昌造は其舊友たるを以て資を給して之を奬勵し酒井、平野等を東京大阪に派して活版業を創めしめ、後平野富三の石川島造船所を設立するに及び其監査役となれり。

其の他長崎に商業學校を建て、商法會議所を起し、汽船航海の事業を始め、水道布設、港灣改良等皆與つて力あり。

明治九年長崎縣博覽會幹事となり、明治二十五年衆議院議員に擧げらる。晩年第十八銀行頭取、長崎貯蓄銀行頭取、九州鐵道株式會社取締役、九州倉庫株式會社取締役、東洋浚渫會社長、香港ローラ麥粉會社取締役、東京築地活版製造所取締役、東京石川島造船所監査役其の他二三會社の重役たりしが明治三十八年歿を以て終ふ。

小曾根乾堂

幼名六郎通稱は榮。安政六年外國通商日に熾盛なるを察し浪の平海岸僻遠の地を買ひ山を拓き海を埋めて新に一街區を造る之を小曾根町と稱す。人と爲り慧敏强記書畫を善くし尤篆刻に巧なり。明治四年四月勅を奉じて　御璽及國璽を鑄す。五月伊達公に從ひ淸國と通商條約を締結す。明治十八年十一月廿七日病を以て終ふ。年五十八。

第二編

第一章　長崎市

第一節　概觀

僅に方一里に滿たず、而かも人口十七萬に上り開港以來既に三百有餘年、市街の整頓せる道路の清潔なる本邦中稀に見る所殊に人情淳朴温良にして敬神崇佛の風盛んに生活の程度亦高く隨て勞銀の如きも他に比して稍不廉なり。

營業の種類によりて市内各町の狀態多樣なれども其の最も殷賑なるは江戸町、本下町、築町、東濱町、西濱町、今鍛冶屋町、石灰町、本籠町、船大工町及廣馬場等にして、商賈は古くより外國人の顧客に接するに慣れ應待辭令亦甚巧なり。

市内の車夫、勤工場の賣子多くは英語を語す、而かも所謂「ビジョンイングリッシ」たるを免れず、露語佛語亦然り、新地にある支那人亦能く日本語を操る、而かも所謂新此式日本語たるを失はず、彼等は渡來三日ならずして古參者に從ひて行商し二句を出でずして單獨行商するを得るに至る、其の習熟の

速なる眞に驚ぐべきものあり、而して彼等が日本語の初歩として先づ唱ふるものは如何
御客サン買はんノー福子帶上等ある、アナタ買ふ歸るにかみサン澤山喜ぶわろノー
即ち之なり以て如何に彼等が顧客を曳くに腐心せるかを知るべし

人力車賃金表

市内は三丁に付	二錢	一日雇	一圓
半日雇	六十錢	客待一時間に付	七錢
市外一里に付	十錢		

汽車にて長崎に來る人は停車場構内にて切符を受取り目的地まで挽かしめたる後切符面所載の賃金を拂へば可なり又市内各町間の賃金は重要の地點に掲示あれば就て見るべし

艀船賃金表

乘客一人に付	十五錢	乘客一人を增す毎に	五錢
手荷物一箇に付	五錢		

乘合馬車賃錢表

	片道	往復		片道	往復
長崎病院出島間	九錢	十四錢	長崎病院大波止間	七錢	なし
長崎病院長崎停車場間	五錢	八錢	長崎病院井樋口間	三錢	なし
出島大波止間	二錢	なし	出島井樋口間	六錢	なし
大波止井樋口間	四錢	なし			

第二節　官衙公署學校會社及諸團體

市及附近に散在せるものを擧ぐれば大凡左の如し

官公衙團體之部

名稱	電話番號	位置
長崎縣廳	一	岩原郷公園地交親館構内
長崎市役所	二	櫻町
長崎市傳染病豫防事務所	四六七	櫻町市役所内
長崎水道事務所	四四六	櫻町
長崎港灣事務所	三〇一	櫻町市役所内
長崎市大波止監視所	七七	元船町三丁目
長崎警察署	七	東濱町

梅香崎警察署　三〇四
長崎水上警察署　六一八
稲佐警察分署　五
長崎監獄　三六三
長崎海事局　一〇
長崎縣港務部　一六二
長崎控訴院　四三八
長崎地方裁判所　二四〇
長崎區裁判所
長崎測候所　六一七
長崎要塞司令部　四三五
長崎要塞砲兵大隊　六六九
長崎憲兵分隊　六四
長崎税關監視部　一二
長崎税務監督局　四四三

長崎税務署　三七四
長崎鹽務局　三七五
樟腦事務所
西彼杵郡役所　三〇二
上長崎村役場　六七一
長崎煙草製造所　四四七
長崎交親館　六一五
長崎商品陳列所　四四四
長崎商業會議所　二九
長崎内外倶樂部　五一四
長崎縣水産共進會長崎事務所　四八七
長崎縣水産組合聯合會水産物檢査所　六六七
長崎縣農事試驗場　四四五
長崎停車場　六三
長崎郵便局　六

梅香崎四
松枝町
稲佐郷
新大工町
新地町一
長崎税關監視部内
萬歳町一
萬歳町
萬歳町
大浦
平戸小屋
竹ノ久保
西濱町
大浦
今魚町九
木鶏町
今魚町九
櫻町
馬場一〇五
大黒町
岩原郷一（今長崎縣假廳舍）
蛭箱町
大村町一一
出島七
福富町二丁目
新地町四
中川郷
大黒町
梅香崎町

長崎病院	二六二	里郷
竹ノ久保傳染病院	三三一	竹ノ久保
長崎娼妓病院	六一四	小島
長崎病院看護婦事務所	九五〇	里郷
長崎市醫會	二六七	
長崎軍人家族授産場	三七一	
長崎辯護士會	四四八	寶町四丁目
日本海員救濟會	六一〇	長崎地方裁判所辯護士控所
長崎縣細菌檢査所	九八六	樺島町
長崎海港檢疫所	三〇〇	浦上元馬込
長崎縣教育會事務所		女神
日本赤十字社長崎支部	六八〇	今博多町
愛國婦人會長崎支部		馬町二二ノ二
大日本武德會長崎支部		岩原郷
長崎基督教青年會館		岩原郷公園地
		袋町

各國領事館之部

名稱	位置
露國領事館	南山手
米國領事館	東山手
獨國領事館（伊太利領事代理）	大浦海岸
白耳義領事館（「珠國領事代理、那威國領事代理、葡萄牙國副領事代理」）	大浦海岸
西班牙國領事館	大浦海岸
英國領事館（埃太利國領事代理）下リ松海岸	
佛國領事館（和蘭國領事代理）	東山手
清國領事館	大浦海岸
瑞典國領事館	大浦海岸

學校之部

名稱	電話番號	位置
長崎醫學專門學校	一三二	里郷
長崎高等商業學校	九六四	片淵七六二
長崎縣師範學校	九五一	馬場三九
長崎縣立長崎中學校	九五二	立山
長崎縣立高等女學校	九五六	西山郷田原
市立長崎商業學校	九五七	伊良林

私立長崎盲唖學校	六四二	新大工町七六 二〇八
私立三菱工業豫備學校		他之浦
私立東山學院		大浦山手
同鎮西學院		同
同海星商業學校		同
同活水女學校		同
同梅香崎女學校		同
同時中學室		同
市立磨屋町夜學校		大浦
		磨屋町

銀行之部

名稱	電話番號	位置
十八銀行	一八	築地町一〇七ノ一
長崎縣木金庫	六一一	築町
長崎縣農ー銀行	六〇七	今魚町一一
日本商業銀行長崎支店	二〇五、三五七	本下町二五
香港上海銀行	三五八	下ッ松四二
三井銀行長崎支店	一五三	西濱町七二ノ二
横濱正金銀行長崎支店		大浦

新聞社之部

名稱	電話番號	位置
長崎新聞社	五九	西濱町
東洋日の出新聞社	五〇五	出來鍛冶屋町三七
鎮西日報社	三三二	本博多町一
九州日の出新聞社	一一一	鍋屋町 五、一六
長崎新聞社	九〇九	本博多町五一
長崎商報社	三八	築町一〇八
長崎プレス新聞社	九七二	大浦町二〇

諸會社之部

名稱	電話番號	位置
長崎電燈株式會社	一〇三	高野平一九 二〇九

長崎米穀取引所	一二〇	西濱町七二	二一〇
長崎石油合名會社	一九四	江戸町二〇	
長崎捕鯨合資會社	四五一	玉江町二丁目	
長崎瓦斯株式會社			
長崎製氷株式會社	二三〇	西濱町五六	
同	六五	稻佐郷松崎八九	
長崎薪炭株式會社	三二	西濱町五四	
長崎米穀株式石油取引所			
仲買人組合事務所	五三三	西濱町七一	
長崎青物市場合資會社	五四八	木下町七九	
長崎麥粉株式會社	八四六	小曾根町	
長崎運送合資會社	八一六	浦五島町二二	
露國東亞汽船會社長崎代理店	八一九	下ッ松四七	
バウルス商會	四九〇	大浦	
日本郵船株式會社長崎支店	一一三、八七五	梅香崎町三	
日本火災保險株式會社長崎出張店	九〇八	萬齋町一九二〇	

東京火災保險株式會社長崎出張店	六五九	樺島町二五	
大阪火災海上保險株式會社長崎支部	三九一	江戸町五九	
大阪商船株式會社長崎支店	一二七	樺島町五	
尼崎汽船部長崎出張所	一四五	西濱町五三、四一	
肥後汽船株式會社出張所	四二三	大村町一一	
三山汽船部出張部	七〇八	玉江町三丁目	
三菱合資會社長崎支店（支店員・庶務係・計算係）	四五	小曾根町	
三菱造船所	五〇	他之浦	
同立神取締詰所	五五	立神	
同小管船架場取締場	六六六	戸町字小管	
松尾鐵工場	五三一	稻佐郷三〇〇	
紐育スタンダード、オイル商社	九一九	大浦九	
ボーデン、ハウス	五二八	出島四	
ホームリンガ商會	二一八	大浦七	
カルノー株式會社	六九三	松枝町四二	

大北部電信會社長崎支店	一七六	梅香崎町二
北方炭礦長崎出張所	四三	大浦三丁ノ五九
九州製茶輸出株式會社	三五四	西濱町七八ノ一
長崎石油合資會社稻佐油槽所	四二五	稻佐郷五九
九州石油合資會社	七五二	西濱町六九
九運合資會社取引店	八六六	浦五島町二二
紀平合資會社	三四八	樺島町四六
玉榮合資會社	二三四	西泊字大田尾
三池土木株式會社出張所	二九五	浦五島町一八
三井物産合名會社長崎支店	一四七、一四八	出島二
岡木鉢倉庫	一四九	
明治生命保險株式會社支店	八六〇	本興善町二五
日清生命保險株式會社支店		西濱町二六

第三節　工　業

三菱造船所を始めとし松尾鐵工場、村田鐵工場、精米所、ラムネ及氷製造會社等あり、活版業としては大浦の東友舍（英文とも）、今鍛冶屋町の重識舍、篠原活版工場、木下町の内外活版工場等重なるものにして、石版印刷工場としては銀屋町の向陽館其の規模最も大なり

陶器は市内小島郷に其の製造所あり、長州山商會といふ、事業の現況は載せて工業の部に詳なり會主岡野安太郎は極めて僅少なる資金を以て去る三十一年に其の業を創め苦辛經營遂に今日の成業を見るに至り本縣又其の專業の有望なるを認めて補助金を給し居れり、現今盡工見習生男女五十三名、細工見習生男女十二名、外に職工男子十四名あり

針は長崎針とて長崎名物の一に屬す腰強く曲らざるは其の特色にして家庭向への好土産なり製造所は今鍛冶屋町西川屋　池田屋、築町西村屋、東濱町藤村屋等最も名あり

縫箔　西洋各國の國旗、花鳥模樣等の爆爛として眼を奪ふものは是亦長崎名物の一たる刺繍なるべし多くは外國人向にして委細は工業の部に在り船大工町の今村半三郎最も有名なり

唐木細工　朱檀、黑檀、唐木を寄せてと謟ひたりし昔時の贅澤今は之を見聞するを得ざるも盆、机等の如きは中流以上の室内を飾れり、木縣の斯工は確に優等なるものなるべし、其の製品は頗る堅牢に

して支那風の意匠を加へ一種の雅致を有せり

鼈甲細工、「バイゾ」、「カフスボタン」、扇、櫛、束髪留等より軍艦、帆船等の模型に至るまで凡百の細工物、店頭狹く陳列せられたる樣、實に一種の美觀たり是又我長崎の誇とする所其の細工所の有名なるものを東濱町二枝貞次郎、今魚町江崎榮造、本籠町坂田榮太郎、東古川町三島愼一郎、船大工町河口榮造、田中作太郎となす

第四節　商業

貿易商

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
瀨崎	若杉	種三郎	同	古閑	常太郎
惠美須町	松尾	九藏	大鶴商店	豐後町	中島
豐後町	志滿谷	竹三	本五島町	磯部	保藏
本五島町	小倉	吉之助	同	稻松	元次郎
浦五島町	前川	末次郎	同	太田	常藏
黑瀨商店	黑瀨	民藏	大丸	大串	喜助
同	富山	幸助	同	平松	喜三郎
同	德島	德藏	松尾屋	脇山	齊次郎
德島屋	柳	仁平	入來屋	松尾	福三郎
柳商店	天田	繁太郎	松尾屋新宅	松本	守太郎
山口商店	磯部	六藏	同	石油部	尾谷
同	岩崎	增次郎	同	石田屋	利三郎
同	菊地	喜三郎	同	樺島町	伊藤
菊地商店	肥塚	常助	樺島町	松本	庫治
樺島町	松本	武助	同	伊藤	多喜藏
肥塚分店	城島	勝助	同	原	眞一
同	田原合資會社		江戸町	石塚	甚之助
平戸町	小川	慶一	川口屋	橋本	雄造
川原屋	成宮	長次郎	同	針尾	伊三郎
江戸町	西村	重次	中津屋	溝田	文吉
田原屋	澁谷	隆七	同	中川	幸左衛門
同			同	林	繁松
同			肥前屋		
同			同		

同	鈴田 清次郎	松崎屋 同	江崎 左右平
肥前屋 同	的野 喜代二	野村商店 同	野村 新次郎
同	西谷 倉松	同	山口 吉平
同	吉永 千代藏	同	川原 政助
同	前田 駒一	榎津町	宮川 忠三郎
川崎屋	川崎 貞五郎	西濱町	千々岩 愛吉
榎津町	林 萬藏	同	松尾 小十
西濱町	中島 榮三	同	入江 米吉
大鶴商店 同	大津 禮八郎	同	山口 茂一郎
同	松延 重吉	同	松江 梅吉
同	長崎薪炭株式會社	同	福地 定吉
同	島田 太吉	同	友永 作一郎
東濱町	宮田 萬藏	今鍛冶屋町	富山 常吉
今鍛冶屋町	內藤 來太郎	銅座町	田中 吉次郎
銅座町	近藤 常藏	同	東 一安

銅座町	向井 嘉七	銅座町	草村 要
同	中村 佐八郎	船大工町	小山 豐安
福島屋	船本 萬次郎	梅香崎町	盛 藤吉
木籠町	勝木 榮造	大浦町	倉場 富三郎
大浦町	三井物産合名會社長崎支店	同	澤山 精八郎
同	山本 房吉	出島町	深川 支店
材木町	中村 カヨ	袋町	溝口 虎一
浪ノ平町	沈 明久	新地八番	蘇 道生
三餘號	歐陽 仁	同一番	陳 世盟
新地二十番	撫玉山	萬昌號	
德泰號		泰益號	
泰昌號			
同一番			
恆豐號			
同十番			

コークス製造販賣

西濱二十六番地　平田 龜之助

藥種商

住所	氏名
築町四十五番地	西脇 金三郎
築町十番地	鈴田 清二郎

住所	氏名	住所	氏名
船大工町七十八番地	片峰 七郎	木紺屋町四十番地	山道 貞一
西濱町六十五番地	本田 茂吉	船大工町七十九番地	本田忠左衛門
板津町二十三番地	佐藤 峰吉	銀屋町四十三番地	奥田 松次郎
大浦町四百五十番地	藤村 萬作	大黒町四十番地	伊東 敬次郎

硝子商

住所	氏名	住所	氏名
江戸町六十六番地	川副 甚三郎	江戸町六十七番地	豐島 宗吉
同 二十二番地	柳本 善之助		

時計商

住所	氏名	住所	氏名
今鍛冶屋町四十番地	有渡 熊吉	東濱町三十六番地	佐々木 熊吉
本籠町三十五番地	畑 廣三郎	東濱町十一番地	谷口 三郎
本籠町五十番地	浦津 カヲ	本籠町八番地	浦津 重吉
本下町三十四番地	渡邊 喜助	出來鍛冶屋町四十四番地	平石 儀十郎
今鍛冶屋町三十番地	金子 吉太郎		

漁具商

住所	氏名	住所	氏名
築町五十二番地	三津木 林藏	築町十五番地	吉田 直次
西濱町	筒井 末十	築町三十九番地	田中 瑞秋

倉庫業

住所	氏名	住所	氏名
西濱町四十二番地	栗岡 利吉	板津町五十七番地	高見 和平
本五島町三十三番地	肥塚 與八郎	浦五島町三十一番地	中村 雄太郎
浦五島町三十四番地	平松 喜三郎	浦五島町十九番地	松本 守太郎
	永見 倉庫		

自轉車販賣業

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
太陽商會	東濱町	平田 龜之助	梅香崎町	盛輪 商會	

呉服太物商

住所	氏名

住所	氏名	住所	氏名
東濱町三十四番地（鶴屋）	岡部合名會社	西濱町十二番地	島瀬 彌三郎
東濱町二十五番地	藤瀬 宗一郎	大黒町四十二番地	山本 熊作
栃屋町二十二番地	松尾 靜七	榎津町三十一番地	上河 トミ
築町六十三番地	松尾 秀太郎	東濱町四十六番地	岡部 政太郎
銀屋町二十六番地	山口 城八	今鍛冶屋町二十三番地	田中 龍造
本古川町二十二番地	西澤 伊三郎	西濱町十番地	有川 吉之助
出來鍛冶屋町三十五番地	牧瀬 千太郎	東濱町九十四番地	本田 三次郎
出來鍛冶屋町三十四番地	松浦 留市	築町四十七番地	田口 松次郎
東濱町十二番地	田中 直三郎	本石灰町四十六番地	山坡 豐太郎
今鍛冶屋町三十九番地	平 廣太		

舶來雜貨商

住所	氏名	住所	氏名
本籠町一番地	本田 藤三郎	西濱町十一番地	松崎 榮太郎
東濱町四十三番地	立野 權一	東濱町八十三番地	村山 健三郎
同 八十二番地	井上 秀雄	同 三十七番地	一瀨 十次郎

住所	氏名	住所	氏名
東濱町二十二番地	永田 龜太郎	梅香崎町十七番地	櫻部 長吉
梅香崎町	レスナー商會	大浦	バウルス商會
下リ松	カルノー商會	下リ松	レーキ商會

家具商

住所	氏名	住所	氏名
今鍛冶屋町十四番地	林 庄松	今鍛冶屋町二十八番地	桑野 順太郎
出來鍛冶屋町四十一番地	鶴田 末松	萬屋町三十六番地	紙屋 彌太郎
大浦下リ松	芹澤 商會		

洋傘商

住所	氏名	住所	氏名
東濱町七十九番地	町田 元吉	東濱町十四番地	林田 俊三
同 十三番地	川崎 茂三郎	同 九番地	大山 伊八
本下町三十六番地	末岡 龜吉		

靴製造販賣業

住所	氏名

大村町十一番地　岩戸　常五郎
大浦町一番地　川上　平太郎
萬歳町十二番地　松尾　綱吉
大浦町三十一番地　仁科　筆五郎

洋服仕立販賣店

住所	氏名
江戸町七十番地	田中　忠三郎
今鍛冶屋町四十一番地	酒井　作太郎
西濱町六十二番地	島田　房太郎
木博多町三十八番地	吉田　其吉

金銀細工業

住所	氏名
木龍町五十六番地	糸岐　千代藏
本石灰町四十六番地	安田　欽吾

寫眞屋

住所	氏名
大浦町四十二番地	田島　榮次郎
樺島町二十五番地	古賀　初太郎
大浦町十八番地	田島　源四郎
大村町十九番地	吉立　吉松

住所	氏名
西濱町四十七番地	清水　伊三郎
板津町二十三番地	古井　商店
江戸町六十七番地	豐島　宗吉
江戸町六十七番地	椎野　宇平

住所	氏名
木龍町十八番地	柴原　勝次郎

住所	氏名
木龍町二十七番地	爲政　虎藏
千馬町二丁目	上野　秀次郎
本古川町九番地	清河　猛
本石灰町二十五番地	竹下　佳行
板津町十番地	高取　義一郎
大浦町四百三十八番地	石兼　熊一

陶磁器商

屋號	住所	氏名
	木龍町五十五番地	金子　健次郎
	本石灰町三十一番地	雪竹　釣一郎
	東濱町十九番地	島本　平三郎

船具商

住所	氏名
江戸町五十番地	野田喜右衛門

住所	氏名
新町十番地	薛　瑄一
本石灰町四十一番地	河合　乘祿
船大工町十七番地	宮崎　長次郎
本石灰町三十二番地	松尾　謙次
廣馬場一番地	小笠　秀雄
稻佐郷白〇五番地	鈴木　攄雲

屋號	住所	氏名
香蘭社	出島町二十一番地	深川　忠次郎
	東濱町十四番地	山下　傳之助
	同　町二十六番地	三浦　清三郎

住所	氏名
	森　政治郎

西濱町五十九番地　古川　茂三郎

菓子商

菓子　歐米人との接觸關係既に久しきが故に製菓上特殊の技能あり福砂屋及松翁軒名代の糟亭羅、精洋亭の「ビスケット」是本市の誇とする所、一服の玉露に之を味はゞ蓋「カステラ」の眞味茲に在りと呵ばむ、其の他支那人の製造に係る雲片糕、雪片糕及明月餅等あり、又一種の美味あり主なる菓子商は左の如し

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
福砂屋	船大工町四番地	殿村　爲三郎	松翁軒	本大工町六十番地	山口　貞次郎
梅香軒	磨屋町十四番地	岩永　德太郎		本籠町十三番地	渡邊　タヲ
	外浦町五番地	山本　重太郎		小島六番地	平山　槌三郎
	萬屋町八十番地	泉谷　太郎		築町	小西　倉次
	築町十三番地	石本　龍越		本下町三十八番地	白井　仲太郎
	本下町六十二番地	石橋　スヰ			

骨董商

長崎は貿易上の關係より骨董品中、支那の製品甚多し、花月楼所有の楊貴妃の鶴の枕を始め逸品少からず。商店には

麹屋町	池島　正造	本籠町	佐藤　平吉郎		
麹屋町	河野　貞四郎				

等あり。其他

船大工町	西田　友次郎	麹屋町	渡邊　猪三郎		
興善町	京井　芳之助	興善町	横田　萬次郎		

等は商品を奥深く秘めて店を張らぬ方なりと。伊勢町、河端通り、其他の町に數多あり。好古の士普く探しなば思はぬ掘り出し物あるべし。二三年前司馬江漢の油繪の名もなき古道具屋の雜品中より探り出されたるあり。而かも僅僅に拾五錢なりきといふ。三十錢の古渡急須が、京阪地方に轉々して遂に三千圓に賣買せられたる如く、今日誰の手に渡れるにや知らざるのみ。

自轉車貸

住所	氏名	住所	氏名
大浦十九番地	梶原　松次	榎津町七十四番地	今村　フサ
千馬町一丁目	吉村　イセ	大浦町二番地	廣瀬　留藏

鰹製造及販賣店

鰡　本縣特有産物たること既に水産の部に記せり、鰡は薄く一二分に削りて舌の上に載せなば自ら溶解すべし是れ鰡通の食法。宿酔未だ醒さる時の好下物なり其製造及販賣者の主なるもの左の如し

住所	氏名	住所	氏名
本下町三十番地	高野作重	材木町	山本房吉

鰹節販賣店

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
今	材木町	山本房吉	爺	今博多町	宮川彌十郎
分	履津町	村上駒太郎	ますや屋	本下町	荒木松次
	今下町	小野原善藏			

第五節　醫師　（いろは順）

住所	氏名	住所	氏名
本奥善町二十五番地	今村甲子藏	本博多町	今村巽輔
本博多町四十一番地	一瀬正敏	今博多町十番地	岩井正浩
板津町	井上智三郎	大浦町三十七番地	今村豐光

住所	氏名	住所	氏名
大浦町四百四十番地	池邊榮次郎	浪ノ平町十六番地	猪股將次郎
稻佐郷二百六十二番地	伊東祐順	新町四番地	市山正
中川郷	馬場陽齊	出來大工町十五番地	原口謙爾
磨屋町二十番地	林宗準	磨屋町二十番地	林宗甫
材木町町二十五番地	原萬里	今下町十五番地	橋本軍三
本石灰町	橋本玄洋	瀬ノ脇五百七十四番地	濱江俊吉
板津町九番地	西又五郎	丸町七十番地	二宮辰一郎
馬場	堀川俊貞	小島郷	外間榕
浪ノ平町二十一番地	星野昉太郎	下筑後町四番地	朝長安丸郎
般津郷七十八番地	時枝茂	他ノ浦	千々石研太
浦上淵稻佐郷二百五十二番地	千々石廣次	上筑後町二十五番地	大橋純
袋町	太田作治	大井手町十四番地	大串榮太郎
引地町四十番地	岡田恒軒	本古川町十番地	岡田實
本古川町十番地	岡田嘯雲	浦上淵稻佐郷二百六十八番地	大谷安太郎
本古川町四十六番地	鹿兒島甲子之助	本紺屋町十九番地	鹿兒島時成

今鍛冶屋町二十六番地　金子　一狼
浪ノ平町六十一番地　神吉　勵
新町一番地　吉雄　敬
本紙屋町四十九番地　高宮　義夫
今博多町　高島　喜久太
小島十六番地　高見　杏仙
下郷戸町百九十七番地　田中　進
新橋町四番地　中島　眞雄
他ノ浦五百五十一番地　中村　寅三郎
今町五十七番地　村瀬　三英
十人町五十二番地　牟田口　正道
麹屋町十五番地　内野　貫一郎
浦上淵瀬ノ脇六十六番地　野間　周一郎
西濱町五十五番地　草野　殿治
甲郷二千八十七番地　栗本　喜頭雄
八坂町七十二番地　加來　庄策
浦上淵竹ノ久保二百二十六　片岡　慶次郎
材木町　吉原　楫助
本紙屋町四十五番地　高宮　青三
築町百番地　田中　澄太郎
十善寺中ノ平十番地　多賀　右格
西濱町　津守　源之亟
酒屋町五十五番地　長野　進
他ノ浦六百二十八番地　中村　忠
伊勢町四十一番地　村山　百馬
十人町五十二番地　牟田口　佳六
萬屋町　浦上　龜一郎
金屋町十四番地　草野　勝之助
大浦町七百五番地　倉田　龜太郎
本大工町六十五番地　山路　傳六

今魚町五十一番地　安井　由之助
十人町五十八番地　八坂　信助
大浦　松竹　勝次
平戸町七番地　深町　謙吉
馬場町百六十一番地　藤井　精太郎
大浦町網場平　深江　雄次郎
他之浦五百五十一番地　瀬川　藤九郎
本籠町　寺本　一堅
新町　淺田　新太郎
惠美須町六十二番地　齋藤　菅五郎
八坂町五十八番地　彭城　文虎
小曾根町四番地　佐々木　養朴
八坂町七十一番地　佐藤　喜久雄
袋町　菊地　伯英
萬屋町二十一番地　山下　源九郎
板津町六番地　山本　佐源太
浪ノ平　松倉　松治
萬歳町十三番地　深町　享
築町二十三番地　藤瀬　孝之
馬込郷中馬込二百二十一番地　小林　澤太
舟蔵町二丁目三十一號　江口　次郎
新町四番地　雨森　一郎
西古川町　阿久根　重志
船津町十一番地　佐野　政喜
東濱町五十三番地　坂本　高樹
八坂町　佐々木　朴
本古川町五番地　北島　英雄
大浦千七十九番地　遊佐　生次
磨屋町二十八番地　宮崎　省吾

麻屋町四十四番地	下村　亨	十善寺中野三番地　品川百樹
戸町	森　文郁	竹ノ久保郷百七十五番地　森　恒雄
萬屋町	末永　倉太郎	十善寺中野三十六番地　菅沼メリー

第六節　郵便

市内郵便局の所在を列擧すれば左の如し

大浦方面

局名	取扱事務	所在地
長崎郵便局（本局）	郵便、電信、電話	梅香崎町
長崎大浦町郵便局	郵便	大浦郷一、一四八
長崎浪ノ平郷郵便局	郵便	浪ノ平四
長崎戸町郷郵便局	郵便	下郷二九二

中央部方面

局名	取扱事務	所在地
長崎本博多郵便局	郵便　電信、電話	本博多町角
長崎濱町郵便局	郵便、電信	東濱町二六
長崎船大工町郵便局	郵便	船大工町七四
長崎八坂町郵便局	郵便	八坂町三三
長崎大黒町郵便局	郵便	大黒町二五
長崎樺島町郵便局	郵便	樺島町二四
長崎新大工町郵便局	郵便、電信	新大工町六五
長崎櫻町郵便局	郵便	櫻町五〇
長崎諏訪町郵便局	郵便	諏訪町四七

浦上方面

局名	取扱事務	所在地
長崎浦上郵便局	郵便	里郷二一四六

對岸飽ノ浦方面

局名	取扱事務	所在地
長崎稻佐郵便局	郵便、電信、電話	稻佐郷一五七
長崎飽ノ浦郵便局	郵便　電信	飽ノ浦郷六四五

長崎立神郵便局

尙此外水會の爲に
長崎水産共進會郵便局を會場内に設けて、郵便、電信を取扱ふことゝなれり

第七節　旅館及汽船問屋

かの蜀山人が文化二年長崎より江戸に歸る紀行中に
すべて肥前のうちは長崎の湊も近き故にや食物も宜しかりき。けふ山家の蕨餉よりして食物の味宜しからず
と記し且つは長崎料理とて古へより賞贊したりしが如く長崎は料理に於て今尙ほ全國に稱揚せらる。外國人を目的として夫夫設備せる旅館は悉く大浦町、松枝町、廣馬場、新地等に散在せり。大浦方面は元の居留地にして街衢清潔なり。普通旅館は市内到る所之を求め得べきも多くは下方（長崎にて西山、片淵、中川等の山手を上方といひ、海岸に近き方を下方といふ。）に集れり。

旅館

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
長崎ホテル	松枝町		ジャパンホテル	大浦	
フランスホテル	大浦		クリフハウス	下ル町	
ベルビューホテル	松枝町		シーメンスホーム	大浦	
アントニーチー	大浦				
上野屋	萬歳町十二番地	上野彌平	福島屋	大村町十四番地	福島福松
池田屋	平戸町六番地	池田ノニ	寶屋	油屋町一番地	松尾シナ
綠屋	今町五十八番地	三浦コウ	京屋	江戸町四十八番地	百武ヘル
二〇三樓	小島郷千八十八	平松晉吉	土佐屋	本博多町四十四	若林ミチ
松井屋	萬歳町九十二番地	伊勢村伊平	清島屋	江戸町三十五番地	清島長之
益屋	今鍛冶屋町三十三	西川平三郎	西川屋	榎津町四十六番地	西川幸吉
川崎屋	榎津町四十八番地	川崎貞五郎	半田屋	江戸町五十七番地	濱村忠治
竹井屋	江戸町五番地	竹井菊代	帝國ホテル	西濱町七十二	松川好吉
森雨屋	樺島町四十八番地	元村ユキ	西村屋	築町二十二番地	西村重次
大島屋	外浦町三十一番地	相田シゲ	布屋	西濱町五十九番地	稻益源吾
竹井屋	樺島町三十五番地	竹井林太郎	立盛舍	玉江町一丁目一	松井伊之吉
長崎館	樺島町二十八番地	渡邊阜	梅之家	本博多町三十九	吉田キミ

伊崎屋　平戸町十一番地　飯崎ヒサ
永石旅館　本博多町三十七　永石泰
内田屋　板津町四十九番地　清田習蔵
旭屋　本五島町二十五　土田イロ
小林屋　材木町二番地　小林德次郎
江戸屋　萬屋町九十四番地　輕見辰次郎
濱中屋　江戸町四十九番地　濱中傳七
吉永屋　新大工町八番地　原口吉次
三原旅館　平戸町十五番地　三原トモ
小山屋　西濱町六番地　山崎ユウ
備前屋　樺島町二十四番地　齊藤仙吉
松浦屋　樺島町三十九番地　田中ミチ
新屋　萬屋町九十五番地　山本セキ
國防屋　築町六十一番地　藤野清次郎
小城屋　西古川町十九番地　乘富イチ

富士屋　銅座町十五番地　松村安太郎
黒板屋　引地町四十一番地　黒板フサ
東洋館　今町五十四番地　永淵猪之吉
三木屋　江戸町四十ノ一　古賀小市
米金　萬屋町三十九番地　米屋金三郎
勢喜屋　江戸町五十二番地　藤野彌助
碇屋　同町三十一番地　寺田初三郎
明治旅館　玉江町二丁目七　岩崎サト
岩永屋　銅座町八十八番地　岩永スミ
深江屋　西濱町六十二番地　深川又吉
松野屋　玉江町二丁目五　佐々木シグ
あい屋　萬屋町二十五番地　愛谷龜之助
赤瀬屋　板津町七十一番地　赤瀬勝三郎
千代ノ家　萬屋町九十三番地　柴田ユキ
島原屋　萬屋町九十八番地　中村スヤ

木村屋　築町三十八番地　木村猪之助
雪ノ家　萬屋町九番地　森山儀一郎
松見屋　萬屋町三番地　宮崎養三郎
吉野屋　興善町四十三番地　平井ナヨ
多久屋　舟津町三十七番地　西岡歌吉
茶屋　櫻町五十七番地　茶谷柳吉
崎陽館　出來大工町十四　松園有三
河野客桟　勝山町二十一番地　河野源吉
長門屋　銀屋町六十一番地　縄田マキ
黒川屋　樺島町二十八番地　黒川彦十
綿屋　引地町三十八番地　田中ヤス
加賀屋　西濱町四十二番地　木下キチ
和泉屋　江戸町五十一番地　廣瀬クニ
大村屋　惠美須町三十七　村田セキ
浦五島町三十ノ十號大串ミノ

小林屋　築町二十八番地　吉村豐次郎
有馬屋　板津町二十七番地　八木新市
肥前屋　今町十六番地　西野フヨ
虎屋　今町六十番地　野田サダ
小松屋　小川町二十三番地　森シゲ
櫻屋　引地町四十一番地　吉岡タミ
副島屋　新大工町十七番地　副島キナ
富士屋　諏訪町五十六番地　本田龜吉
戎屋　磨屋町四十九番地　小柳吉滿
伊豫屋　東濱町四十九番地　入江堅治
肥後屋　玉江町二丁目八　中山スエ
福本屋　江戸町四十三番地　柳田フヨ
池田屋　出來鍛冶屋町廿九　池田峻馬
三木屋　大黒町五十八番地　森泰藏
内山旅館　浦五島町八番地　内山繁二

城田屋	大黒町三十六番地	城田タケ	山喜屋	豐後町三十九番地	山口治三郎		
萬力屋	西中町四番地	内田マス	すみ屋	藁場町二番地	貞住ミチ		
松田屋	藁場町十一番地	松田仲次郎	田中屋	浦上山里郷二百三十二番地	田中クマ		
沖見屋	元馬込二十二番地	小泉キン	肥前屋	里郷五百五十六	岸川シマ		
肥前屋	里郷二百二十八	千々岩フジ	紙屋	興善町五十一番地	木吉シゲ		
森田屋	引地町二十九番地	森田宗太郎	高木屋	興善町十一番地	高木マツ		
宮本屋	新町十二番地	近藤實馬	坂本屋	今町六十四番地	坂本伊三郎		
	里郷五百四十三	熊部與一	永友屋	興善町二十四番地	永友キク		
小島屋	萬屋町十四番地	佐々木サモ	中島屋	大村町十七番地	中島ミキ		
松尾屋	大村町十二番地	松尾千代太	長田屋	江戸町七十一	中松和三郎		
中村屋	樺島町五十四番地	中村文作	松浦屋	樺島町三十九番地	吉福良二		
竹井屋支店	玉江町二丁目七番地	山田トマ	網屋	玉江町二丁目	永野藏市		
吉川屋	江戸町三十四番地	吉川重義	和泉屋	江戸町六十四番地	辛島亘		
田口屋	江戸町六十三番地	田口サエ		西濱町三番地	田中一郎		
川口屋	八坂町六十三番地	中村ナカ	筑後屋	東濱町四十八番地	柄見五平		

松尾屋　西濱町四十二番地　松尾清一郎

汽船問屋

屋號	住所	氏名	屋號	住所	氏名
納富廻漕店	江戸町六八	納富甚吉	三木屋	江戸町四九	古賀小市
關屋	同五二	藤野彌助	江口商店	同五七	江口泰太
清島屋	同三四	清島長之	半田屋	同五七	吉田仁右衛門
田原屋	同六一	田原儀八	内山廻漕店	同三五	長橋年太郎
森崎廻漕部	同三一	寺田初三郎	喜久屋	同六二	松本梅三郎
筑紫組	西濱町五三	橙原喜三郎	尼崎汽船會社主任		吉岡民太郎
中村廻漕店	西濱町六九	中村幸三郎	江下廻漕店	築町二九	江下與三郎
小林廻漕店	築町二八	吉村豐次郎	森崎廻漕店	本五島町二七	寺田恒一郎
備前屋	樺島町三四	戸野本九郎	竹井屋	樺島町三五	竹井林太郎
土佐屋	樺島町	山口トシ	福島屋	江戸町二六	福島福松
原口商店	江戸町七五	原口松太郎	立盛舍	玉江町三丁目	松井猪之吉

第八節　料理店

日本料理

歐亞の粹を集めたる所謂粹の粹なるものは長崎料理なり。我が國人の淡泊なる食味と清國人の濃厚なる食味と歐米人の汁物に乏しき食味とを鹽梅調理したるものは長崎料理なり。古、既に長崎卓子式といふ一種の料理法ありき。今や其卓子式は形を變へて長崎料理となりぬ。

何處も同しき事ならんも長崎一般の習慣として宴席上杯を擧ぐるに先ちて先つ「オヒレ」なるものを傾くるを普通とす。此「オヒレ」は頗注意して鹽梅したるものにして、餅、魚肉、野菜等奇麗に調へられたり。而かも「オヒレ」の價値は之にあらずして實に一大椀の八九分まで「なみ〳〵」と盛られたる汁にあり、是れや實に其總ての料理の價値を品定めすべき試驗管たるなり。扨吸ひ終ふる頃木杯銚子式の古風を守れる處あり。直に孟德利の今樣あり。各店各特長あり甲は「ヒレ」に妙を得乙は砂糖鹽梅に技を見せ丙は「フライ」に味をこむる等到底列擧するに暇あらざるべし。其食品は魚肉の新鮮種類の豐富、野菜の洋種を多く用ゐる事等其特色にして價且廉なり。

西洋料理は福屋、精洋亭を除く外他は外國人向にして大浦に在り。福屋は我國に於ける西洋料理店の開祖とも稱すべし。昔を偲ばん諸君は福屋樓上杯を啣みて問へ盜松類端々君に向つて答へなむ。

西洋料理之部

電話番號	屋號	住所	氏名	電話番號	屋號	住所	氏名
三〇	福屋	小島四四六	中村健吉	八五七	精洋亭	丙濱町六八	馬場ユキ
五〇三	外國亭	外浦町四四	原田久次郎				

日本料理之部

電話番號	屋號	住所	氏名	電話番號	屋號	住所	氏名
五六	迎陽亭	上筑後町二六	杉山吉太郎	二五三	富貴樓	西山九一	內田トヨ
六〇二	瓊林館	西山八六	久保田清之	六〇五	藤屋	伊良林四九	松尾作一
二二六	一力	新橋町五三	山本保吉	一四二	共樂亭	袋町十九	小方直次
一五四	玉川	紙屋町七	藤井ノブ	六三七	萬歲	今籠町十一	小方ヨシ
九一五	カルース温泉菅花園	馬場一九〇	安田伊太郎	一七二	萬歲	樺島町三一	荒木ヨヲ
		百花園	小島五〇六	三八三		金屋町七	梅木傳吉
		茶茶屋	上長崎村二〇六			小林屋	板津町七	小林猶太郎
		吉宗	萬屋町八九			スシヨシ	西濱町五四	小田リウ
七〇六	友樂	出雲町一二〇四ノイ	浦邊サト	八五	熊本屋	稻佐字淵二〇八	熊本三太郎

六三二　東語　古町二五　杉山スヒ

若藤　晉佐宇淵

丸山遊廓及其附近

電話番號	屋號	住所	氏名	電話番號	屋號	住所	氏名
一四三	寶亭	小島三四四	松尾仲三郎	一六六	大鶴	本石灰町三五	中原甚三郎
七七四	杉木屋	丸山町十九	三輪タカ	四二二	鹿島屋	丸山町十三	安田リウ
四一六	玄若屋	丸山町八三	森若屋アサ	一	德	同町七二	相川ムメ
三六四	杉木屋	同町八一	古澤長次郎	七七三	鶴の家	本石灰町二四	中島ミノ
四〇九	大國亭	丸山町四五	米田コト	二四六	瀧口亭	本石灰町一	田島ツル

鋤燒

長崎の鋤燒は天下一品。世の多くは鋤燒といへば一口に下層社會の得意と思へど、長崎の鋤燒店は多く上層中層を得意とす。負けじ魂の江戸子も鋤燒だけはと負惜をいふ。

長崎特有の鍋に特別に飼育せられたる雞の肉を「チリリ」と燒く迄に持ち運ばれたる刺身其他二三品を味ひまだ燒けずやと待遠き感に打たるるもたかし。肉の柔きは彼等の誇り、價亦頗る廉。

鋤燒屋

電話番號	屋號	住所	氏名	電話番號	屋號	住所	氏名
三五三	銀杏亭	今銀冶屋町四三近	藤ヤス	三四六	滿月	萬歳町五	高瀨宇吉
一二六	蛤亭	西濱町五	後藤リヤウ		梅木亭	本石灰町五二	梅木傳吉
二三五	見晴亭	萬歳町一四	松元コノ	九八三	新蛤亭	西濱町八三ノ三	山田マツ
八七二	川崎屋	西中町一三	川崎富五郎	一七二	萬歳	樺島町三一	荒木ヨチ
二九三	津田屋	今町五九	津田ツナ	四八六	榮家	引地町三一	堺林太郎
三二三	神戸屋	麹屋町四五	深堀舜三郎		有明	今下町四	米原クニ
七〇〇	萬勝亭	本石灰町二七	鮫島ワシ				

丸山遊廓及其附近

電話番號	屋號	住所	氏名	電話番號	屋號	住所	氏名
六四九	松亭	本石灰町三六	松田多次郎	八三一	一三亭	丸山町四六	水頭伊次郎
	本石灰町二四	中島ミノ		五一二	花岡亭	丸山町五〇	橋本セイ
	梅の家	丸山町一〇三	吉岡タマ	九七一	山月	小島四五五	杉本亥之八
九四〇	寶來	丸山町六四	吉村トヨ				

饂飩屋、蕎麥屋

御手輕の處が鋤燒、孫や娘を引張つて一寸晩餐、これ長崎式、從つて饂飩屋、蕎麥屋の繁昌は發束な

し。市中兩三戸を數ふるのみ。

饂飩蕎麥其他

鰻屋の部

電話番號	屋號	住所	氏名
三三三	泉屋	引地町三五	秋山常次

電話番號	屋號	住所	氏名
五〇七	青柳	東濱町五	村瀬熊太郎

饂飩蕎麥之部

電話番號	屋號	住所	氏名
二九七	明月庵	本石灰町三〇	石田寅吉

電話番號	屋號	住所	氏名
一四〇	扇一庵	本古川町三六	小城ミツ
	東京樓	船大工町八八	田中平太郎

鮓、茶碗蒸之部

屋號	住所	氏名
松友	廣屋町三十二番地	松村友吉
	本五島町三十九番地	伊藤セイ

汁子之部

屋號	住所	氏名
松の家	出來鍛冶屋町二七	松下タキ
	船大工町八六	藤並佐吉

ビヤホール及洋酒雜貨之部

住所	氏名
船大工町三	隅部久藏
小島六番地	平山槌三郎

第九節　名物餅

名所に名所なく、名物に名物なし、げにや源五郎鮒の知きは其一なるべし。其臭き香を賞するに至らざれば其味を品騰すべき資格なしとぞ。長崎の名物餅は甘藷の尤賞する所なり。總て名物名所は見たる時味ひたる時にはさしも甘し美しと思はねど鄉黨への土產話、遙遙來たまへる諸君廊に味ひ給へや

梅が枝餅	大德寺境內	べた餅	諏訪神社廻廊
きび餅	櫻馬場	櫻餅	新大工町天滿宮內

梅が枝餅　名所舊跡の部に述べたれば云はず。べた餅「ボタ餅」「おはぎ」と普通いへるもの別に珍しきものにもあらねど名物餅たるを失はず。きび餅、菊見の歸り途に必味ふ好名物餅。櫻餅櫻の葉に包たるが味あり

何れ劣らぬ名物餅、餘りに味ひ過ぎて頤を落し給ふな。

第十節　長崎の三大名物

長崎に名所名物ありやと問ふ人あらば廣袤一里所在悉く名所名物なりと答へむ。開港以來三百年、其外交史を飾る花は茲處に開きたるなり。其の枝、其の幹、其の根は此一里四方の土地に蟠屈して往時の盛を語るにあらずや。名所名物は是ならずして何ぞ。然れども斯の如き歴史名物にあらずして他に名物ありやと問はば余は長崎三大名物を以て答へむ。三大名物とは何ぞ。曰はく諏訪の祭、盆祭、紙鳶揚げ是なり。

諏訪神事

抬、單衣、各好み〳〵に任すべき十月の六日の暮方に若大鳥居より長坂を攀ぢて奉拜せんとするものあらば人は必す彼の耳にささやかむ「君登る勿れ辛き目見ん」彼の群集を見ずや、彼等の手と口とは今無聊に困みて囂々たるを聞かずや」と所謂踊馬場の兩側より長坂を始め兩側の「ダンダラ」坂は人と人と相重り頭と頭と相集りて新に人の坂々築けり。若夫余は行くべき權利ありなど生「ハイカラ」に行かんか。忽ち手より手に、人より人に、頭より頭に落されて夢心地に轉又轉。其漸く「ホット」息つく時帽子飛び衣服脱して身は是眞の赤裸裸たるを覺らむ。

今こそ警官の警戒嚴にさしたる事も起らざれ。こゝ十數年前までは實に夥しき有樣なりき。數十萬の人人の中には白トツボ組と稱する優勢なる一團あり、壮壯夫あり、腕白小僧あり。是等は各好き場所を選みて明七日の早朝に奏演せらるべき踊を品騰せんとて集れるなり。此群集の下方は即踊馬場馬場の兩側には棧敷を架して不廉なる料金を貪らるゝが故に勢この群集はこの場所に居を占めざるべからざるなり。喧々囂々夜を徹して騒ぎあへるが中に夜は明け離れんとす。時已に傘鉾は現はれぬ、待ちあぐみたる群集、何とて默すべき。「ヤンヤ〳〵」と喝采、反響に響さて夥し。（此傘鉾は一町の誇とするもの「下り」の如きは遠く四座に誘へ數千圓を費すといふ。諸上の飾は町により異り。各意匠を凝して製作せるものなり其金色燦爛の美眼を眩ぜしむ。）傘鉾の奉納あり。傘鉾は下りの垂れたるのみならず上に種種の飾り物を載せ且下には平均を取らんため穴明の錢を貫きたるものを數多括り付けあれば年年慣れたる傘鉾持さへ手こわきものなり。傘鉾を持ちたる儘三度めぐりて神前に向つて敬禮す下りは風に煽られて翩翩たり飾物は朝日に輝さて閃閃たり奉納し了へて歸らんとすれば所望の聲湧く。再前の如くす。二度三度重ねたるものは苦しさにえ堪へで逃ぐるが如く急ぎ降る。而かも所望せられば爲さゞるべからず。觀者は以て樂むべきも奏者は息も絶々なり。進退幾度の後踊は始まりぬ。第一の演奏は丸山寄合の兩遊廓より毎年更番に出すものにて文龍元年筑前博多より來れりといふ高尾、音羽の二遊女諸町に先ちて舞ひ始めたるが流例永制となれるものとか。其頃は稲屋町、古町、今博多町などは遊女町なりしといふ。選りすぐりたる美妓數十人、天の羽衣振り翳し翩躚として舞へば、さしもの群集鳴を靜めて之を見る昔誰やらか「敗島の大和島根は神代より女なくては夜の明けぬ國」とされ歌詠みたるが神も必ずうれしとみうなはすらむ。一曲終へて引下らむとする時、所望〳〵の聲は

拍手喝采につれて起れば再舞ふ。舞ふこと彌多くして所望の聲彌多きは踊町の名譽なりとか。踊町にては豫てより所望踊として種々の踊を稽古し置くなり。されば昔は「白トッポ」組などいへるものに酒數挺を贈りて賞賛を買へりしこともありとぞ。さもありなん、なれども今はさる事もなかるべし。斯くして十一町の踊順次に進みて奏す。奏し終はる頃は午前十一時過にもなりぬべし。踊り終へたるものは順次伊勢宮並八坂神社に奏演す。然れども既に踊馬場にて充分踊り疲れたる彼等は同向院の大相撲を打ち上げたる力士が地方巡遊に力瘤を入れざるが如く勢既に脱けて甚疎略になりゆく。夫れより次第に各町に於ける豫定の踊場所を踊り終へて「ホット」一息つく頃は夜半頃なりといふ。

踊馬場の演奏終れば、昨夜より飲まず食はず、而かも聲は枯れ、目は疲れ、耳は聾のやうになれる群集は潮の寄するが如く我を先にと驅け出し先づ飢を醫するなり。下よりは今日の渡御を拜せんと老も若きも町々辻々に立てり。上るもの下るもの、行くもの、歸るもの其混雜熱鬧殆名狀すべからず。やがて渡御、三社の御輿は長坂をひた下りに下る。其疾きこと飛鳥の如し。中には意地惡き御輿丁等あれば第一の御輿に突き掛く第三の御輿は第一第二に突き掛くるなり。されば真先の御輿丁ほど心配なるはあらじ。此時突掛けたるが喧嘩の根となりて然るべき花も咲きたりといへど人の心の利巧になゆきたると警官の注意保護宜しきを得て今は喧嘩などは無きなり。此よりは肅々として渡御、數十萬の群集たのかじし御輿に奉祭するぞかし。これも昔の十か一なりといふ。御道筋は平々同じき道なり。

行列は神功皇后三韓退治御本陣の行裝なりとか。寛永十一年九月七日初めて渡御の式あり。其頃豐後府内住の神主の一族宗也と云へる者零落して萬屋町にありけるを召出して教へしむ。と舊記に見えたり。御行列は十數町に及びぬべし。御供には宮司以下多く騎馬にて從ひ奉る。桃尻ならんものは落ちて笑はれもしつべし。劒戟幡蓋等の御寶物は幼き子等の捧ぐるもあり。綺羅を盡して着飾れば其美しさ云はん方なし。此は年番町の子女なりといふ。

八　日

大波止御旅所に奉幣使たつ。祭儀甚にぎやかなり。昔は奉行之を勤めき。國幣社には內務部長參向すべき定制なれど、諏訪社に限りて縣社たりし時より維新以後特に知事參向せらるるが恒例となれり。今は知事官邸前に棧敷を設けて、各國領事、文武の高等官及縣會議員等を招待して踊を觀覽せしむること常例なり。

九　日

けふは還御の日なり。七日大波止假屋の御旅所に渡御せられてより、人は悉く大波止に集れり。大波止の賑ひいはむ方なし。今日の踊は大波止の神前に始まりて諏訪の踊馬場うれより次第に各神社に行くなり。踊の種類も異り昨日一日骨休みしたる事なれば元氣も加はりたるなるべし。

神事に就きて

神事を執り行ふに年番町と神事町とあり。年番町の中に會計町と幹事町とわり。今年擧げらるべき神事に就きて年番町は昨年の年番町より事務の引繼を受く。毎年三月下旬なり。四月初めより神事の準備に取掛る。神事町は六月一日「小屋入り」す。即踊の準備に取掛る。是より日々夫々準備に着手すれば暇などはなきなり。踊町七十七町を七つに分ては七年目毎に廻り來となり御輿丁は西山、小島、中川、片淵等の七鄕より四年毎に出すこと古へよりの定なり。

神事と道路

神事町に當れる處は二間餘の青竹に笹の付きたるを幾十本家毎に建つ。竹と竹との間は二三尺の間隔なれば間口の廣きほど多く建てざるべからず。店を閉ぢ定紋打つたる幕引き廻したれば何となく神々しき心地す。夜は軒毎に提灯を掲ぐ。

神事町と渡御の道路とは毎歲道路を修繕するが從來の慣例なれば踊町は七年目毎に道路の大修理を受くることとなるなり。

神事と家屋

神事町は勿論其他の町々も神事以前に必家を洗ひ生漉を塗り、少し古びたる家屋の如きは新しく造作するが故に甚綺麗なり。長崎にては他の都市にて往々見るが如き棟塀等に塵芥の堆く積めるが如きは殆見ること能はざるなり。是年に一回は必ず總べて掃除すればなり。此外に十二月の煤掃は云ふまでもなく行はる。

庭見せ

面白き習慣なり。概ね祭日の兩三日前の夜(概十月一日)庭見せとて踊町各自の庭園を一般の人に觀覽せしむ。此夜は勝手に人の庭園に到ることを得べし。自ら作り成せる庭園も多かれど、又强ちにしらざる家のみにはあらじ。さる家にては一夜の中に。山のたゝすまひ。池の心奥深く作り成したるも多し。かゝる小家にこの大松はいかにぞやと首傾くるもたかし。人出亦歩行し難きほどなり。斯く多數の人々の押合ひ揉合ひ小庭に立入ること如何にも不用心なる事なれど、さりとて庭見せの夜に盜難に罹りたりとの事も聞かざるが如し。夫の伴天連「いるまん」禁止後若猶信仰するものなきかを點檢する方法なりきといふ。遺風存して今は神事に伴ふ一の行事の如くなりたり。

盆祭 (長崎イルミネーション)

七月十一二日の頃より「編菰」〜〜とて賣り行く者あり。是十三日の夕刻より家毎に墳を設け編菰を敷き佛壇の位牌を其上に移し飾るが爲めなり。之を精靈棚といふ。代々の靈魂此夜四更に來るべしとて各珍菓佳饌を備へ、門口には盆燈籠を吊し深更に至るまで戸を鎖さずして迎へ待てり。新墓即新に死者を出したる家にては此夕より墓地に點火す。菩提寺の僧侶は來りて讀經す。之を棚經といふとぞ。雲水の僧等も家々に來りて讀經し各布施を得て去る。僧侶の忙さ目の廻るほどなり。十四日漸く暮れな

んとする頃子女は悉く粧を凝して墓地に急ぐ。墓の前に二段或は三段に燈架を設けて燈灯を掲ぐ。其數二三十よゝ多きは幾百に及ぶ。是皆其親戚故舊知己より贈れるものにて其提灯の多きは各戸の大に訪とする所なり。數年前迄は佳饌を供し莚を敷き其上にて行厨を食ひ甚しきは三味など彈きて夜の更くるも知らざりしといふ。今は流行病及風紀等の關係より舊暦の盆祭は新暦に改り、飲食を禁じ、剩へ蠟燭は一提灯一本宛としたれば連山悉く火所謂長崎の「イルミチーション」も十時過には悉く消にて復寂寞たるに至る　此夜三面の連山一帶燈火盛に燃ゆる時子供等爆竹を放ち。流星音火矢など稱ふる花火を揚ぐ。實にその壯觀美觀到底京都の大の字等の及ぶ所にあらず。十五日夜亦然り

十五日夜墓所より歸へり、各豫て製作したる薬船に種々の佳饌を載せ。兩舷に數多の提灯を吊せり。此船は精靈船といひ、大波止より海上に流すを精靈流しといふ。大きなるは二三十人にて之を舁き、鐘皷を打鳴し或は「ナーイダイ」と呼ぶ蓋「ヂャンコン」は鐘皷の合圖を口にて唱ふるものにて「ナーマイダイ」及「ナイダイ」は南無阿彌陀佛の訛れなるものなり「ヂーヤンコン」〜「ドーイ」〜或は「ナームアイダイ」「ノーイドーイ」と一齊に唱へつゝ大波止さして急き行く、多くは家毎に拵へ町毎に拵ふれば其數幾千百なるを知らず。興善町邊にて或好事家の數へたるに一分間に大小七十餘の船を數へたりといふ又以　如何に精靈船の多きを知るに足らむ。今電信線を切斷する虞あれば長き檣を立つることを禁じたり且波止場にて思ひ〜に放ち棄て、別れ難きは舟を仕立て三味太皷など加へて波のまに〜漂ふ船を見送りたれど、斯くてはさらぬだに年々埋りゆく港の一層淺くなるを愛ひ今は流せば直に之を囲平船に引上げ。港外に運びて之を燒棄すといふ。船は龍骨、肋骨等は木或は竹にて製し麥藁或は莚等にて包みて潮水の浸入を防げり。船には極樂丸、西方丸或は六字の名號十字の題目等を太書したる白木綿或は白紙にて帆を揭ぐ

此夜、火災を警め雜閙を防ぐ爲め。非番の巡査を繰出し。消防夫數百來りて警む。又以て其盛を見るべし。

精進落ち

十六日は精進落ちとて必鷄肉或は伊勢蝦（長崎方言「ヱビ」を食するを例とせり。

紙鳶揚げ

（天下の奇觀）

神事、盆祭の如き我國到る處之を行はざるなし。若有りとせば其は縣下及各府縣に散在せる「カゾリック」教徒あるのみ。唯其華麗善美を盡せるに至つては恐くは他に比するものなからむ。獨紙鳶揚の競技は本縣寧長崎市特有の技術的遊戯たるなり。

方言、紙鳶を「ハタ」といひ、絲を「ヨマ」といふ。「ヨマ」には硝子又は磁器を細末にせるもの或は金剛砂を糊に和し之を塗り付けて乾せり。此硝子又は金剛砂などを塗りたる絲を單に「ビイドロ」と稱す。「ビイドロ」は硝子の隣語なり。絲を買うには百間を單位とす、通常百間と稱ふるは六尺間にて八間より十

間位迄なり。此價七錢なり。輪贏を爭ふに概千間より二千間迄の絲をつけざるべからざるか故に絲の代七十錢乃至壹圓四五十錢とぞ。されば一度紙鳶を截られんか三回以上四五回は忽に風に吹き飛はさるる譯なり。甲壹圓四五十錢とぞ。されば一度紙鳶を截られんか三回以上四五回は忽に風に吹き飛はさるる譯なり。甲の紙鳶と乙の紙鳶と互に糸を引掛けて輪贏を爭ふ。之を「カクル」といふ。紙鳶には種類あり。八文、十二文、十六文より次第に上りて百文に至る。文は古の錢價なり。「ツブラカシ」に用ふるは概六十四文より百文迄の中なり。今八文紙鳶は壹錢五厘。百文紙鳶は五十錢の價なり。又張り紙の模樣に依りて一々名を附す。例へば横川、巴、元祿、鯨の皮、立山、山形、井桁に蝙蝠、月に蝙蝠、二にん綺、三にん綺等其他幾十の名稱あり。

紙鳶屋

昔は矢を作ぐに三年竹の節近なるをさきたるが紙鳶屋と稱する商賈人此市中に數十人あり。彼等は太くして成るべく節遠き竹を選みて其骨を削る。削り終へて紙鳶の形にし之を田舍に送りて竈の上に吊すこと兩三年。充分枯れたる後再之を削り直し俗に「紙鳶紙」と稱する紙を張り、夫々模樣を書きて貯ふ。元より斯く紙鳶屋と稱するほどのものは多く一定の顧客あれば、其顧客の手癖を充分に心得且客よりの注文によりて然るべく製するなり。

三月十日

準備は整ひぬ。いざ金比羅山に急かむ。春風嫋々。到ればさしも廣濶なる山上殆立錐の地なし。油斷せば「ビイドロ」に引掛けられて耳、鼻をも殺ぎ取らるべし。鮮屋あり、料理店あり、酒屋あり。彼等はたのがじし、しかるべき場所を占領して商へり。定紋の幕打ちめぐらして老幼男女瓢を傾くるあり。傍には今截られたるが殘念さに復讐せんと急噪つあり。仰けば空には無數の紙鳶右に左に上に下に飛揚せり。勝ち誇りて揚々たるあり。喝采湧くか如く起るあり、截斷せられ切齒するあり瓢々として雲際に入るあり、下には截られたる紙鳶を取らんとて長き竹竿に棘など結ひ付けて競ひ立するあり、之を「ヤダモン」といふ。或は「ヨマ」に竹枝など結び付けて紙鳶の截れたるを引掛けて奪ふものあり、之を「ツケトリ」といふ。此は一般に賤めらる。昔は「ツブラカシ」とて一日にして身代を消盡したること もありたりといふ。其盛なること殆想像に餘あり。而して其優劣は素より糸、紙鳶及風によれど多くは五指の働きにあり。追ひつ追はれつする其巧妙なる働は筆舌の能くすべきにあらず。此を手初めとして風頭山に二回、郊外合戰一回都合三回にして終る。時漸く暑に入る

―――――――――――――――

遠きものは音にも聞きつらむ、近きものは眼にも見よ。日本一の紙鳶揚げと名乘上げひはなか〳〵に鳥滸がましき業なれど共進會開會中一回懸賞競技あるべしとの事にて審判長なる夫々任命せられたり。見逃し給ひては一代の不覺ならむかし。

―――――――――――――――

處、風俗、國言葉といへるか如く國國に依りて風俗習慣多少異なるあり。今尤特異と思はるるものを掲げむ。幸に井底の蛙どな誹りたまひそ。

剉龍（ぺーロン）

伯龍とも書す、訛りては「ビヤーロン」ともいふ。一種の競漕なり。五月五日午後二三時頃より始ひ。船は競漕用に特別に製したるものあり。「ぺーロン」船といふ。大なるは兩艘合して三四十人を載すべし。各一種の櫂にて漕ぐなり鐘と銅羅と一時に「ドン〳〵〳〵」と叩けば漕手は「シッ〳〵〳〵」と三度漕ぐ。斯くして起點を定めて漕ぎ出す。素より數年鍛ひ上げたる漁民なれば其速なること驚くに堪へたり。稻佐、戸町及郊外深堀、茂木等にて行ふ。この技は彼の厥世詩人偏屈原が汨羅に投じたる時棹も取り敢へず附近の村民之を救はんとあせりたる遺風なりといふ。其進會開會中競技あり。

名越の神事

飯諏社住吉大神の祭禮にて六月晦日に行はるる夏越の神事なり。拜殿に茅の輪を懸け參詣の人皆之を潜くるされば「輪越」と訛る人あり。當日は廻廊には生花の奉納夥しく、長坂より馬町に至る間、見世物・興行者新を競ひ奇を爭へり。又御祓團子とて紅黄白三色の團子を榊の枝に貫きたるを鬻げり。兒女爭ひて之を求ひ。

總べて長崎人士は深く神佛を敬するの風あり。されば毎月朔日、十五日には神社に奉幣するもの引きも切らず。從つて淫祠の建立又少きにあらざるべし。

冠婚葬祭

婚葬共に其儀式甚盛なり。殊に著しく古格を嚴守する風あり。婚姻の儀總べて古格に據る。郡村に至りては或は「嫁偸み」と稱する弊風今も猶行はれざるにあらず。葬儀亦古格なり。繁雜に渉れば詳記せず。

五月の節句

男節句ともいふ。軒に菖、蓬を葺き、幟を建つること何處も同じかるべし。唯粽を製するに二種あり、一は普通の粽、他は俗に唐灰汁餅（トーアンチヂ）と稱して唐灰汁に糯米を浸して蒸したるを食す。又一種の味あり。此日は如何なる故にか、古より必ず干鰒、筍、蒟を煮たるものを食すること例なり。

せーらえんか（旗取遊戯）

夏の頃小供等旗押立てて「せーらにんか」と口々に唱へ歩く。「せーら」は「競りハ」の訛「えんか」は「得ヌカ」なり。然れども「カ」は口中に消にて殆聲かず「せーらにん」と聞ゆ。仲町の子供に旗取りの競技を挑み歩くものなり。此頃教育者間對抗競技喧しき問題となれるが、本市にては一般に行はる。三角旗押し立てて練り歩く樣勇し。

其他尚記さば四月八日の釋尊誕生日に天竺花と稱して躑躅花を笠頂に挾みて屋上に立て冬至には必す

善哉餅を食す。こは古唐通事若くは唐人と關係ある諸商人より唐人屋敷に送りたる遺風なりとぞ。三月二十一日は弘法大師の緣日とて各町多きは二三箇所、大師の木像或は畫像を飾りて種々の物を供へ、僧を請して讀經し、奉賽の人々には接待と稱し一皿の菓子を與ふる習慣あり。此日城の越にて紙鳶揚げあり。城の越の山中幾百の弘法大師を祀れり。參詣者甚多し。港外香燒島に延命寺あり。大師に緣故深かればとて信徒群集す。正月二日より十六日までの中に左記

金比羅山、七面山、烽火岳、秋葉山、豐前坊彦山、愛宕山の七嶺を攀ぢて歸る習慣あり。

衣　服（唐人股引）

同じ國中の事とて、さしたる相違もあらざるべけれど男子美服を纏ふときは寬濶なる股引を纏ふことは一種特有ならんか。地質は概、紋縮緬、紋羽二重、夏に絽等を用ふ。又郡部にても農樵夫の田畠山林に入るに之を穿つ。地質は木綿なり。

帶解祝の衣裳

伺處の國にても帶解祝を催すこと常の例なり。當地にては女子の宮參する時人を雇ひ、雛やうに粧はしめて、肩に載せて行く。衣裳は多く縮緬にて本裁に裁ちたるを長く、垂れて行くを常とす。

隱語しらべ

奥州に草餅、鳥羽に走り鍾、馬關に走柯あり又其地方の特有語。長崎に青餅、「トービー」羅紗めん、墨縮緬、よもや縮緬の語あり。此等の語意義各異り。果して如何なる意義を有するか。唯讀者の推卽と判斷とに任せんのみ。

「ナヤボン」（書生の好物）

今は支那留學生の各地に入込めるが故珍しきことも有らざるべし。市内十數個所あり。多くは支那人の製する饂飩に牛豚雞肉葱等を雜ゆ故に甚濃厚に過ぐれば慣れざるものは、厭味を感ずれども。書生は概して之を好めり

團平船

縣下各港にあれども、本市は最多し。日露戰爭中、軍隊の發送地及上陸地にて盛に用ゐられたりといふ。胴の張りて頑丈、不恰好の船なれど、石炭、米其他貨物を運ぶに妙なり。屋根作のものを船荷庫といふ。昔和蘭貿易の盛なる頃之に積込きて倉庫に代用せしめたりといふ。

サンパン

三鞭酒にあらず。通船の事なり。先代深堀領主の發明なりとぞ。船の舳は支那風に尖り彩色したり。屋形は黑船式なり。他郷の人には珍しき心地すべし。

面白き職業

本港に出入する艦船の石炭を積みて出帆したる後、然るべき網にて積込の際海中に落ちたるを拾ひ

る職業あり。而して市にては此職業に課税したるを見れば如何に其利益の大なるかを知るに足らむ。

第十一節　長崎の二大工事

水道工事

世に恐しきもの五あり、地震、雷、火事、親爺、傳染病是なり。此地地層脆くして殆地震なく、又雷も尠し。親は恐しきものなれど、そは封建時代の物件同樣の取扱を受けたる時の事、今は高襟嬢が毒舌を弄しての口へんばく、明治の御代となりしも一部は奥齒噛み締めて强意見する老人の力に依れど、天保親爺がと一口に云ひけつ世の中、何恐しき事のあるべき。火事と傳染病とは何時の世、如何なる時にも恐しきもの、中にも虎列刺病は古より「トンコロリ」(忽ちコロリと死する意)と稱して恐れたり。本市は殊に外國貿易上我國唯一の港たりしが故に從來傳染病の襲來頗猖獗を極め、夏期に至れば人皆安き心もなかりしを、今は「ペスト」の爲に夜もねずみの大騒動、虎疫の爲に上を下への大騒なるに、茲處には珍客來らず、來れば消毒劑の勝差に忽ち追ひ返して、傳染すること殆稀なる狀態に在り。火事も古は名物の一、長崎半分を燒き盡したる事もありしを、今は僅に一二戸を燒失するに止まり殊に一年間一二度に過ぎず。是實に一に水道の設あるが故なりけり。

今試に火災及流行病に關する統計を示さむ

火災調				
區別	自十九年至廿三年五ヶ年累計	戸數千ニ對スル比例	自卅一年至卅五年五ヶ年累計	戸數千ニ對スル比例
現在戸數	三七、二四三	—	一一五、六〇一	—
出火度數	五一	一、三七	八八	〇、七六
火災戸數	一七八	四、七八	一五二	一、三一
延燒戸數	一二七	三、四一	六四	〇、五五

流行病調				
區別	自十九年至廿三年五ヶ年累計	人口千ニ對スル比例	自卅一年至卅五年五ヶ年累計	人口千ニ對スル比例
コレラ病	八二三	三、五八	七六八	一、三八
腸チブス病	七七	〇、三四	四三七	〇、七八
赤痢病	五九七	二、六〇	四二一	〇、七五
計	一、四九七	六、五二	一、六二六	二、九一
現在人口	二二九、七九九	—	五五七、五四五	—

今西山、本河内に至らば、谿谷相迫れる處、一大堅壁の巍然として高く聳ゆるを見む。是實に本市十

七萬の市民に飲料水を供給する貯水池にして百四十六萬一千二百圓（內國庫補助四十二萬七千圓）を投じたる大工事、人口十八万二千、一人一日の要量三立方呎〇一の豫定を以て、明治三十四年三月工を起し、三十七年三月竣工せり。

本河內水道より猶貯水池に沿ひて進めば再び一貯水池に達すべし。是即普通貯水道と稱するものにして明治十九年以來設置の計畫を爲し人口の極度を六萬人、一人一日の要量三立方呎二一と豫定し、漸く明治二十二年四月工を起し二十四年三月竣工したりしものなり。

舊水道と新水道

僅に十三四年前に本市人口を六萬と豫定したりしもの、今は實に十七萬を計ふるに至れり。此の如き急激なる人口增加と市區の擴張とは本市の面目を一變せしめ、新水道未だ成らざる市民の飲料水缺乏の爲めに至大の困難を嘗めたることも甚しかりき。舊水道を創設する當時甚しき市民の反對ありしも未だ十數年ならざるに喜びて約百五十萬の鉅額を吝まざりし所に急激なる人智の發達を認むべく、舊水道貯水池の設計と新水道とを比較せば直に過去十數年間に於ける築造學の進歩發達の如何に急激なるかを認むることを得む。舊水道は本市最高部への給水池たるのみならず。又好箇の紀念物たるを失はず。

長崎港灣改良工事

本港は南端一條の港口を除く外、殆四面山を繞らし、其區域約一億有餘坪に達し陸上は峯巒屏を作し谿谷の間苟くも鋤犂の入るべき地は悉く菜圃と爲し復尺寸の地をも剩さず。殊に日清戰爭後急激の膨脹は年一年市街の狹隘を告ぐるのみならず。道路の開鑿、下水上水の造設を見るに至り、爲めに土砂の流出を助成すること尠からず、假令一旦浚疏すと雖更に後年維持の計畫を爲すにあらざれば、再土砂の堆積を見ること蓋免るべからず。明治二十四年の調査に依るに本港內に於る土砂の堆積は平均一年二寸四分に達し、明治二十八九年の交、本港灣の平面積、約百五十餘萬坪の內其十分の一は干潮點以上に露出するの狀況を呈せり。是に於て明治三十年以後七箇年の歲月と約五百萬圓の巨費とを以て大改良を加へ天然の良港は人工の施設と相待ちて大に其面目を一新するに至れり。

顧て古を考ふるに寛永十八年長崎港を以て唯一の互市場と定めしより二百六十餘年間、時に盛衰なきにあらざりしも終始貿易上の特權を占有して永く繁榮を專にせり。昔時如何に港灣維持の方法を以て此良港に處したりしかは知る由なきも、開港當時は春德寺下より森崎に（今の縣廳舍地）至る一帶の地のみ僅に松の並木の生ひ茂れるのみと舊記に記せるを見る一の橋迄は唐船も自由に駛りたりといへば略其當時を知ることを得べし。其後幾十の町の築かれたるのみならず、外國人居留地として數次港內の埋築を爲すと共に時に浚渫を加へたることわり。降て明治十七年土砂杆止の爲め浦上川流域內其他本港に流注する河川の沿岸に防砂地を設け或は堰堤を築きて流砂を沈澱せしめ同時に中島川流末の變更

及港内の浚渫等諸種の工を起し、明治二十二年に至り一旦改良工事の竣成を告ぐ。工費約三十萬圓なりき。今五百萬圓の巨額と七個年の歳月日の間に成れる工事は左の如し但今は概要を記すのみ。

(一)浚渫

浚渫平面積は約二十六萬九千餘坪、最干潮以下二十一尺乃至三十尺の水深を保たしむ。浚渫土砂の全量は實に四十八萬六千立坪に達せり

(二)埋築

埋立地の出來形面積十八萬二千三百一坪餘

(三)街衢

街衢は成るべく井狀に形り宅地の區劃は長六十間、幅三十間を目的とせるも位置又は地形に由り多少の變化あり。道路は其幅員十間、八間、六間、四間、三間の五種に分ち、六間以上に在ては中間を車道、兩側を人道とし、車道、人道の境界には下水溝を付せり

第十二節　神社佛閣

諏訪神社（國幣小社）

重疊環拱せる峯巒悉く、茅萱茫々、秋草錦を飾りて絢爛の美を呈す。獨り、松樟高く天に聳えて霄

茂、禽鳥之に宿りて美音を弄する所即玉園山にして諏訪神社茲に在り。千木高く聳え、宮柱ふとしく建てり。廻廊長く連りて自ら森嚴、稱して鎮西の大社と云ふ。市民の尊崇甚だ厚く簪客絶ゆる時なし。

諏訪神祠、舊は今の寺町長照寺の右にありき。今も其通衢を諏訪町といふ。弘治年中、綾部助京師より奉遷して祀れるものなり。

住吉祠、舊は今の小島郷正覺寺の地に在り。

森崎祠、舊は森崎（又杵崎とも稱す）即ち今の外浦町に在り。

天領以來霜切支丹猖獗、遂に其二社を毀ち森崎祠を焚く。郷民田川氏併せて圓山に祀れり。寛永十一年來行榊原飛彈守、神尾内記市中に令して敬神の風を奬勵し、同年九月七日神事祭禮を行ふ。是れ祭禮の始にして今に至つて變ずることなし。慶安元年今の地に遷せり。此地素と神宮寺の跡なれば襲ぎて神宮寺と稱せり。

祭神。

健御名方大神

八坂刀賣大神

合殿

森崎大神

祭神　伊邪奈岐命
　　伊邪那美命

住吉大神

祭神　上筒之男命
　　中筒之男命
　　底筒之男命

社殿間數

神殿	二間半に三間半	渡殿	一間半に三間半
祝詞殿	一間半に七間	登り殿	七間に二間
舞殿	二間に三間	拜殿	三間に五間
御炊屋	四間半に三間	神庫	三間に七間
廻廊	二間に七十二間	中間	二間に二間
總門	二間に四間半		

境内六千八百八十五餘坪、八坂神社、嚴島神社、稻荷神祠あり。

七十二間の廻廊と青銅の鳥居とは尤視線の集る所なり。鳥居は天保二年森田嘉兵衛の願立せるものにして准三后一條忠良公の染筆「鎭西大社」の額を掲げたりしも、明治七年暴風の際青銅鳥居倒壞したり、明治二十五年有志相謀り鳥居再建の爲め醵金し、忽ちにして二萬餘金を得たり、即三菱造船所の鑄造する所にして再び成る鎭西大社の額古色蒼然今も尙懸れり。

震翰

當社に對する歷朝の尊崇甚厚し。享保八年七月五日中御門天皇は正一位を贈らせられ、同二十年、社祿として銀六十貫目を充て行はれ、元祿六年、靈元天皇は「神」の一字を奉授せらる。今猶本殿に御額として掲ぐ。安政四年九月御炎上、此事先帝の宸聽に達し文久三年薩島原藩主松平主殿頭に造營主任を命し再建の勅諚を賜はる。歲月を重ぬること十餘年間にして成る。結構壯麗、輪奐の美を極む。明治十四年六月縣社なるに關らず、特別の御思召を以て隔年幣帛料を下賜せられ、同十七年より毎年下賜せられ、大祭には必知事奉幣使として參向せらるゝことゝなれり。蓋國幣小社には通常地方官參向すべきこと常例たり。本社は特に知事之を勸む。明治二十八年七月十一日、國幣小社に昇格す。同三十三年十月廿六日畏くも皇太子殿下九州行啓の際御參拜、幣帛を供し給へり。

神字勅諭には有栖川宮幸仁親王及九卿の添翰あり。今その一二を記さむ

主計頭藤原永弘は肥前國諏訪社の神職として仕ふる畢代々を經たり。常に道の誠を志して高きにの

ぼりては富士の雪をわけ白山の雪を凌ぎ金の岬の奥を尋ね紀路の遠山を遠とせず。西の海は更にもいはと、越の白波に浮び橋立の松を眺めかりにも神の御室と聽けば到らずといふ所なし。延寶ゝ帝此事をいみじと思召して永弘が望み申すまゝに畏くも神の一字の宸翰を染め下し給ひぬ。誠に道の光を現はし守れる至寶何か之に過ぎむ。身に及ばぬ願の足りぬる幸を忘れずして猶月の本の光を仰がざらめや

あふけ猶いとゝ貴き此の君の　　幸仁親王
恵みをしるも神の恵を

肥前國長崎諏訪社の神官從六位上藤原永弘多年之願望卒于姑射山上辱以　宸翰書二神字下賜之實人生之榮幸古往今來比類絶倫惟無他至誠通神之感應也但願天長地久　寶祚　聖壽之懇祈日滋無懈矣

元祿六歳次癸酉秋八月二十有五日

銀青光祿大夫藤原公音

和歌及詩

日野權大納言資枝卿

霞

から人の貢そなふる船あさた
湊のどかにかすむ朝なき

光うふ玉園山の櫻花
神も他かすや年々に見む

日野樓中納言資矩卿

肥前國諏訪社の太麻をいたゝきて
この道の契も老に長崎の

冷泉權大納言爲持卿

諏訪の社にかくるゆふしで
玉園山に朝とく詣でて

中島廣足

百鳥の聲もうららに通ふなり
外山の色のあけほのゝ空

支考

去來

○

一はやみ二は月影の鳥居かな
たふとさを京て語るも諏訪の月

諏訪神社境内は諏訪公園に連る。廻廊には「べた餅あり」茗を喫しつゝ俯瞰すれば市人の來往、艦船の出入、市井の廣狹、曲折、一々指點すべし。月夜榻に凭りて嘯くは更に興あり。

伊勢太神並豊受大神を祀れり。寛永十六年修驗南蠻院存祐、伊勢度會長官の許可を得て假祠を新高龍町に建てたり。是より町名を伊勢町といふ。時に奉行竹中采女正幕府に請ひて造營費十二貫目を下付せらる。爾後諏訪神社、松森神社と共に長崎三社と稱せられ諸式朱印地に準せらる。正保三年出雲國島左馬允直重來り南蠻院を襲ぎて神職となる。寛文四年佐久間、駒木根の兩奉行其の役俸を捐てゝ修覆す此時四民歌舞神材を運搬して一に伊勢太神宮御造營の式に擬せしといふ。境域廣からず。域内形勝の地にあらざれども甚だ多し。

松森神社

諏訪神社の下の丘上にあり。元と圓山と稱せり。地高燥近くは城の越の古城趾を臨み、遠く豊前坊、蛾眉山等の諸山を望む。眞に一幅の畫圖、境域二千六百餘坪、元和中、川上光房今町多町に小社を創始し、明暦二年八月、今の地に移せり。社内に瑞雛あり、職人遊を彫刻せり左甚五郎の作と傳ふ。域外旗亭富貴樓あり。磴を下れば古の流鏑場今は旗亭瓊林館あり。地形勝を占ひるを以て四時快を縱にするものたえず。

祇園社（八坂神社）

寶樹山麓に祀れり、港内を一眸の中に收むることを得。寛永三年、今籠町の内に建つ。同十五年今の地に移す。毎年六月一日より十五日間祭祀を行ふ。之を祇園祭といひ日夜參詣者織るが如く山下の例

西山郷

八坂町

伊良林郷

市は長崎の大觀たり。明治元年神佛の合祀を禁ずるに及び寺を改めて社と爲せり。是時九州鎮撫總督澤宣嘉氏八坂神社の四字を書して社頭に掲げたり。是より町名を八坂町と改む。域外劇場祇園座あり。

稲荷神社

風頭山麓樹林蓊鬱として晝猶暗く溪水潺々として流るゝ幽邃の地、遙に諏訪神社と相對せり。楠正成保食神を河内國に鎮め祭られしを寛永年中同國の士若杉某長崎に來れる時神靈を奉じ延寶元年今の地を選びて鎮座し奉れりといふ。享保二十一年、長崎奉行細井安明寄附して社殿を再建したり。初午の祭日には遠近來り詣でて殆と歩すべからず。今、楓樹霜に飽き渥丹の美一眸の中に在り。磴を下れば藤屋あり、料理店中客人に對し意を用ふることの厚きを以て名あり、

伊良林郷

水神社

蛇柏町荒神堂の右にあり。承應元年澁江刑部之を建つ。後元文四年今の地に移せり。境内千餘坪、美都波能賣神を祀る。嘗て樊舶將に出帆せんとして碇を卷かんとすれども碇遂に拔けず。則吏黑川氏即水神祠官澁江公姿に命ず。公姿船に到り祈禱數回即之を扛ぐ船長大に喜び砂糖並に海黄（甲斐絹）十數端を贈る。公姿曰はく余は酒を嗜む砂糖は用なし。常に綿服を纒ふ絹類更に用なしとて受けざりきといふ。代々澁江氏恬淡此の如き人を出す。橘諸兄の裔といふ。

八幡神社、宮地嶽神社、

八幡町

正保三年山城國八幡宮の分靈を鎮祭し、承應二年社殿を建設し白鳩山大覺寺と唱へたり。明治元年八幡神社と稱す。

磁器の鳥居に宮地嶽神社の額を右に八幡宮の額を左に掲ぐ。宮地嶽神社は明治十一年筑前國宗像郡宮地嶽神社の分靈を祀る。隣りて八幡座といふ劇場あり。

此外

八幡宮（正保三年豐後府内城主日根野織部正建た岩原郷に建つ寛永元年今の地に移す）　中川郷

梅園天滿宮（元祿十三年丸山町乙名安田次右衛門の建つる所）　小島郷

櫻馬場天滿宮（慶長年間修驗威福院始めて建つ。今殆廢址の觀あり）　馬場郷

等尚記さば數多あるべし。

崇福寺　高野平郷

禪宗臨濟派、寛永六年明の歸化人何、林、魏、諸氏資を集め僧超然を請じて建立したるものなり。明暦元年黄檗隱元禪師法を說くこと三年、即非和尚明より來り住して堂宇を修築せり。福州人の菩提所なるが故に世呼びて福州寺と稱す。左に九鯉湖八仙あり、右に大道公又關聖祠五方五帝の像あり。其製極めて精奇、山内に大釜あり天和二年の飢饉に際し住職千獻、書籍什具を賣りて粥を炊き貧民を賑恤せし時に使用したるものなり。徑五尺五寸一時に米四石二斗を炊ぐべく日々之れに依りて千餘人を救ひたりといふ。境域實に七千餘坪。本堂樓門及び唐門は今特別保護建物となれり即非作「第一峰」の額面は注目の價あらん

縣内神社佛閣其他建築物甚多し。然れども未だ美術の模範となり天下後世の人士をして景仰欽慕措く能はざらしむる美術に至つては實に寥々たるなり。惟之有り崇福寺の大殿、三門、第一峰門、即是なり。

種目	構造形式
大殿（本堂）	桁行五間梁間六間重層屋根入母屋造本瓦葺
三門（樓門）	三間三戸樓門、屋根入母屋造、本瓦葺
第一峰門（唐門）	四脚門、屋根入母屋造本瓦葺

三門は即總門にして今は俗に國寶門といへり。即非の建つる所、建築唐風に模倣して甚古雅なり。

十八羅漢　伊良林郷

境内に在り、僧隱元の刻する所、京黄檗宗本山の羅漢は模して造れるものなりといふ。

皓臺寺（勅賜海雲山）

禪宗曹洞派　慶長年中、平戸の僧龍翁岩原郷に一菴を結び笠頭山洪泰寺と號す。是同寺の開祖なり、地は今聖福寺境内となれり。元和元年佐賀玉林寺の住職一庭勅を奉じて洪泰寺に來り大に切支丹教徒

の轉宗を勸誘し。寛永三年寺堂を今の地に移す。同九年畏くも明正天皇より寺僧丁外に廣學禪師の號を賜ひ紫衣をさへ許され、寺號をば海雲山普昭皓臺寺と賜へり。慶安元年境內除租の朱印を得たり。同二年禪師、道德優長の僧雪山を以て住持とせんことを幕府に請ふ。幕府即雪山を召し老中列座の席に於て住持に補し筑前藩に命じて途次を警衛せしむ。三代月秀住持に補せらるるに際して時服を拜領したりといふ。又以て當時幕府が如何に此寺院に囑望したりしかを知るべし。本堂に安置せる釋迦、文殊、普賢の三像は唐製にして明人高一覽の寄附する所なり。境內一萬餘坪。

總門には勅賜海雲山の堅額を掲ぐ。聯は

法窟爲國賜建立直輔王道千古　堂頭承鈞旨提綱永祝聖世萬年

林道榮の筆、此門は遠羅國船の帆柱一本を以て造れりといふ。

華嚴閣は俗に大佛といふ。延寶六年五代逆流和尙の創建なり。

臘八示衆　四代　玄光

今辰脚下明星現　須知諸人立處高　財物我家富如海　莫遊貧里競錐刀

法華の意を　十八代　漢三

ひとえたのにほひもたかし鶯の山の

尾の上にとける花のしたひも

十如是　相

春の花秋のもみち葉いろ〳〵の

香色にめてゝなかめくらしつ

性

濁り江もきよきなかれもへたてしな

かけすみわたる秋の夜のつき

體

これもよしそれもよしのゝ山櫻

みねにも尾にもかゝるしら雲

力

さほ姫の手引のいとの青柳は

かせたわめともをるゝものかは

作

心よりかたき岩をもしらぬ弓

いぬけるためしありとこそきけ

因

見てしよりそのたもかけのわすられて
後の世までもうきる戀しさ

緣

緣にしあれは水とる玉に久かたの
月のしつくのなかれきにけ

果

草も木も花さく春のありければ
みのなる秋はたのもしきかな

報

よしあしの難波のこともさきの世の
むくいとしれはいかてうらみむ

本末究竟

もとすゑは夢かうつゝか不知火の
こゝろつくしのうき世なりけり

大音寺

伊良林鄉

正覺山と號す。今籠町に面す。世人今籠町を大音寺籠町と呼びて本籠町と區別す。蓋此巨刹あるを以てなり。淨土宗京都智恩院派、開山傳譽は素筑後の人流落して僧と爲り長崎に來り古町伊勢屋傳之丞の家に慧心僧都の作れる彌陀の尊像あるを耳にし請ひて之を拜し經文を講じたり。奉行長谷川氏之を聞きて傳譽を留めて里民を教導せしむ。且傳之丞の家に菴を結びて像を安置し中道院といへり是實に慶長十九年なり。寛永十八年松平伊豆守信綱島原凱陣の時長崎に來り銀百枚を賜ひ今の地に移す。依て正覺山大音寺と稱す。同年朱印を賜ふ。境域内二万三千餘坪、其廣きこと諸寺に冠たり。物徂徠の開山傳譽上人の碑文あり。

崎陽大音寺傳譽上人碑

享保己亥歳、肥崎陽大音住持上人慧海、奉其先師眞公之遺命、爲開祖傳譽上人、立碑山門之右、又不遠千里、將幣東都謁余、不腆之辭以紀其功績、余不佞謝不敏、不可、按狀、上人諱觀徹、傳譽其字、號法蓮社、筑後州人也、世姓安武氏、出自藤原氏、父義久、稱八郎、相傳世守安武城、因以爲姓、上人爲其第三子、生而九歳、得度於州之瀚高教寺、以穎慧聞、十四歳、游學關東、籍于常之大念講寺、臘滿、賜黄、得稱上人、慶長甲寅歳、游化崎陽、初勝國時、以筑之博多、爲海舶互市所、國朝始制慶博多、置鎮崎陽、方其時、百事草剏、亦莫有寺院矣、値西洋人執左道、以惑衆者、蔓延海内、有

旨禁之、弗能哉、乃以酷刑、然後、稍々哉、獨崎陽爲夷人所館、自非我民人、不可得而詰、而民之盜蚩、習於邪、不悛、盤結莫之解也、官吏執法、能革其面、而莫喻于懷、鎮臺患之、聞上人勇且精也、乃構圍焦于古街、以居之、號中道院、大張金仙之教、以喻導、爲務、初稱檀越者、僅僅二三十人、及於玄風大煽、邪徒屏息、蹋銅版以來歸者、日益衆矣、左道之嵬、於是乎大沮、遂至有竊謀害上人者、凡國家之制、不許民帶雙劍、而鎮臺特許其檀越家、以此捍上人、重其任也、台廟時、元和丙辰歲、鎮臺奉準以故西洋館之地、在舊唐多街者、賜上人爲寺、越明年丁巳歲、寺成、山號正覺、寺稱大音、惟院之名仍舊、崎陽於是乎、始有寺焉、凡其俗土官譯人、以至諸禪師上人、皆以八月朔、執謁鎮臺、如宅邦賀正者儀、而大音寺住持上人、例獨先禪師上人者、以此、猷廟時、寛永丙子歲、民之竊奉西洋教者、聚反於州之島原天草之地、豆州刺史、川越侯源信綱、督海西九州諸侯之軍、以圍之、越明年、賊平、又明年戊寅歲、源公、聞上人嘗有大功勞、特賜賊鐘寺樓、以爲京觀、又奏請賜今地以移寺、以市街焉也、辛巳歲、猷廟召見上人、出班獨謁、賜時服三、又特賜封告、以鎮道場、祠曹文書副焉、凡崎陽諸寺院、有封告者、莫先焉、又賜白金百錠、以充移寺之資、令崎陽戸出一夫、以助其役、厥後大音寺住持上人、世朝東都、例皆出班獨謁者、以此、慶安辛卯歲十一月十三日丁亥、上人寂、法臘五十有六、世壽六十有四、嚴廟時、寛文甲辰歲、特賜白金百錠于第三世住持上人法愛、爲修寺料、以開祖上人之故也、凡國朝之制、無貴賤、死必受度於寺、懲西洋之姦也、而崎陽諸寺院、每度死者、必勞以告官、以嚴其防、獨大音寺、則否、亦以開祖上人之故也、茂鄉按祀典、能禦大菑、則祀之、能禦大患、則祀之、夫西洋之夷、雖瑣乎微、包藏禍心、密謀竊國、巧言如偸、以餌愚民、罔知覺、論胥相溺以蹈刑戮、是其菑、甚於洪水猛獸也、厥在慶長元和之際、官所不能挽其心、而上人能拯之、朝廷、憫其愚而莫能爲仁、而能達朝廷之仁者、上人有焉、則上人之於崎陽、功豈在禹下哉、夫崎陽之民、亦繁矣、其祖其先、稱上人、而得爲良民、不殄其世者、豈鮮鮮乎、今諸刹雲興、家殊其宗、宗爭其教、斷斷然以聒之、則上人之有德於我、其孰知之、故特表之以祀典之義、是何翅、在其爲正覺開山祖師哉、崎陽之民其戸祀之可也、銘曰民牀乎邪、迷死不回、威所不服、恩不能徠、大音一振、于集其志、全其首領、子孫繁齒、不爭不喻、不喻不存、上人爭之、其爭也、仁

興福寺

伊良林鄉

東明山と號す。禪宗臨濟派、舊、明の歸化人歐陽氏の別業、後明の江西の人眞圓來り事に依り罪を獲、剃髮して之に隱る。寛永年僧默子資を募り一宇を建て唐船安全の祈願所と爲す。承應三年黄檗宗明僧隱元禪師聘に應じ來りて此寺に入る。明年禪師堂宇狹くして居住に便ならざるを以て資を唐人間に募りて修築す。其額に扁して東明山と云ふ。蓋祖道晦きこと久し必東より明ならひの意なりと。內に東廬東福の二菴あり。東廬は默子の建つる所、內に八勝あり。世世南京人の菩提寺たるが故に人呼びて南京寺といふ。三代逸然は長崎に於ける漢蓋の始祖にして其名天下に嘖嘖たり。

隱元豆、隱元菜

世に傳ふ、隱元豆隱元菜は禪師の齋す所と、果して然りとせば、我長崎より次第に國々に傳播したるものか。

長照寺（寛永八年建立）　伊良林郷
延命寺（寛永七年竹中重次建）　同
淨安寺（寛永元年僧誓譽建）藥師堂の像は聖德太子の刻する所といふ　同
三寶寺（元和九年建）　同
深崇寺（元和元年僧淨慶建）　同
禪林寺（正保元年僧石峰建）　同
光源寺（寛永八年僧松吟建）　同
大光寺（慶長十九年慶了之を剏む、蓋切支丹教徒の廢宅なり）　八坂町
清水寺（元和九年建ゝ）　同
潮灌地藏（創立年代不詳）　同
寶輪寺（寛永二十年修驗增慶剏む）　同

崇福寺より寶輪寺に至る十數箇寺は風頭山麓に列れり。前に伊良林郷に在りと記せるもの即俗に寺町と稱するものなり。寺町は片側町、境内何處も老樹枝を垂れて蔚蔚たり。上方は即墓地、古墳新墓猶遠くより認め得べし。近年保勝の說盛に行はれて櫻、楓の類を植栽したりといふ。十數年を出でずして春花秋葉一大園地を成すに至らむ。

長照寺の下に旗亭一力あり。昔は山陽などの遊びし所、今も粹士の妓を擁して淺酌低唱に夜の短きを唧つ所とぞ。

本蓮寺　岩原郷

聖林山と號す、法華宗本國寺派。元和六年僧日慈（肥後熊本の產時に大村本經寺の住持）大村より來りて堵を此地に設け正法を說く。此地切支丹寺の廢趾なり。寛永十八年大村侯大村純直代官末次平藏等資を醵して伽藍を建立し正保五年二月朱印を受く。本殿の靈瑞道場の大額は高玄岱の書する所なり。境内一萬坪餘。

福濟寺　岩原郷

分紫山と號す。禪宗臨濟派、寛永中道者覺悔庵室を結び天妃聖母を奉ず、慶安二年明僧戒琬來る。戒琬は元泉州紫雲山に居る故に分紫山と號す。明暦元年木庵來つて之に臨む。惣門の額は福濟禪寺の四字、木庵の筆なり。聯に

紫氣裔雲光福濟　滄江玉帶擁山門

とあり亦木庵の筆なり。

蜀山人の書簡中

此間福濟寺聖福寺等の唐寺（唐人建立いたし候寺）一覽いたし候處一體堂の造よりして唐畫の如く門の榜額に龍の彫物のふち書は木庵卽非（金剛寺籟思出候き）等堂門ども一一に聯有之門前の石欄石基等日本のやうには思はれず是許は三都に無之驚目申候三百里外を經候一得は是許と存候

下に旗亭迎陽亭あり。長崎第一を以て鳴る。滄江の美、眼下に在り。斧屐の宝及百墨敢の大廣間は同亭の誇とする所

聖福寺　岩原郷

萬壽山と號す。禪宗臨濟派。延寶五年僧道胖之を搖ひ。道胖字は鐵心、寛文元年木庵禪師に從ひ宇治黄檗山に到りて道を修め歸りて福濟寺内に住す。延寶五年免許あり寺を建つ。唐寺三箇寺の目付寺と稱す。寺内に大梵鐘あり。音三里に達す。俗に鐵心の大鐘と稱す

聖無動寺（正保元年僧專音創立）　岩原郷

法泉寺（元和七年傳譽の嫡弟信譽之を創む）　下筑後町

聖德寺（寛永三年僧專譽之を建つ）　馬込郷

勸善寺（寛永三年淨念之を搖ひ）　岩原郷

永昌寺（正保三年僧泉益之を建つ）　岩原郷

以上八箇寺、望吳山麓に在りて僅に寺名を存するものなきにしもあらざれども悉く形勝の地を占む。市中一眸の中に在り。殊に船舶の出入汽車の發著悉く眼下に集る。

春德寺　夫婦川郷

華嶽山と號す。禪宗五山派、是卽長崎甚左衛門の古城趾にして慶長年中切支丹教徒の「トートノサンタ」を建てたる所なり。寛永十七年僧泰室始めて寺を岩原郷に建て慶安三年末次平藏此處に移したり。寺背山麓に寛永以降切支丹書物改役を掌りし東海氏の墳墓あり。東海氏は一生を墓普請に暮したる人にして石柵に金銀を鏤めたりといふ。當時譯官の役德の如何に大なりしかを知るに足らむ。當時亦形勝の一たり。畫伯鐵翁は此の寺の先住なり。

正覺寺　小島郷

光壽山と號す。一向宗佛光寺派。舊芋原（スヂ）の地に在り。傳へ云ふ寺澤志摩守長崎支配の事は文祿元年より慶長七年に至る十一年間なり。其頃內町外町皆切支丹にて寺院などいふものなし。偶川口に道智といふ者あり、是卽正覺寺の開祖なり。道智は素武士、加藤淸正に仕へ征韓の軍に從ひ後長崎に來り、船津町庄林五左衛門に寓居し淨土の法門を修したり。然れども未だ經文を讀誦すること能はず、慶長五年家康長崎の切支丹に靡き從へる事を聽き小笠原一庵を差下され奉行たらしむ。是卽長崎奉行の始なり。一庵道智に命じて庵を構へしむ。是卽正覺寺にして、長崎佛寺再興の始なり。其比、道智、傳譽、

慶了、慶西、泰雲とて五僧あり、道智は正覺寺、傳樂は大音寺、慶了は大光寺、慶西は光永寺、泰雲は晴臺寺の開基なり。寛永十年朱印同格となり、享和中築地筋塀を許さる。

桶屋町、古町

光永寺

舊、是切支丹教徒の支院の在りし處、慶長十九年命して之を毀つ。慶西、寺院を建つ。寛政十一年、朱印地に準せらる。眞宗東本願寺の末寺大光寺と共に其名世に高し。

對岸、稻佐郷

悟眞寺

終南山と號す。淨土宗鎮西派筑後善道寺の末寺、慶長三年僧聖譽來りて菴室を結ぶ。時に切支丹徒の妨害甚しく爲めに沙門の來りて住するものなし。是切支丹教徒横暴後佛寺搬立の第一著手なり、後朱印を賜る。後方の墓地は概外國人を葬る所。骨を埋む異境の土、古墳苔むして累累たり、蟲聲唧唧、梵唄幽に響きて轉た遊士の袂を濕さしむ。

本河内郷

妙相寺

水道水源池を琵琶湖とせばこれはたしかに三井寺なるべし。實に形勝の地甌を携へて水源池見物旁一日の行樂其快如何にぞや。延寶七年僧逆流建つ。

此外

西勝寺（寛永九年僧守證建つ）

地福院（寛永八年僧教空剏む）

等數多ありぬべし。今は記さず。

第十三節　名所巡遊

伊勢町

第一日

會期五十日、本縣主催の關西九州府縣聯合水産共進會を觀覽せむとて、或は汽車より汽船より陸續として來集せらるる紳士淑女の爲めに、茲に本縣内の名勝古蹟を案内して聊遠來の勞を慰せむとす。會場を發足點と定め壽橋を渡り停車場前を過れば構島町なり、ここには大阪商船株式會社支店、東京火災保險株式會社支店、紀平合資會社其の他旧漕店、旅館、貿易商館あり。尚進めば大波止に達せむ。

東中町

大波止

文祿年中始めて此所を長崎役船、其餘の船繫場と定め、海を埋め地所を築立て、石段を造り港内見張番所を建てゝ之を海表口と唱へたり。慶長元年、高札一串（高札一枚を一串といふ）を建つ、寛永十一年九月諏訪神事の折、榊原飛彈守下知して當所を永年の御旅所と定められたり。是より毎歳八月朔日、神輿渡御鎮座の地と定め、地鎮祭を行ひ、注連繩を張りて汚穢を禁じ不淨を攘へり。慶長元年の高札は

定

港は斷なくして築出す事を許さず幷怪物塵芥一切是を捨つべからず。若猥の輩於有之は可爲曲事もの也。

十　月

今も猶諏訪神事は長崎三大名物の一にして大波止港御の時には、人は歩して行くにあらず。足を宙にして、搖られ〳〵揉まれ〳〵て漸く神前に達するを得るなり。

御高札場

慶長元年始めて波止場に御高札一串建てたり。其後唐館前に一串、二の門内に一串、大黒町、西濱町、北瀨崎米藏、中川郷、浦上村山里、同淵村、小瀨戸浦、小島郷、木鉢郷、土生田烟硝藏、大田尾砲臺等各一串宛建てたり。波止場高札には切支丹宗門の訴人に被下囑託銀を懸けたり。是は寛永三年頃よりなりとか。其後延寶八年波止場の高札をば豐後町に移し後、明和三年是を八百屋町に移せり。是今の鐘樓にして、普通この邊を鐘の辻といふ。鐘樓は午砲撃かれてよゝ唯空しく聳ゆるのみとなれり。

定

一、ばてれん訴人　　銀五百枚

一、いるまん訴人　　銀三百枚

一、同宿幷宗門の訴人　　銀五十枚

又は百枚品によるべし、扨又隱し置他所より顯はるるにおては其者幷五人組迄曲事たるべき事

右之通囑託被下べき旨先年被仰渡彌以相守るべし若違背のもの有之ば急度嚴科に處せらるべきもの也

延寶八年八月　　日

「ばてれん」は切支丹僧、「いるまん」は其徒弟を指せる當時の語なり。

千斤の砲彈

砲彈は廻り五尺八寸、重さ約千斤、大砲の長さは九間、口徑三尺、一たび之を放てば玉藥千五百斤を要せりと云ふ、大砲は今何處に在るか詳ならざれども砲彈は今も猶大波止に飾らる。寛永十四年、天草の四郎が堂大の原城に據りて天下の兵を禦弄したりし時、唐通詞瀨川官兵衛之を製し、船にて原城下に送し城際に穴を掘通したれども、賊之を偵知し向ひ穴を掘り雜水を流しかけたるが故何の用をも爲さず落城の後空しく長崎に積廻したるものなりといふ。爾來武器の進歩發達驚くべく、要塞戰に二十八珊の臼砲を使用して偉功を奏したるは日露戰役の經驗する所、千斤の砲彈、九間の巨砲、敢て驚くに足らずと雖、今より二百六七十年前、此巨砲巨彈とを鑄造したりし其大膽――寧無鐵砲なる。勇

氣に感嘆せざるを得ず。

大波止は古、唯一の埠頭なりしのみならず、今も荷船客の來往、貨物の集散甚多し。對岸稻佐、飽之浦、宮神、水ノ浦、平戸小屋等への渡海船あり。更に進めば末廣町に至る。末廣町の左側は舊和蘭館にして

定

一、日本人異國人御法度を背き不依何事惡事を巧み禮物を賴み候もの有之ば急度申出べし
縱令同類たりといふとも咎をゆるし其禮物の一倍御褒美下さるべし若し隱し置訴人有之におゐては可處罪科もの也

寛永十六年卯十月　日

奉行

禁制

一傾城之外女入事
一高野ひじりの外出家山伏入事
一諸勸進之もの并乞食入事
附橋の下船乘廻る事
一斷なくして阿蘭陀人出島より外へ出る事

寛永十八年巳十月

の高札の建てられたる處にして有名なる寛永の鎖國令後の高札なり。序に鎖國令を紹介せむ。

一日本國被成御制禁之「キリシタン」宗門之儀乍存其趣弘彼法之者于今密々差渡之事
一宗門之族結徒黨企邪義則御誅罰之事
一伴天連同宗旨之者かくれ居所へ從彼國つゝけの物送あたふる事
右因茲自今以後「カレウタ」渡海之儀被停止之畢此上若差渡においては破却其船并乘來者悉可處斬罪之旨被仰出也仍執達如件

寛永十六年七月五日

對馬守
以下六人連名

此令は「カレウタ」船に與へしものなり。

此處には今は內外倶樂部、電話交換局、十八銀行、基督教會堂等あり。末廣町を直ぐに或は出島一周を遊びて入江町或は千馬町を取りて進む、千馬町二丁目に上野寫眞館あり。橋あり、日露の戰役九州各師團の兵の常港を發したるもの悉く此橋を渡れり。故に出帥橋と名づく。會場より右側出帥橋に至るまで悉く港灣改良事業として新に埋築したる所なり。紳士淑女乞ふ暫く休め、余は更に他の一部を案內し來らむ。

大波止より左に坂あり。登らずして右に折る、舊鋼勸工場たりし所、今本縣廳新築地なり。道に從ひて進む、本下町に入り築町に出づ。右に曲れば鐵橋あり、明治二年本木昌造の架する所、實に我國に於ける鐵橋の嚆矢たり。橋を渡れば東濱町なり、廣瀬博產場、長崎警察署あり、二枝鑑甲製造所其他の商舗軒を幷ぶ進みて右に折るれば石灰町なり、橋あり思案橋といふ。左に町田勸商場あり、少し、進みて三叉路あり、左に折る、即丸山遊廓に入る。遊廓は古より江戸吉原と並び稱せられ、維新前後諸名士の來遊せし處なり。

丸山に遊ふ

此の里はいつも春なる花の宴人の心も丸山の爰ぞ大手の二重門鎖して〴〵て歸さじと夜を晝とも萬燈の光り輝く高樓にのぼり〳〵て詠れば朱の玉垣稻荷嶽いつも狐のもの狂ひ酒池肉林の仙境はよりにはあらじ五十年保つ命の洗濯に洗らひすごして山吹の花のいろ香も厭はて〻猫も杓子も逃出し八ツ尾の狐の尾崎よりともす火かけはくらけれど道をたどれはこれやりの名にし負たる思案橋思案工夫もいでは こう河風寒く身にしみてすた〳〵かへるわが宿に

前麿山賦

（麿山は丸山なり在肥長崎歌舞地也）

文考

七月十日けふは貳萬五千日の功德とかや殊に女心の頼みたける物語の日なるへし此津の遊女どもの人も見追風に心ときめきせられて花すゝきなひきあひたる物へは男山もあたにたてりとみゆらんかしさるは浮艸の世にうかれて身をあたなりと見る人はいかにあたならむ今更あたりたる者たもひはなけれと左右の翠雛こしのそかれて顔をたきとろなからむこそうたてたもはるれ禿といふものゝ何心なくて茶漬喰たしとたもへるもいかなるあた人には馴てものおもふともならひてんどこれさへ哀れにたほへらる

草はなの名にたひ寐せむ禿とも

去來

後麿山の賦

十月八日はとふとき誓ひありてちかき山寺に佛おかまむこそこゝの遊女どもの月まってするなりもろこし舟も入つとふ湊なれは浦人のけしささへさわきて秋風の折にふれては葛の葉の恨み顔に磯邊の鴈の大空に吹なされてそゝろに人をおもひ驚くならむ夫か中にもはかなき世を契りもろともに苔の下にあらぬ心さへとりそへられてかなし見渡したる人々のをのか國ひゐきにものくらへて遊はむも雜波のうらのあしきさまにいはぬをとひたすらにあまの子のあさましとのみたもひあなつりて都の商人も手袋ひきたるためし多しとかやかゝる事なといひいたるへき事のほとにはあらぬを東花坊にこのなかめの賦つくりたりとほのめかされて終に後の賦のぬしとはなり侍りける

いなつまやどの傾城とかりまくら

丸山花月樓なゝ鶴の枕は彼の楊貴妃が遺物なりといひ傳へけるに　半顏居士

兎や角と誰れくちはしを入るゝへき千年前の鶴の小まくら

坂を上れば我國砲術中興の祖たる高島秋帆の居趾あり、今は寶亭といふ。右の丘上には西洋料理の開祖として有名なる福屋あり。

以上の數町は本市目貫の町にして雜貨、船具、時計、呉服、小間物、玩具、玻璃、甍甲等の商舗軒を爭ひ甍を並ぶ。店頭の陳列其妙を競ひ行人の眼を眩せしむ。卿等の兒孃は必ず其の袖を引いて其欲する所を購はむことを求むなるべし。殊に船大工町、本籠町は外國人向にして應接辭令甚巧なり。坂田甍甲工場あり、本籠町の左側に磯あり、數百級是元本縣病院のありし所。左すれば大德寺に至る、夏は氷店軒を列ね紅燈を吊し、冬は名物梅ヶ枝燒と稱する餅あり、下戸黨の賞味する所、諸君子味ひて名所話に誇りたまはずや。是より登り登れば佐古招魂社に至るを得べし。

本籠町を前に進めば古の館內十善寺なり。茲處は各種の野菜肉店等の軒を並ぶる所にして船艦及外國人向の品最も多し。舊唐館所在地にして今尙支那人の居留する所なり。

唐　館

寛永十二年幕府より自今長崎港を以て貿易地と定め諸外國船は長崎港の外他の港灣に出入すべからずとの嚴禁出でたれば從來平戸、薩摩等に航したりし唐船一時に此港に集りぬ。且彼等の中に妻妾を貯へて永住し、年月を累るに從ひ自由を働き土地の取締上此儘に爲し置くべからずと元祿元年奉行山岡十兵衛、宮城主殿、より平戸藩主松浦肥前守、島原藩主松平主殿頭に命令したれば、十善寺鄕の地を開き、當年より工事を始め同二年悉く成就せり。是に於て市中在住の唐人を殘らず此處に移らしめ、荷役、佛參及墓參の外猥に門外に出づることを禁じたり。其禁制の高札は

禁　制

一、斷なくして唐人構の外へ出事

一、傾城の外女入事

一、出家山伏諸勸進之もの幷乞食入事

右條々可相守之若於違背は可爲曲事者也

卯十月

及

諭唐船諸人

一、耶蘇教徒（俗曰天主教）以罪惡深重故其惡船所來者先年悉皆斬戮

折れて梅香崎町に入り、右に橋を渡れば新地通、左に折るれば大浦裏通にして辨天橋に至る。舊時戾

留地を管轄せし梅香崎警察署、横濱正金銀行、長崎支店及長崎ブレス社梅香崎女學校、郵船株式會社支店、長崎郵便局等あり出帥橋に出づ。

紳士淑女。今他の一部を市内目貫の町に誘ひ來れり。是より相共に携へて舊居留地に遊ばむ。

出帥橋を渡れば長崎稅關あり諸外國より來られたる旅客及貨物は一度必檢査を經ざるべからず。

此處よりは眞の海岸通にして右側は即潮水漫々幾十百隻の船艦の黑煙天に冲し帆檣の林立せる實に壯觀ならずや。

支那領事館、獨逸領事館、三井物産會社等あり、英國領事館今新築中なり。松ヶ枝橋を渡り左に折れ進み進めば出雲町遊廓、及外國人墓地に至るべし。橋を直に進みて長崎ホテルに來れり、當市隨一の旅館たり。更に進めば小曾根町、三菱合資會社長崎支店、長崎瓦斯株式會社、麥粉會社あり。麥粉會社は本縣内唯一の製造所なりしに本年六月誤つて火を失し全部を灰燼に歸せり。浪ノ平町には二ノ宮精米所あり。左に少し辿れば鎭鼎高等小學校あり、古河町を辿れば道殆ど絶え人家顚はる。小菅船渠あり。山に從ひ海に沿ひ曲り曲りて進めば戸町遊廓に至る。更に行き〳〵て女神檢疫所に至れり。見よ對岸の赤鳥居の樹林に隱見する所は男神にして金貸稻荷と稱して金に渴せるものゝ參詣する所、東南に突出せる所に石油タンクあり。前方僅々數町の海上老松枝を垂れたる一小島は鼠島と稱す。舊時蘭人の遊步場たり、夏時長崎游泳協會、都人子弟の爲めに游泳場を開きて教授す。其廣大なること殆想像に餘りあり。其南は高鉢島西は神の島にして昔秋帆の築きたりし砲臺は其南端に在り、四郎ヶ島といふ。西南に硫黃島あり、俊寛僧都の流竄せられたる所なりといふ。其東南に香燒島あり、松尾船渠は其北方に在り。頗る盛大なり、寺院あり弘法大師を祀る。南端より石炭を出す。端島、高島其南に海上に漂へり。兩島の炭坑は何れも三菱炭坑社の所有にして新式の機械を据ゑ付け盛に良好の石炭を採掘し、全國有數の良坑と稱せらる。香燒島の東海を隔てゝ深堀村あり、女神檢疫所より至るべし。背に山岳聳ゆ、八郎嶽とて近郷にての高山にして、猪、鹿棲めり。元來し道を辿りて歸り、麥粉會社の前を直ぐに行かむ。由來長崎は摺鉢の底、人家の稠密なるは其底部にして、其圓緣は忽ちにして厓、厓上路あり、路上家あり、屋上路ありて相重疊せり。唯舊居留地は概ね屋宇宏壯庭内寛濶而かも路ある處腕車を通ずるを得るの便あり。小曾根町より坂路を攀らば露國領事館、天主堂其他高壯なる建築物數多あり。遊覽は諸君子の意に任せむ。辨天橋を渡りて右に丘上を步せんか東山手に入る。米國領事館あり、又鎭西學館、東山學院、海星學校等私立の中等學校あり。其他活水女學校、梅香崎女學校等の私立學校あり。

新　地

太田南畝の

臨流四箇水門開。賈客帆檣此地廻。起貨更運滿庫日。吳綾蜀錦滿船來。

と詠せし所なり。初め唐商の貨物は江戸町、樺島町、五島町、大黒町海邊の町藏を借りて入れ置きたるに、元祿十一年四月二十二日後興善町末次七郎兵衛宅より出火。是實に長崎に於ける未曾有の大火にして火元は興善町、折柄吹き付くる南風に西は本五島町、樺島町、北は上下筑後町、東は立山役所に至る長崎の大半を灰燼に歸しぬ。時の奉行近藤備中守、丹波遠江守種種評議の末唐商の爲めに海中に築地を爲して土藏を造立せしめらる。元錄十二年に工を起し同十五年に竣成す。後清國人居留地となる。今も猶多く福州。漳州泉州人多く來り住せり。新地の「アチャサン」といふもの即ち是なり。

西濱町に至れば長崎米穀取引所、長崎薪炭株式會社、長崎製氷株式會社、右側三叉路に三井銀行支店清洋軒等あり。

銅座町は和蘭貿易代として相渡すべき銅を鑄さたる所、享保十年に始め、文久二年之を廢し、復、大坂にて隨時買入れて運送し來りたりといふ。

銀行の前を過ぎて少し〻く進めば長崎新報社あり、濱町廣瀬博産場に出づ、右に折れ左に曲れば一直線に殆ど市内の縱貫線たる道路あり。今は名勝を紹介せん爲めに折て再び今鍛冶屋町に至らむ。四叉路あり。前に進めば長崎電燈會社あり、油屋町に出で郊外茂木に到る道なり。八坂町に八坂神社、清水觀音あり眺望絶佳なり。崇福寺あり寛永六年明の歸化人資を聚めて建立したるものなり。八坂神社と電燈會社を隔てて向の丘上に一寺あり、正覺寺といふ。今鍛冶屋町口は東洋日の出新聞社なり。左に折れ第二の横街を左に折るれば劇場榮の喜座あり。折れずして寺町に入る。寺町は片側町にして右側の山麓は悉く名刹を以て充さる。大音寺あり元和二年本博多町の切支丹寺を毀ちて寺を建て大音寺と改稱し寛永十五年今の地に移せりとぞ。境内二萬三千坪、其廣きこと諸寺に冠たり。左に曲れば銀屋町にして九州日の出新聞社あり。晧臺寺あり。境内一萬餘坪、次は長照寺、延命寺、興福寺院、淨安寺、三寶寺、極樂寺、禪林寺なり。坂を右に上れば光源寺左に降りて右に折るれば、宮地嶽神社あり、無格社なれども市人の崇詣常に絶にず、清人の尊崇殊に厚し。境内劇場八幡座あり。少し隔りて水神社あり、承應元年澁江刑部の奉祀するものなりといふ。左に折れて橋あり、高麗橋といふ。河岸燈あり、海上安全と記せるあり。諸君子此四文字は實に奇ならずや。橋を渡れば伊勢神社あり、古伊勢大神宮祈禱所といへりしものにて寛永十六年九月修驗南覺院之を新にし高麗橋を營むといふ。寒し終て川に沿ひて進めば一宇あり長崎盲啞院の門札を掲ぐ。これ古の聖堂の跡にして正保四年儒者向井元升、幕許を得て學問所を東上町に搬建したるもの聖堂の起原にして寛永四年幕府地を與へて今の地に移轉せしむ。正殿の萬師世表の扁額は乾隆帝の勅書なりといふ。星移り物變して聖學振はず堂宇の敗頽、轉た感慨を催さしむ。然れども今尚天下の不具者を收容し有志相謀りて維持保存の法を講じつゝあり。希くば昔日の觀あらしめずとも此靈地を永遠に保存せんことを。

伊良林小學校あり、市立商業學校は地異に校舍新なりと雖、外國語學校の後身にして蓋し官設に係る

外國語學校の濫觴か。學校に沿ひ右に曲りて左に折る、此の邊一帶俗に菊畑と稱する所なり。右に折れて進む、花園あり、亦菊を植う。農事試驗場あり、丘上の蜜柑熟せり。更に進めば一の瀨橋に出づ、承應二年顯川道隆の架するものなり。舊時唐人の入港するもの此橋に碇繫することを得たりといふ。予が先に海上安全の燈籠あるを指して奇といへりしもの強ちに奇ならざるべし。舊街道に沿ひて進めば唐金塔あり、寛文二年疫病大に流行し、市鄕男女の死するもの三千三百餘人に及べり。因て無緣者の菩提所として當所に法華堂一基を建て、崇福寺住職唐僧即非を招請して佛事を修せり。即非の偈文あり、又黃檗山僧化林碧崖蟹瑤の筆を添へたり。是即無緣塔又は唐金塔と稱するもの。巨石塔上唐金の塔婆を安置せり。塔婆は鑄工カメ女の鑄る所、仰げば佛身活るが如く恍惚として身は淨土に在る想あらしむ。發句塚あり。

めにかゝる雲やしばしのわたり鳥。　はせを

ふる鄕も今はかりねやわたり鳥。　去來

文あり

稻妻やをさまるもとのあればこそ。　俗雲

と記せり。

新道開けたる處、蛇行して進れば右に登ゆるは彦山なり。

彦山

獨逸人は長崎港入港の時、此山を目標として進む。山形、比公の頭に類すとて「ビスマルク」山といふとぞ。長崎高山の一なり。

眉嶽穗月　沈燮菴

眉嶽同峨嶺。　峯高月古光。　每當秋夜半。　獨自步山前。

眉嶽暮雪　村岡重德

嶽高獨出衆山上。　總似兒孫膝下親。　六出漫天看不見。　暮雲開處玉嶙峋。

眉嶽の月を見て長崎の方言をつゝゝる　獨山人

わりたちもみんな出て見ろ今夜こそ彦山やさの月のよかばい。

長さきの山からいつる月はよかこんけん月はるつとなかばい。

この東南に登ゆるは

豐前坊

山形飯を盛りたるが如きを以て、飯盛山とも稱す。峻嶮にして攀づべからず、且危嶮亂立頗奇觀たり。是亦七高山の一。

豐前坊の麓、翠壁の溪間に屹立せるを見る、是本河内水道なり。道に從ひて進めば日見峠に至る。こ

の嶺は永祿十一年始めて道を開く。俗に日見峠といふ、古、佐嘉、高來の要路なり。東西に七面の坂路ありて頂上に到る。天正の始深堀氏と長崎氏と戰を交へたる時、長富氏兵を伏せ備へ嚴なりければ深堀氏利を失ひて退きたりといふ。日見峠と唱へるは此嶺上にて日を見る事の早きを以てなり。爰を長崎鎮治の境界とし、毎歳九月に長崎奉行著崎及歸府之節地役人當嶺上に出で迎送せし處なり。

日見峠の櫻

向井去來

書藥てもことたる花の木かけかな。

日見峠を超えて行けば坂の半頃に湯塚といふがあり。去來は長崎の人にして京師に住し蕉門十哲の一人なり。都にかへらんとして門人及親戚の別れを惜み此邊まで送り來りたるに打ち向ひ

君か手もましろなるらむ花すゝき

と打誦して互に袂を分ちたりと、いへるは是なり。中島廣足の

日見の山ゆふこえくれは雨雲のまやう梢になくほとゝきす

と咏せしは茲處なり。

鍬道開通前に於ける本港に入る唯一の國道なりしなり。道を湖畔に取り進むこと約十町、堤防あり、是舊水道にして幾多市民の反抗に屈せず當時の市長金井氏の計畫に依る。湖畔妙相寺あり、幽邃を極む。見よ、山秀でゝ巍峩たり、湖湾へて汪洋たり。林に紅葉あり、水に琴聲あり。山禽歌ひ、牧童答ふ。豊好個の畫題ならずや。後方に聳ゆるは烽火山にして昔、烽火山番所のありし所なり。

寛永十五年、天草一揆鎮定の後、御目代松平伊豆守信綱巡視して長崎表は外國交通の要津なれば若國禁の異船渡來する事もやあらむ。さる折に近國の諸侯に如何にして急報すべき。宜しく當山頂に烽火の臺を設け置きて、非常時變の際、狼煙を放つべき手當せよと、時の奉行榊原飛驒守、馬場三郎左衛門に命じたり。茲に於て初めて烽火臺を山上に設け、斧山といへる舊名を烽火山と改めぬ。此烽火は北高來郡多良嶽にて受繼ぐことゝせり。其後明和三年に中止したりしが文化五年、再興し後數年にして復之を廢したり。同所の高札は

條々

一、遠見番無油斷可相勤之若他山に於て不審成煙見ゆ候はゝ早速其趣可致注進事

一、於番所晝夜とも入念火之用心可相慎事

一、番所に女人差置候儀堅令停止乾用事無之者寄合遊興博奕惣て賭之諸勝負一切仕間敷事

附公用之外百姓遣ふ間敷事

右條々堅可相守者也若於令違犯者急度曲事可申付もの也

辰　十　月　　長崎奉行

滄海春雲捲龍淵。　崎陽囂市一彈丸。　西連五島東天卿。　烽火山頭極目看。

と詠せしは是なり。

古の烽火は電信電話の通信機關に跡目相續せしめて、今は山上どこしなへに眠れり。唯好古の資料たるのみ。

元來し道を再び、菊畑を左に見て歸れば先の黍餅屋に至る。暫時休みて名物を味はむ。

時も移りぬ、いざ歸らむ。右に師範學校、左に上長崎村役場あり。右に折るれば春德寺に至るべし。

同寺の後方の墓地に東海の墓あり、東海は寛永以降切支丹書物改役を掌りたる人にして墓誉請狂ともいふべき癖あり。其墓地は當時石柵に金銀を鏤めたりといふ。今尚當時を偲ばしむるものあり。此山は城の越といひて長崎甚左衛門の城跡なり、城廢れて山存せり。

故城懐古　　沈　燮　花

若年雄據地。　憑眺不勝情。　雉螺今何在。　山猶號古城。

春日携諸彦登古城山蓋往古長崎氏所割據也　　吉村迂齊

憶昔戰伐天正年。　今日登臨自悵然。　鐵石古城草。　英雄蒹葭半平田。

青山迎客如生色。　芳樹無人空鬪妍。　最此中稱異境。　龍巖時見起雲煙。

峯巒相匹而せる中此丘最攀登に適す。五六歳の兒女猶攀づべし。

春德寺山門内に發句塚あり。

（左側）　山裏に迷ひ子かへせほとゝきす。　　宇　鹿

（正面）　宿かして名をなのらする時雨かな。　　翁

（右側）　明月や西へひかしへ行くからす。　　紗　鹿

下れば松田鐘詰製造所あり。新大工町に劇場あり、舞鶴座といふ。長崎監獄と相向ふ。此町は我國活版の祖本木昌造の初めて呱々の聲を擧げし處なり。高麗橋を渡りて下れば濱の町に達するを得べし。

第二日

紳士淑女、昨日一日の巡覽に疲れ給へるなるべし。今日は他の方面に案内せむ。今日一日を地へ給はずは、可惜功を一簣に缺き給はむ。願くは來れ。

坂上長崎縣廳あり、今新築工事中に屬す、四ヶ年繼續事業なり。平戸町、大村町に入る。商業會議所神宮奉齋會あり、日本生命保險會社長崎支店は今新築中に屬す、鎮西日報社あり、向側は興善町女兒小學校なり。豊後町交番所に出づ。

縣廳前を行詰めて左に折るれば、萬歳町に出づ、此町は元島原町といへりしも、聖上御巡幸の折此町に御輦を駐めたまひつれば紀念の爲に町名を改め呼ぶこととなれり。長崎地方裁判所、長崎區裁判所及長崎控訴院右側に相並べり。左側には本博多郵便局及新町高等小學校等あり、校内實業補習夜學校あり、

篤志家和泉嘉七氏の經營に係る。左に折れて豐後町交番所に出づ。今相合したり、茲處は櫻町なり、鍾樓あり。昔時より市民に毎時間、時間を報じたりしが、近年午砲の設あるに及びて之を廢せり。同所にて製する洗粉は長崎洗粉と稱して其名、高しゝ。長崎市役所あり。右に折るれば西彼杵郡役所あり、右側に稅務監督局あり、今新築工事中なり。勝山高等小學校、同尋常小學校あり、其設立最古く歷史ある學校なり、參觀し給はずや。茲處の一部は古、勝山左近屋敷にして後、代官高木作右衞門屋敷となれり。四叉路に出つ。

左に折れば右に知事官舍あり、左隣は長崎縣立長崎中學校なり。古の立山役所の跡にして、松平圖書頭の割腹したりし處は同校職員室の中程なりといふ。庭內奉行役所の遺物手水鉢、高麗燒等あり

前にもいへるが如く、文祿元年肥前唐津城主寺澤志摩守廣高を奉行に任じ、本博多町に新に屋敷を建て平常は家臣をして勤番せしめたり。然るに寛永十年寺澤屋敷即奉行所より出火したりければ、森崎の地を以て奉行所と定めて役所を移せり。其後寛文三年復類燒の災に遭ひたれば更に敷地を廣めて新築す。延寶二年奉行牛込忠左衞門在勤中、兩人の奉行門近く役所を構ふる事不可然とて岩原鄕の地を拓き役所を建てたり、是を立山役所といひ、森崎の役所をば西役所といふ。文化五年八月十五日外艦港口に來り、小艇數隻を泛べて海岸を巡視上陸したりし時、奉行松平圖書頭康平は之を防ぐことを得ざりしを以て自刄して罪を謝したりし處は、即ち此立山役所なり。今の縣廳舍新築地は即森崎役所の跡なり。

さて此の立山役所は長崎が葡萄牙外敎支配の下に在りし時、彼等が「ヘヤノドサンダ」といへる大寺堂を建てたる所、所謂一變して「カゾリック」敎會堂となり、再變して立山役所となり、三變して長崎中學校となれるなり。校門を過ぎて稍淋しき片側町に入る。橋を渡れば金比羅神社に詣づるを得べし。道を辿れば山皆拓かれて畑となり、畑畔櫨あり、數百千株、二月の花よりもまさりぬべし。願ればは蟻の如く、船は豆の如く、地あれば家あり、地狹くして人多く、海は埋められて市街となり、庭園毀たれて軒並べり。一家數戶、各炊爨を異にせる樣を想起せしむ。登りつめし處、神祠あり大物主命及崇德天皇を祀る。後方廣濶、金比羅の風揚と稱するものは茲處にて行はる。若夫れ舊三月十日、秋を此山に曳かひか、各細き「ヨマ」を操りて互に輸贏を爭ひ、風は大空に飛揚し人の操るに任す。頗壯觀を極む。昔蜀山人が風揚げ見むとて此山に登りける折、番茶も出ばなの若き下女體のものが重箱取り落して打破りさめ〴〵と泣けるを氣の毒に思ひて

一里二里三里尻から五里無理に七里バッチリ栗色の重。

と詠みて取らせたれば主人の怒も解けたりといふ。は此山道なり。近藤守重の建てたる碑あり。

瓊杵尊古蹟

此山爲尊之古蹟昭々矣然無有文獻足以徵者焉今立石勒之以詔後之好古者

寛政八年秋九月

烏帽子山、狹戸山、茅山等の諸山皆其麓にあり、西山は古より健康地として貴ばる。立山は世に「タテヤマノブタノクソ」と十數にまで唄はれし處、共に山麓を開きて畠となせるが故に、畦畔斷崖多く樹うるに檜を以てす。今や秋風淸く、霜露錦を染めて深紅炎にんとす。樹間一片の石を拂ひて下瞰すれば、港口開きて茫々天に連り、布帆大船相接して去來す。西山は觀月を以て名あり、日既に稍佐嶽に沒して明鏡已に蛾眉山に懸る時、眞に是絲煙滅し盡して光輝發するもの千古の愁を澄蕩して霜露の衣袂に入るを忘れしむ。富豪の別墅多くは玆處に在り。

立山秋月　　明　林上珍

林疎桂影纍秋華。　頃刻澄天俯萬家。　盡放寒光環杵兎。　高懸素魄得歸鴉。

西山紅葉　　沈　燮　菴

爽氣西山勝。　楓林著色新。　休嫌秋冷澹。　粧點似三春。

大塊文章富。　秋來樹著花。　峰連西蜀錦。　池　玉　田

桃源宛在家。　捲簾憑眺望。　好景共誰誇。　海倒赤城霞。　金谷時留客。

奥院あり。右方の谷底は西山水道なり。左方は郊外浦上山里村なり。再び降りて上筑後町に入る、同町は琴比羅山脈の西南に斗出せる下笠頭山（俗に女笠頭と稱す。支那人は望莫山といへり）の麓を繞れる町なり。聖福寺、福濟寺、本蓮寺等あり。本蓮寺は法華宗本國寺派なり。福濟寺は唐僧覺海、了然等漳州人に寄附を募りて、寛永五年之を建てたり。故に世に漳州寺或は唐寺といふ。本蓮寺の山門を出でゝ舊道を進めば小高き處に出づ、西坂といふ。玆處は舊、時津街道に當れり。西坂は寛永十五年、南高來郡島原切支丹宗門一揆の張本、益田四郎を始め其餘三千三百人の首を埋め、塚を建て、此を有馬塚又は邪宗塚ともいふ。同十七年呂宋國船一艘渡來す、此旨江府に聞えて、加々爪民部少輔、上使として來り、南蠻船日本渡海致間敷旨先年申渡置處押て渡來したるは曲事たるにより刑に處すべしと申渡し、一船乘組七十四人之内死闕に當りたる六十一人を刑し、塚を建て是を南蠻塚といふ。死闕に當らざる十二人は阿蘭陀船歸帆の節、便せしめ本國へ追ひ歸したりといふ。

一覽し終へて諏訪公園に遊ばむ。八百屋町角を曲りて坂あり、石を敷けり、玉園山一帶、松樟高く聳えて蓊鬱、前には數千百株の櫻樹葉既に落ちて老幹嵯峨たり。左は交親館なりしも今は長崎縣假廳舍となれり。右は長崎商品陳列所にして、市の經營に係る。構内、長崎文庫あり。孔雀あり、花卉あり。館に入れば先づ眼を射るは長崎甑甲細工なり。階下は賣品にして階上は多く參考品なり。此處は古の安禪寺の趾なり。

諏訪公園

ダンダラ坂を上れば、伊東元帥、樺山、野津大將一行の手植の松あり。(蘭醫「シーボルト」の碑立てり。)

其文に云はく

使歐洲各國知有日本者施君之功也使日本知有歐洲各國者亦施君之功也蓋我邦絶交外國也久矣自君未我邦我邦之名大顯於彼而彼之交際制度學術始得其要領焉君已威里貴族博學多才兼長醫術以我文政六年初到長崎醫療之暇觀我風土民俗通報之於歐洲而乎素留意植物移栽之其本國五百餘種相土種殖如此者三十年我邦草木終遍歐洲其學徒言日本植物者皆宗施君云西暦一千八百六十六年君病歿於門占府後七年各國農學家爲謀君記念塔於其生地澳傑以埃國農學公社爲理事局移文遠近廣乞資助大隈寺島佐野諸公首讚此舉明治八年九月遂與伊荷埃日四公使會于華族黑田老公邸倚議以老公與君嘗曰有親交推爲議長戸家伊藤二子爲幹事募同志者非月而獲金八百六十五圓餘將悉數送之荷國公使威君自與其資助歐洲也寧別建一碑使斯土之人永弗設君功願不美哉碑之存於日本抑亦君之志也衆成然之乃輸金六百圓而留其餘長崎入下見國爲施巨石國吉今嘗君遺宅者遂建碑長崎之公園實明治十二年三月十日也嗚呼君之寓長崎邦人受醫藥草木之學者相鍾如戸家伊藤二先輩爲其翹楚嗣後我邦洋學駸々日盛自以曉歐洲之交際制度學術嘉永安政間力排鎖國攘之論締和親之約者豈非賴洋學家而然耶則馴致今日之文化者其功竟不得不分諸施君也歐洲學者稱君爲發見日本於學術上之人尚不經矣爲之銘曰

觀我國華。　傳諸歐土。　偉功夙成。　英名萬古。　刻之貞珉。　永在瓊浦。

明治十二年歳次己卯春三月　　東京大森惟中撰文　　長崎乾堂榮　篆額并書

あり。少し登らんとすれば白首(但資婦にあらず)二三「オハイリマッセ」「オヨリマッセ」と長崎方言にて客を呼ぶ。殊に「マッセ」の語調の力あるは公園特有語。左すれば武德殿右すれば元日櫻に出づべし。其中程を取りて進めば左に故長崎病院長吉田健康氏の銅像建てり、少し前に故縣令北島氏の紀念碑、右に「グラント」將軍の紀念榕樹あり。後の碑に神韻漂渺たる將軍自筆の英文、其譯に

縣令內海忠勝君の需に應じ余室家と共に各自榕樹一枝を長崎公園山に栽植せり願くは雙樹繁茂成長し永遠の壽を保ち以て日本の將來を表明せひことを

紀元千八百七十九年六月二十二日　　日本長崎に於て　　ユーエス、グラント誌

不幸、雙樹一は既に枯れたり。一は根部より二つとなりて繁茂せり。榕樹は熱帶植物なれば珍しきもの。其後に從三位子爵山岡鐵舟、正三位男爵龍手田安定氏の碑あり。登れば東照宮祠建てり。賽して下れば復「オハイリマッセ」を聽く、喧し。楊に凭りて全市を見晴すも可、一椀の茗を要ひるも可、啜りながら食ひながら眺むるは更に最妙。元日櫻は舊暦元日頃咲き出るを以て名あり。古より神前に一

枝奉行に一枝是流例なり。櫻より離れて山手に碑あり、

天門山斷海門開。　岸上人煙擁鎮臺。　處々白雪飛不止。　秋風一片布帆來。

南畝　太田覃

四方歌恒

あらそはぬ風の柳の絲にこそ、堪忍袋ぬふへかりける。

と同一碑面に刻せり。其傍に發句塚樣のもの立てり。唯茶亭の導所と相接すれば見るも氣の毒、蜀山人もかく茶亭の爲に日蔭者と扱はれても必ずや冥土の旅路、柳の絲はなくとも堪忍袋確と縫へるなるべし。池あり水湧けり、右に茶亭二、厓下に一あり。憩ひて長崎の風光に浴し給へかし。御手洗に手洗ひ嗽ぎ心の汚拂ひ去つて拜すれば、西行が「何事の御座しますかは」は眞に是、尊さに涙こぼるるなるべし。突き當りては宮司の官舍、石階を下れば磁器の大燈籠、下に軍艦赤城の奉納物、青銅製の馬、五厘金の碑等あり。

ここ廻廊に坐せんか、樹木蓊鬱として蒼猶暗き中、點點紅葉を認むべく。彦山、烽火岳の連山は高く東天に聳え、笠頭、城の越は近く眼前に横れり。其他勝景の地、神社佛閣の秀、一一指點すべし。

天正年間、切支丹徒祠堂を燒毀するに及び、邑民田川氏、三社の靈を圓山の地に移して竊かに祀れり、元和中、佐賀の修驗金重院賢淸、神社再興の志あり。長崎に來りて有志と謀り寛永元年奉行谷川權六郎に諏訪再興を請ふ。奉行、代官末次平藏に命じて丸山の地を相して社地と爲しむ。然れども切支丹徒の防害甚しく衰するもの殆絶ゆ。同十一年奉行榊原飛彈守新に任に就くに及び、計を設け、策を施して尊崇せしむ。之より九月七日、祭事を行ふ。是諏訪九日の初なり。正保四年、此地に社を選し、寛文九年、境内除租の朱印章を賜ひ、十二年には踊町を定め、享保八年諏訪神社に正一位を賜ひ、寛政七年靈元天皇の宸翰を本殿に揭ぐ。明治二十八年七月、國幣小社に列す。

牡丹餅は此處の名物なり。磴あり長坂といひ、降り終へたる所を踊馬場といふ。十月七日、神輿、渡御するの前十一町踊を奏す。此の日長坂の兩側人を以て埋められ、渡御の前夜八九時頃より來集するもの無慮數萬、多くは是壯夫、夜を徹して踊町の來るを俟てり。蓋、彼等は舞蹈の優劣を品騰する權を有せり。故に踊町より此處にて踊を奏し終へて、將に舞臺を廻さむとする際、「所望〳〵」と呼ぶ聲あれば、再び喜び勇みて奏演す。かく呼返さるる事彌多く、奏演すること彌多きは是舞蹈優秀の名譽を博するものと稱せらる。

稍降れば背銅の大鳥居あり、一條關白准三宮忠良卿の眞筆、鎭西大社の額揭げらる。是より左方は西山と稱す。西山に入れば松森神社あり。寛永三年、川上光房今博多町の地に奉祀せらるるものの後にして、左甚五郎の鑿に成れりといふ職人盡しの彫刻物あり。西山女兒高等小學校、高等女學校、川を距てて長崎高等商業學校あり。見下して進めば西山水道に達すべし。道を高等商業學校の門前に取り、馬町に出で、出來大工町を經て今博多町に至れば、長崎縣教育會事務所あり。今魚町に長崎縣農工銀

行、丸瀬洋風家具製造工場あり。行きつまりて右に折れ、左に曲れば、酒屋町、袋町には長崎幼稚園、あり、長崎基督教青年會館あり、各一角を占む。材木町に青物市場あり。左に折れ、右に曲りて築町に入り、本下町を經て大波止に達するを得べし。

是より再び會場前に至り、幸町一丁目を通り、長崎病院に至らむか、或は汽車にて浦上驛を經て至るも可、そは諸君子の擇ぶに任せむ。病院は琴比羅山の西麓にあり。本病院は文政六年、墺國人ドクトル、シーボルド氏此地に渡來し、醫吉雄、楢林等の邸に於て醫學の教授及施術を爲せり。是本邦西洋醫術の始祖にして實に長崎病院の起原なり。

安政四年、蘭醫ポンペを聘して醫術傳習所を設け、文久元年、更に病院を小島郷、稲佐岳に設立し、之を養生所と稱し傍ら斯學を講せしむ。是本病院の前身にして又長崎醫學校の創始とす。慶應元年。精得館と改稱し、明治元年、長崎醫學校と改む。明治七年征臺に際し蕃地事務支局附屬病院とせり。爾後幾變遷、明治三十六年新に建築移轉したるものなり。土地の高燥、建築の堅牢、設備の整頓等實に九州屈指の病院たり。一覽して後方、長崎醫學專門學校を參觀し、再び井樋口町を右に折れて玉浪町、梁瀬町を經て、稲佐川に沿ひて溯れば長崎要塞砲兵大隊に達するを得べし。

會場より稲佐橋を渡れば稲佐郷に入るを得む。稲佐は舊幕時代より日清戰役後旅順及大連の租借地を獲るまで露國東洋艦隊の避寒地たりしを以て露國との關係頗深く、幼童婢僕猶且露語を操ること巧なり。然れども互に劍戟の間に相見ゆるに至りて艦隊復來らず、敦賀新に開けて此地に遊ぶもの殆稀なり。寺あり、悟眞寺といふ。慶長の初華導寺の僧崇碧切支丹徒の妨害を避けて稲佐浦に潛み、草庵を結び郷民を勸化す。後寺院を搬立す。古の所謂唐人、和蘭人、露西亞人は多く此寺に葬る。寺背は直に山に連る。稲佐嶽是なり。稲佐公園あり、本年新に開く、設備未だ整はざれども眺望絶佳、諸君子幸に一遊せよ。一巡して坂を降れば玻璃製造所、ラムネ製造所あり。黄金橋或は旭橋を渡りて水の浦を過ぐれば。長崎要塞司令部あり。小迫門を通り抜くれば瀬の脇、他之浦なり。對岸大波止より或は元船町より渡海船にて來る方却りて宜しからむ。三菱造船所及船渠あり、東洋唯一の船渠は立神に在り。一萬三千餘噸の天陽丸は九月新造進水式を擧げたり。

海岸の延長は即殆長崎市の半にも達すべし。職工は約一萬、諸君子旅館の夢猶暖なる時、既に彼等は其工場に業を執り、夕陽既に稲佐岳に沒して燈火室を照し、長崎料理に陶然と醉ひ給へる時彼等は漸く其業を離る。嗚呼我國造船業の發達は實に孜孜營營として勤むる職工によりて爲されたるなり。所主は即富豪三菱岩崎氏にあらずや。其創設は遠く安政年間に在り。同所製造船舶の堅牢なることは歐米人の常に嘆賞して措かざる所なり。西泊には電線貯藏地あり

第二章　佐世保市

第一節　概　觀

二十年前の一寒村、今や金城湯池の堅めとなり、戶數一萬五千、人口七萬五千の一大市となれり、早岐――佐世保間の鐵道敷かれ、海には數十の艦艇常に出入して防備の任に當り、陸には諸般の設備整頓し、日清、日露の役共に海軍の策源地として船艦の修理、兵器の製造、彈藥及物資の供給等總て此港に於て營まれたりといふ。

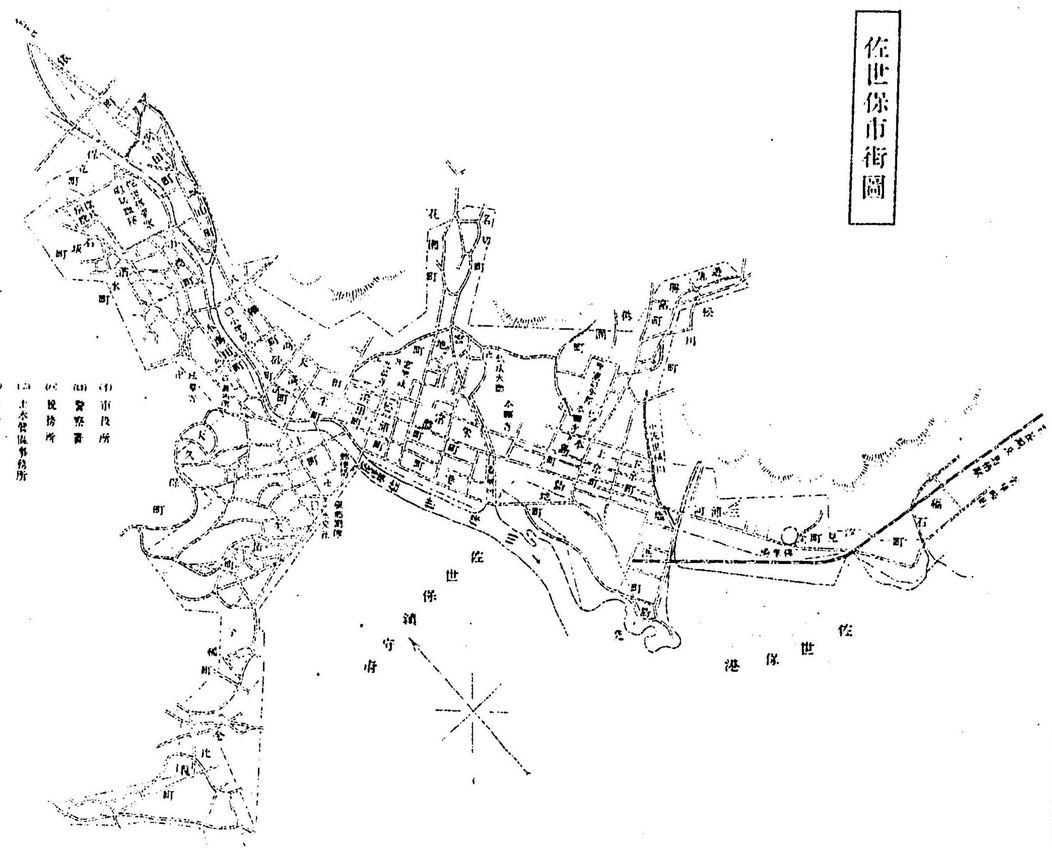
新に開かれたる此市街、街坊の整頓設備總て新式の規模に成り、水道は敷設せられ電話は架設せられ駸乎として發達改良せらるる本市は今後十年間に於て如何なる程度に達すべきか殆想像の外に在り。

市役所は、八幡町に在り。目貫の町としては、京町、榮町、松浦町、常盤町、相生町、高砂町等にして常に雜閙を極む。此地、古への島の地山を削り、田圃を埋築したる所、滄桑の變、轉た、感慨を催さしむ。明治二十二年　叡聖文武に渡らせ給ふ天皇陛下には鎭守府に行幸仰出さる。行幸橋は、當時の紀念として命名したるものなり。海軍橋は其構造最も新式にして未だ多く其比を見ずと稱せらる。

鎭守府

鎭守府ありて、始めて佐世保市あり。其市内を殷盛に導くこと甚大なりと云へし、海軍病院の如きは其設備最も整頓せるものなりと云ふ。

佐世保市街圖



茂木市街圖

口之津市街圖

景勝の地には福石の霊地、眼鏡岩の奇勝あり。料理屋には、萬松楼、卜一亭、伊呂波楼等、其の名顕はる。旅館には鶴屋、池月、油屋、福徳等名あり。

第三章　西彼杵郡

第一節　概觀

東は北高來郡に接し、東北は風波穏かなる大村灣を抱きて東彼杵郡と相對し、北は佐世保灣に臨み西及南は總て大海に面し到る處無數の島嶼点布し山の風光漫に遊士をして嘆賞措く能はざらしむ。郡内良港に乏しからず、茂木、野母、福田、面高、時津、瀬戸、松島等其重なるものなり。山岳甚だ高からずと雖蜿蜒として相連れり。就中八郎が岳、岩屋山等は其最秀麗なるものなり、前者は海拔二千百四十二尺、後者は一千四百四十尺。山脈地形と相並行して走れるを以て川流の記すべきなし。

交通は元九州鐵道の長崎線にして諫早驛より走つて喜々津、大草、長與、道の尾、浦上等の各驛を經て長崎驛に入る。

國道は北高來郡諫早村より、喜々津、古賀、矢上の各村を經、日見峠の嶮に沿ひて長崎市に入る。

縣道は浦上山里村より道の尾に至りて分岐し一は外目を廻り、一は内目を廻りて面高に到りて相合す。一は長崎市より小ケ倉を經、土井首、深堀村に達す。一は長崎市より茂木港に達する此四線あるのみ。

從來、交通は多く舟楫の便に依りたるが故に道路の修築未だ完からず。

長崎港＝深堀＝香焼＝蚊焼＝野母線及島原、口之津等より茂木港に至る線と大村より大草驛とを連結する一線あり。

戸數二萬九千六百八十三人口十七萬五千三十六、郡役所は長崎市内櫻町に在り。郡内を上長崎、小ヶ倉、土井首、深堀、香焼、蚊焼、伊王島、高島、高濱、野母、脇岬、樺島、川原、爲石茂木、日見、矢上、喜々津、大草、伊木力、長與、時津、村松、長浦、龜岳、大串、瀬川、面高、黑瀬、崎戸、江島、平島、七釜、多以良、瀬戸、松島、雪浦、神浦、黑崎、三重、式見、福田、小榊、浦上山里、西浦上の四十五箇村に分つ。

重なる島嶼

長崎港を擁する無數の島嶼中、高島、端島は僅に莖大の孤島なれども良好なる石炭は海底深く祕せられ殆無盡藏の觀あり（詳細鑛業部に在り）。鼠島は全島老松鬱茂顏勝景たり。昔は和蘭人の遊歩場、今は市民の游泳場、市民の健康實に更期の游泳に依りて保持せらるるの觀あり。游泳場としては其適當なりとは斷言し難きも而かも日日數萬の游泳者あるに至つては如何に市民が健康を重んずるかに驚かざるを得ず。神の島の南端に四郎が島あり、我が國砲術中興の祖と仰がれし高島秋帆が砲臺を築きし處なり。周囲二三町に過ぎざれど井あり。水甚清洌、古巨砲を据へたりし處今猶歴然たり。伊王島又硫黄島と書す。港口島嶼中最大なるもの、中に一寺あり長福寺といふ。堂の前に古墳あり。傳へいふ俊寛僧都の墳なりと蓋是眞ならむ。一片の石苔蒸して蒙茸之をさとふ。衞來歳月幾星霜、風雨侵蝕剝落して又文字を辨すべからず。俳人勝木枕山、一掬の涙を灑ぎ新に碑を建てて其靈を慰む。其文に

俊寛僧都墓碑銘

相傳僧都左遷硫黄島以文治二年丙午四月廿二日竟殂于配所其臣有王丸葬之植松其上即此蓋距今得五百七十二載云事在國史可徵也今玆天龍法印立石于松之傍需余記之且俾後世不誤古蹟

銘曰

松而墓矣。　誕古信今。　人之鄉德。　疇不傷心。

維時

寶暦六稔丙子之秋

いはふ島にわたりて

いまも猶沖の小島の松が枝にあととふものは八重の汐かせ

芙蓉介　紫石撰

武庫山主法印天龍　同立

崎鎭隱士勝木枕山　同立

同邑譯生馬白頭敬書

高島重金

足すり石てふを見て

數ふれは七百年あまりふる石の其名に苔もうつさりけり

俊寛僧都の墳墓を拜みて　饒田喩義

いにしへをしるやとことへは古墳の松の風はしるへかほなる

俊寛の墳と聞て　百華園流芳

千早振神をいはふか島もりの身にやこたへん沖津しほかせ

西角の燈臺は白色の光を放ち海上射光二十餘里に達すと、香燒島は深堀村の西に横はれり。昔僧空海入唐歸朝の折此島にて護摩を焚き修法せしより香燒島と名づく、西南部に石炭を出す。往往化石あり、多くは貝殼の化せるものなり。

瀬戸、松島　共に郡内勝景の地、松島は瀬戸村の西十三町、周圍僅に四里に滿たず、灣内水深くして清澄好碇泊場たり、傳へ云へ、昔平家武運盡きて壇の浦の一大惨戰を爲し、死屍海を塞ぎて海水之が爲に赤く、殘し得たるもの唯平家蟹のみ。僅に生きながらへたるは或は對馬、壹岐、等の島島に逃れたり、松島は即此平家の落人の漂著したりし處、されば語調風俗悉く今に至るまで異れり。炭鑛あり。昔ては三菱よりも試掘したることもありしかど良炭を得ざりき。一昨年古賀善兵衛氏の手に移りてより良炭層を得て今は一日二十五萬斤を出すといふ。崎戸島と一丈三尺の良炭層に突きあてたるは五六箇月前、採掘するに至らば其利尠少ならざるべしといふ。神の寶庫を秘する何ぞ深き、崎戸島は船著きの好き港、掘りて直に船積することを得べし。

其他大島、蝸浦島等數多あれど悉く記さず。

第二節　農　産

米、麥、大豆等なるべし。甘藷或は其第一位にあるべし。市附近は野菜の名產地、茂木の枇杷、伊木力の蜜柑は中外に其名聲を藉かす、蜜柑は大草、長與等の驛驛に下車し、一列車遲れんには充分の視察を爲すことを得べし。上等蜜柑は特に肌膚悅澤、其肥料の成分異るを以て貯藏して春時に及ぶとも水分蒸發し爲めに其味を損するが如きこと無く大さ一尺に及ぶもの少からず。蓋天下の珍、露人の最賞味する所。

第三節　水　產

全郡多くは漁家、鰯は内目を除く外各地之を漁す。鰹節は野母節とて名聲高し。雲丹は松島、崎戸、其最、海鼠綿（このわた）は内目伊木力、時津、眞珠は内目、長浦、龜岳、大串地方にて年年十數萬圓の收入あり、將來益收入を增加すべき見込あり。斯の如き漁獲物を鮮魚の儘長崎市に輸入するもの一箇

年五十萬圓を超ゆべしといふ。

第四節　名　勝

茂木港

山に從ひ谿に沿ひ右に折れ左に曲り、千林萬壑宛らに錦を張り清溪潺々として流るるものは沿道の風色にあらずや。一條の車道盡きて漁家、漁家盡きて碧海現はる。秀でて天に冲し煙雲常に濛濛たるものは温泉嶽にあらずや、萬里の波濤を隔て模糊として横はるものは天草群島にあらずや。潮滿へて漫漫、布帆の來往、汽艇の出入常に絶えず。料亭三四、酒を命じ潑剌たる鮮魚を味ひ以て此絶景に臨めば詩興湧きて禁ずる能はざるものあらむ。ホテル、旅人宿、料理店、廻漕店等軒を並ぶ。長崎よりの人力車賃通常三十錢乃至五十錢

道の尾公園

長崎驛より第三驛道の尾驛に下車、或は僅に一里内外なれば自轉車又は膝栗毛を試むるも可なり。沿道の風色渥丹の美を呈せり。殊に黄金色の蜜柑の枝も撓はゐに幾百千株、畠一面山一面に連り、秋の千草の咲き亂れたる小徑を辿る。塵寰既に遠かりて桃源の境に近づくを覺ゆ。徑盡きて温泉あり、庭は公園に連る。庭中主人の丹精に成れる白菊黄菊箱に傲りて咲けり。頗幽趣に富む。亭あり多くは紳

士連の占領する處、唯散策を試み自然美を感受せんと欲するものは直に公園に到る。公園は山頂を拓きて設く「テニス、ベースボール」を試むべく又眺望絶佳、一日の清遊を試むるに可なり。

時津鹽湯

道の尾驛にて下車して行く。一時間ならずして達すべし。長崎より自轉車、馬にて行くもの多し。殊に春秋二季、學生の遠足を試むること甚盛なり。此地汽車開通以前には早岐、大村方面より長崎への唯一の要津なりき。海は大村灣の一部、潮水清澄浴後庭上綸を垂るべく、船を賃して風色に飽くべく、樓に上りて鮮魚を味ふべし。市坊古への盛なしと雖警察署郵便局等あり。

鯖くさらがし

地名考に爛魚巖と書けるもの正に是。時津街道の傍に在り。蜀山人が

岩かどにたちぬる石を見つゝをればになへる魚もさはくちぬべし

と詠じたるもの、昔魚商此巖下を過ぎんとして「まて暫時、墜ちての後に行かんを」と仰ぎて巖の墜つるを待つこと多時、魚悉く腐りて巖遂に墜ちず。寧永久に遂に墜つることなかるべし。さはいへ。仰ぎ見れば巖上巖ありて危く峙ち今にも墜ちぬべき勢あり。

瀧の觀音

緣起は神社佛閣中に略ぼ述べたり。長崎より三里、舊街道矢上驛より瀧の觀音路に入る。道幅廣く、

且稍平かに以て車を通ずべしと雖、丘に登り谷に下り一歩一歩幽邃の境に入る。樹林濃に楓櫨霜に傚きて處處錦を織る。寺院あり、長浦山觀世音寺と稱す。寺背湍あり。直下十數丈。甚高からずと雖、水聲轟轟として潭に下る。潭水盤廻岸を嚙み岩を躍つて流る。蓋勝景の一なり。此中岩麓隙往往にして拇指大の水晶を出すことあり。

御崎の觀音

肥之御崎圓通山觀音寺といふべきを俗に鷹之岬觀音と云ふ。野母半島の海中に突出せる一角は野母半島一角は即ち御崎なり。御崎觀音の前約十四五町は一面の島なれど往時此邊一帶に海にして、船は直に山門に至ることを得べかりしならむ。域内幽邃塔堂古色蒼然、一たび域内に遊ばば忽俗氣を拂つて六根悉く清淨たるを覺えむ。緣起に依れば。

夫圓通山觀音寺者元明天皇御宇和銅二己酉年行基菩薩創之建一宇本堂並三十三箇寺院南濱構大門十王堂仁王門等伽藍具足之勝區也本尊大悲千手觀世音菩薩長八尺立像也地藏菩薩四天王十六羅漢等安之皆以行基所造也鄕人傳語往昔肥之後州宇土郡一架橋夜夜放異光惱亂行人時俗名殺生橋恐懼甚行基游歷彼地聞怪異事而愍悲哀便斬斷橋七分放捨海中誓曰於橋木流著之處刻彫觀音像七驅矣材木漂著七所浦謂竹崎觀音寺室崎觀音寺湯江和銅寺岩戸觀音堂田結觀音堂下松浦郡石山淸嚴寺御崎圓通山是也世俗謂七觀音蹴中當所登像神驗效驗衆多也

後宇多院御宇弘安四年辛巳五月廿一日蒙古兵船四千有餘艘賊徒二十四萬來到當郡高島演謀侵我朝主上勅宣須筑紫軍兵盡叡發向矣于時圓通山奇火忽然起而南北相連十里程發光耀半天蒙古恐怖而不敢近陸地同年七月廻猛風俄吹惡浪急峻賊船皆碎狀徒沒溺破損片板數多流來化爲岩礁今在濱面也是衆怨悉浪敬神力其一也元亨釋書十一曰釋叡好三昧和尙之門人也與橫川勝行結友游歷諸勝地到肥前之肥御崎此地日域西面之隅奇石異木遍他所觀音地藏來應之區也云々

北翼爲の嘴及尾骨幷に附屬書類大隈伯母堂の奉納に係る自製曼陀羅にて織りたる佛像等の寶物あり。長崎より約十里。汽船の便に依らずば山道崎嶇たり行步甚艱ひべし。

伊之浦瀨戸

地僻遠なるが故に、未だ猶く知らるるに至らずと雖、實に天下の奇觀たり。

周囲凡百五十浬の大村灣の潮水を呑吐する水道僅に二あり。其一は狹小にして記すに足らず。一は伊之浦瀨戸即是なり。瀨戸の長さ約五浬、其兩岸相迫れる處百間に滿たず、中に辨天島あり。疎松偃蹇頗る幽趣に富む。市杵神祉あり。干滿の潮盛んに流るる時、俄に一大瀑布を現じ、韓々潺々、旋渦到る處に起つて萬雷轟き、辨天島、搖く。大艦巨船悉く內外の潮水の平均するを俟つて航行するにあらずばん通すべからず。殊に陰暦三月三日の節句潮と稱するもの壯觀を極む。沿岸の人士、行厨を携へて遊觀す。山靑うして水淸く、大小の魚群流域に躍る。